

558
31



始



三島中洲先生題字
山田濟齋著



明學精義

王學會

大正
15. 11. 20
內交

祖
速

黃菊

自序

王子の眞精神は致良知の三字に歸入す、其簡易直截なること以て尙
 ふる所なし、其れ唯簡易直截なり、之が研究の難は却て尋常に倍する
 者あり、蓋嘗て惟ふ、斯學を究めんと欲する者は必二方面よりせざる
 可らず、第一は王子の經歷とす、蓋王子の一生は悉く學問工夫の過程
 にして、其過程に就き立説の變化と其進境とを系統的に體究するは
 最缺く可らざる要件なり、是れ系統門と稱すべきか、第二は立教の教
 義とす、前篇の經歷を經とせば、教義は猶緯の如し、各教義の聯絡立言
 の眞旨を仔細に究明して、始て斯學の體段を窺ひ王子の精神に透入
 すべし、是れ教義門と稱すべきか、二門已に開かる、斯學の研究希くは
 遺漏なけんか

既に二方面に従事す、猶一大秘鑰を遺せり、蓋斯學の精は知行合一に

家学

八十六叟中創起



在り、否、行の一字實に知を總攝して餘義なし、されば苟も斯學を究めんと欲して之を文字に求め理解に問はず、猶轅を北にして南せんことを求むる如し、必達せず、吾人宜しく之を行上に究むへし、行の一字は實に斯學の秘鑰にして畫龍の點睛たり、龍睛已に點ず、八十一鱗悉く活く、一行字の工夫精到せば、王子五十七年の面目は眼前に躍り、各教義亦双を迎へて解くの快あらん

更に銘心すべきものあり、聖賢の言を立て教を垂るゝや、年々進み境を化し終に終期ある可らず、孔聖は七十にして心の欲する所に従うて矩を踰えずと謂へり、天若し其壽を假さば、更に八十の進境九十の新得あらん、王子晩年其の五十歳以前を以て郷愿の意思ありと云ふ、今は只良知を信し纔に狂者と做り得たりと謂へり、王子の眞面目は進んで休まざる所に在り、既に謂はずや、義理定在なく窮盡なしと云ふ、今其五十七年に局し、其成訓を執し、見て以て典要となさば、獨斯學を死丁

するのみならず、永く王子の罪人とならん、要は體驗自得して先哲の眞精神を千歳に活かしむるに在り、是れ後學の責なり

著者明治辛丑の歳を以て薩に入り、戊申の歳始めて同志を獲て王學會を創む、爾來鼓舌十有九年、其間講題を設け解説を試みしもの亦少からず、會中諸子之を活刷に附せんことを勸むること久し、今や諠辭避を容さざるものあり、乃ち之を彙輯叙次して敢て教に大方に就く、本書の研究は僮侗糊塗固と言ふに足らず、然れども讀者にして能く之を行上に體驗實修して敢て點睛の手段を忘れずば、鉛刀猶一割の用あらんか

大正十五年季秋

著者識す

例言

- 一、本書は自序に言へる系統門を前篇とし教義門を本篇として纂輯す而して二門既に了るも旁搜縦觀彼に因て此を形するの研究を遺す可らず因て羽翼門を置き各方面研究の歩を進む唯其の備らざるを憾む
- 二、前篇王子の經歷を研究するや進學立教の方面を主とせり其事功に至ては僅々紙筆の能く盡す所に非ざるを以て頗る大體に止めたり讀者宜しく全書に就いて其妙算神籌を窺ふべし
- 三、本書王子の言を引用するもの主として王文成公全書に据るも傳習錄に係るものは専ら三輪執齋希の標注和刻せる傳習錄上中下三卷に依る尋索に便宜多ければなり例せば其の傳習錄上卷二十枚に出づるものは(傳上)と記する如し
- 四、本書は王學會初期の研究に成れるもの多し後期は著者身邊漸く煩劇を來たし執筆の暇を得ず敢て謝す

陽明學精義

目次

前篇 系統門

第一章 序 説

第二章 王子の經歷と立教の過程

一 初年

二 困迷時代

三 覺醒時代

四 講學時代

五 完成時代

六 晩年

第三章 總 結

本篇 教義門

第一章 立志

立志の道破 貴志 立志と學問 王子の深慨

四六

第二章 心即理

.....

五一

目次

一

- 一 天即理
- 二 性即理
- 三 心即理 立言の宗旨 動靜體用

第三章 天理を存し人欲を去る

六三

- 一 總説
- 二 心外事なく物なし 聖人と精金
- 三 致知格物
- 四 朱子の即物窮理
- 五 頭腦
- 六 人欲
- 七 省察克治

第四章 知行合一

七八

- 一 本體的合一 真切篤實と明覺精察 主意と工夫 眞知
- 二 宗旨的立言 一念可懼
- 三 知行並進 學問思辨行
- 四 知行合一は普遍的なり
- 五 古人の立言 程伊川 朱晦庵 歐陽南野

第五章 良知

九〇

- 一 良知の拈提
- 二 良知の本體 良知即天理 心の靈明即良知 良知固有 動靜一貫 無體の體
- 三 良知の作用 知情意の調和 七情と五官 大規矩
- 四 良知の權威
- 五 良知の絶對 造化精靈 良知と良心

第六章 致良知

一〇五

- 一 致知の外に學なし 簡易無病 千死萬難中得來る
- 二 致とは何ぞ 別法無し
- 三 格物 格物は致良知の工夫 分限に隨ふ
- 四 靜坐と事上磨鍊 靜坐 事上磨鍊

第七章 善惡

一一〇

- 一 善惡の意義
- 二 善惡の起所 天地氣質兩性 氣之動 習氣
- 三 氣質 氣質變化

四 善惡一物

第八章 本體即功夫

體用一源

一三〇

一 未發と已發 中和一也 良匠苦心

二 戒慎恐懼 未發前氣象

第九章 理氣合一

一四一

一 理氣

二 宋儒の宇宙觀 周濂溪 程子兄弟 朱子

三 王子の宇宙觀 氣一元

四 王子の人生觀 性氣合一 樂是心之本體

第十章 萬物一體

一四九

一 先儒の一體觀

二 王子の哲學的一體觀

三 王子の道德的一體觀 拔本塞源論 平等即差別 殺齋の深概

第十一章 太虚

一五八

一 宋儒 張橫渠

二 王子 自然

三 藤樹と中齋 藤樹 中齋

第十二章 四句教

一六六

一 教旨 第一句 第二句 第三句 第四句

二 天泉の證道 錢王二子論難 王子兩可說 最後深誠

三 論評 諸家疑難 餘弊

第十三章 誠意

一七七

一 用功第一義 第二義 二 致知格物の關係

三 慎獨 四 立誠 功利一誠

後篇 羽翼門

第一 王學と修養

一八六

一 道心と人心 惟精と惟一

二 克己

三 艱苦

目次

五

四 困勉と大勇	五 自責
六 眞切	七 非毀と勝心
八 悟と信	九 無我
第二 學問道德事功合一	附軍國修鍊
第三 讀書と詞章	
第四 死生觀	
第五 王子と禪	附三教評論
第六 朱子晩年定論	附大學古本及旁釋併大學問
一 成書の由來	二 論難
三 王子辨明	四 評論
第七 王學と本體論	二元論 一元論 具體的一元論
一 太極と周程	二 王子本體論
第八 ソクラテースの知徳合一と王子	
第九 自我實現説と王學	

第十 王學と觀念論	極端觀念論 調和觀念論
一 哲學的	二 倫理的
第十一 王學は盡心の學なり	
第十二 鵝湖の會	
第十三 劉念臺の殉節と絶食	二 絶食
一 傳畧	
第十四 熊澤蕃山	
其一 畧傳	其二 學說
一 蕃山と藤樹	二 蕃山と朱王
三 心法と自反慎獨	四 實義と時處位
五 太虛、理氣、道體、生死	六 佛教、神道
第十五 三輪執齋	
一 緒言	二 執齋の立志
三 執齋の成立	四 執齋の永眠

目次

五 執齋の事業	八
七 執齋の著書	
八 執齋の門人	
第十六 薩藩王學者伊東潛龍	三〇七

目次終

陽明學精義

濟齋 山田 準 著



系統門
章序說

至つて集大成す。孔子曰く、未だ人に事ふる能はず焉ぞ能く鬼に事へん、未だ生を知らず焉ぞ能く死を知らんと、人に事へ生に處するは實に孔聖の本領なり。此の人に事へ生に處するの道之を儒道と謂ふ、此の人に事へ生に處する道を教ふる之を儒教と謂ふ。而かも孔子は天を信じ中庸は天道の誠を説き、鬼神の盛徳を説く、儒未だ必しも天と神とを説かずんばあらず。否天は實に斯道の本原なり、易に曰ふ「夫聖人者與天地合其徳。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天不違。後天奉天時」文と、人を以て天に一致し天人合一の境地に躋る、是實に儒道の最高精神にして、儒教の最大信條なり。

前篇 第一章 序說

修養の二方面

孔子の修養に二方面あり。一を内的修養と曰ふ、意必固我を去るを要す、内省疚しからざるをす。二を外的修養と曰ふ、詩書執禮是なり、義に徙り過を改むる是なり。顔淵の仁を問ふに答へて曰く、己に克ち禮を復むと、克己は内的修養なり、復禮は外的修養なり、仁は内外を合するの道なり、天徳に合する所以なり。

孟子歿し大義淪む

孔子より後大學に如くはなし、明徳を説き、致知格物を説き、自ら欺かざるを説く。中庸に如くはなし、中和を説き、慎獨を説き、誠を説く。孟子に如くはなし、性善を説き、養氣集義を説き、良知良能を説き、存心養性を説く。孟子歿して大義淪む、韓愈曰ふ、軻の死する其傳を得ずと、誠に然かり。

功利の學

秦皇書を焚き儒を坑にして専ら法に任ず、之に次に兵禍紛争を以てし、漢興るも其治霸道を雜へ、功利の習遂に抜く可らず。武帝銳意遺書を天下に索め、五經博士を置き、大學を起し、士は一經を以て名を家に成し、訓釋解詁之れ務む、是に於て訓詁の學大に興る、東漢の賈、馬、鄭、王其の選なり。文運亦兩漢に開け、賦聖の司馬相如あり、文豪の司馬遷あり、古詩十九首あり。建安魏七子の富瞻に次に南北朝を以てし、詞家林の如く、綺麗花の如く、謂はゆる六朝の浮華時代を現出し、一世を驅つて詞章の波に漂はしむ。是時に當り思想の缺を補充せしものは實に道佛二教なり。

訓詁の學

道教は古代方士の神仙説に出て、老莊の清淨無爲説を取つて其説を飾る。其要は定氣凝神以て神仙に達するに在り、因て養丹を説き、煉藥を説き、白日昇天を説く。漢末張道陵なる者、老君より秘術を授

道教

かると稱し、其説を誇張し其教漸く盛なり。晋の葛洪、北魏の寇謙之出でて遂に抜く可らざる一種の宗教となる。魏の太武帝は司徒崔浩と共に謙之を崇信し、果斷なる滅佛策を斷行し、佛家は之を魏武の法難と稱せり。又魏晋の間老莊より出でて放誕に奔れる清談一派を生ず、竹林の七賢是なり。是れ名教廢弛の所産として、老莊の餘毒に活ける思想界の寄生蟲のみ、多く言ふに足らず。

清談派

佛教

佛教は後漢の時漢土に入り、魏晋六朝を経て益其燄を揚く。南に惠遠あり、白蓮社を廬山中に結び、門下十八賢と稱す。梁武帝あり、堂塔伽藍を濫設し、三法に歸依し、佛心天子の稱あり。北には鳩摩羅什あり、盛に經論を翻譯す、門下には八傑四聖の目あり。殊に達磨の渡來九年の面壁は、不立文字の見性成佛宗を傳へたり。斯の如くして魏晋六朝の思想界は、政治界の紛争と共に、前古未だ曾て有らざる紛糾を致せり。

唐朝の學風

李氏始めて海宇を一統して唐朝を立つるや、詞場には李杜の詩、韓柳の文今古を震耀し、初盛中晩の詞雄雲の如し。訓詁には貞觀中孔穎達等に詔して五經正義を撰せしめしも經學振はず。道教は唐室の姓李氏なるを以て老子姓李名耳を國祖とし、諸州に廟を立てしめ、道士を遇すること太厚し。武帝は道士に聽いて天下の佛寺を毀ち、僧尼を勒して俗に歸らしむ。而かも唐代に於ける佛教は尤も其勢燄を高めたる時期なり、三論、天台、華嚴、法相、淨土、眞言の諸宗益其説を鼓吹し殊に禪宗は五家曹洞、雲門、法眼、臨濟、沩仰を宗を五家に加ふの發展となり、朝野貴賤争ふて之に趨る。而て儒道は依然として沈滞し、何等面目を新に

佛教の全盛

する所なし、一の韓愈ありしも其聲甚小なり。

宋朝と性
理學
七君子

人類は活物なり、思想は活動す、訓詁詞章に埋もれる孔孟の儒道が長へに湮没すべくもあらず。時は宋代に入りて、俄然性理學勃興の下に一陽の來復を見たり。其代表者に七君子あり、周敦頤濂溪は無極而太極を説き、程顥明道程頤伊川兄弟は理を説き敬を説き、邵雍康節は數を説き、張載橫渠は太虛を説き禮を説き朱熹晦庵は此等の思想を承けて理氣を説き、居敬窮理を説き、性理學を大成す。朱子と同時に陸九淵象山あり。徳性を尊ぶを主とし、易簡の工夫朱子と合はず、世に朱陸の争を傳ふ。斯くて春風春水一時來の觀あるものは宋の性理學なり。

春風春水
一時來

孟子の後
一人

從來現實の士は功業詞章訓詁に耽り、迷信の徒は道教に赴き、高明の士は佛教に走るの觀ありし歴世の風向を回して、之を孔孟の儒道に復歸せしめたるは有宋諸君子の力なり。程頤明道が兄明道を評するや曰く、先生千四百年の後に生れ、不傳の學を遺經に得、蓋し孟子の後一人のみと、亦偉ならずや。而かも其學風か佛教の影響を受けたるは争ふ可らず、何となれば何れの學術も時代思想の影響を蒙らざるはなく、佛教は當時の時代思想なればなり。然れども之を新塗轍に墮つと云ふは不可なり、猶佛教が支那に入つて支那の臭味を帯び、日本に入つて日本の色彩を著くるが如きのみ。

性理學と
佛教

孔子と性
理學

孔子は堯舜を祖述し、文武を憲章せり、述べて作らず信じて古を好むと云へり。孔子の時は其れにて可なり、之を魏晉以後思想紛糾の間に墨守唱導するも事に益なく、却て孔子に忠なる所以に非ざるなり。

孔子兒孫
の責務

孔子は主として「斯くあれ」と教ふ、後人は「何故に」と反問す。さらば孔子の兒孫たるもの、孔子に代つて之に解答を與へざる可らず。而して之が解答を完うせんと欲せば、先人の未だ逢著せざる諸種の問題に逢著せざる能はず、性理學は此が爲めに興れり。而かも彼徒曰く、宋儒の説は釋氏の説なり、我徒亦之に和して曰く、性理の學は禪の學なりと、吾れ其の何の謂ひたるを知らざるなり。

王子の出
世

陽明王子の明代に出でたるは、猶程朱諸儒の宋代に出でたると同じ、其の知行合一を説き、致良知を掲げたるは、程朱の理を説き敬を説き、陸子の尊徳性を説きたるが如し、出でざる可らざるに出で、説かざる可らざるに説く、之を孔子の後に孟子あるに見ば、思ひ半ばに過ぐるものあらん。

元代の學
風

視よ、元代一百年、北方の強を以て一時を略定し、思想學術宋代の遺を拾ひしに過ます。世祖忽必刺麻僧八思巴を延いて帝師とし、歴代帝后皆帝師の戒を受け建塔禱災至らざるなく、道佛二教は固より、訓詁に、詞章に、何等言ふべきなきは元氏一代の大觀なり。元滅びて明朝之に代るや、四書大全三十六卷、五經大全一百十七卷の勅撰成祖胡廣等に
勅之を撰すとなる。殊に四書大全は二百年科場の金科玉條として研究するもの

明朝の學
弊

是に於てし、辨訂するもの是に於てし、學者終生頭を末疏に埋め、學風浮華其弊に勝へざらんとす。汪循は宏治中の進士なり、其著仁峯文集に答程程書あり、曰ふ「朱子著書立言、皆欲使人明其理。反求於心。未嘗教人弄故紙糟粕、以資一己功利。後之習其學者。徒知排比章句。而擴充變化之無功。辯析詞理而持守涵養之不力。專訓詁者。附會穿鑿。疊牀架屋。泪心思。亂耳目。工文詞者。飾筌蹄。取青紫。龍

朱子學の
弊

王子の玉振

斷罔利。中立爲姦。朱子之學果如此乎」と。言者は朱子の徒なり、而かも其言ふ所此の如し、以て一世の趨向を想察すべし。王子の出づる蓋し亦天の數なり、宋代諸儒を金聲と見んか、王子は之を玉振するものなり。

東方日出の邦と陽明學

陽明學の我邦に入るや、中江藤樹と其徳を成し、熊澤蕃山と其識を長し、三輪執齋と其教を設け、綿々數百年、群賢彙進の盛を致す。嗚呼斯學の精、東方日出の邦を得て始て赫奕の光を洗發するもの非か。吾人不肖敢て之か研究を志すもの此が爲めなり。

第二章 王子の經歷と立教の過程

王子の立教は致良知の三字に外ならずと雖、其が一生徑路の曲折と、進修の體段とは、陽明學の全體なり。されば吾人斯學を研究せんと欲する者は、先づ其經歷に就いて立教の過程を尋釋するより切且つ要なるはなけん。其の大體胸中に了々たらば立教の門戶教旨の源委蓋し凡を迎へて解くるものあらん。

一、初年

郷貫

王子名は守仁、字は伯安、別號は陽明。明の憲宗成化八年、我國にては足利の季世、文明四年九月丁

伍系

亥を以て浙江省紹興府所屬の餘姚縣に生る。此地方は周末に於て越に屬し、東晋の司馬氏江南に都してより、風氣大に開け頗る人物の輩出を致せり。

王羲之山陰に居る

王子の先は晋の光祿大夫王覽に出づ、瑯琊の人なり。其曾孫右軍將軍王羲之に至り、移て會稽の山陰に居る。一時の群賢を蘭亭に會し、曲水の上、一觴一咏の高趣、千歳の下人をして魂逝かしむ、其流風蓋し王子に波及せるものなしと謂ふ可らず。其の二十三世の裔王壽始て餘姚に移る。壽の後五世を王綱

王壽餘姚に移る

と云ふ、文武の才あり。道士嘗て筮して曰ふ、公の後當に大儒世に名ある者出つべしと。明初劉伯溫

王綱賊難に殉す

誠意伯劉基の薦を以て兵部郎中に擧げられ、廣東參議に擢てらる。潮民靖んせす往て之を諭し、遂に賊難に殉し、増城に廟祀せらる。其子彥達、年十六、父の屍を裹みて歸葬し、父の忠死を痛み、躬耕母を養ひ

祖父竹軒公

終身仕へず、孝子の目あり。其子興準、禮易に精し、朝廷遺逸に擧ぐれども出でず。其子世傑、槐里子と號す。明經を以て大學の貢に應ず、言行一に古聖賢を以て法となし、之を望むに神人の如し。其子倫字は天叙、竹軒と號す、即ち王子の祖父なり。槐里子早世し、環堵蕭然、僅に書史數篋を遺す。倫書に於て讀まざる所なく、孝友天性に出づ。又風流韻度あり、人之を陶靖節林和靖に比す。配を岑氏と云ふ。

父龍山公

其學純正

其子華、字は德輝、海日翁と號す。書を龍泉山中に讀む、學者龍山先生と稱す、即王子の父なり。生れて穎悟、書を讀み目を過ぐれば忘れず。成化辛丑進士第一人に及第し、經筵及び東宮に侍講し、南京吏部尙書に至る。性坦直醇厚、閹宦劉瑾と善からず、遂に致仕す。其學純にして正し、客に仙家長生の術

母鄭氏

を以て來り説くものあり、峻拒して曰く、身を修めて以て命を俟つは吾儒の家法なり、長生して奚をか爲さんと、貨利得喪少しくも意に介せず、儉素に處つて自如たり。初配は鄭氏、即ち王子の母なり。性淵靜孝慈、善く貧苦に甘んじ、井臼紡績を躬らして舅姑に奉ず、既に貴きも恭儉衰へず、壽四十一、王子の十三歳を以て歿せり。王子異母弟三人あり、守儉、守文、守章と云ふ。一妹あり同邑の徐愛に嫁す。以上王子の家系なり。夫れ物の成る必ず從て來る所あり、故に曰く、水土の積むや厚ければ其の物を生ずる必ず蕃しと。之を遠くしては曩祖の高風に本づき、之を近くしては廣東參議の死節に凝り、純篤守正の家風内に積むもの數世、遂に之を王子に發せるか。其の宏偉卓犖千世に傳へて不朽なるもの、豈其故なしとせんや。

大に之を王子に發す

神授異人

名を守仁に改む

十一歳京師に往く

偉人の生ずる、世往々異瑞を傳ふ。鄭氏娠むこと十四月、祖母岑氏夢む、神人緋衣を着し一兒を抱き

雲中より鼓樂して之を送り授くと、驚き寤むれば已に啼聲を聞けり。後年湛若水王子の墓に誌して曰く

「陽明公殆神授歟。其異人矣」と是なり。祖父竹軒之を異とし、雲を以て之に名づく、五歳まで言はず。

一日僧あり謂ふ、好箇の孩兒、惜むべし道破せり、竹軒之を悟り、名を守仁に改む、始て能く言へりと。

一日書を誦す、怪んで之を問へば、祖父讀過の際傍に在りて之を默記せるなり。父龍山公越城なる山陰

の地の山水佳麗なるを愛し、且つ此地先世の故居なるを以て、遂に餘姚より移り住む、王子亦從ひ移

る。越城東南の山を四明と云ふ、山中に陽明洞あり、後年王子室を築き讀書せる處。十一歳、龍山公京師

に官し、竹軒翁を迎へ養ふ。翁王子を携へ京師に往く、途に金山寺江を過き、客と詩を賦して未だ成らず王子傍より賦して曰く、

金山寺詩

金山 一點大如拳

打破維揚水底天

醉倚妙高臺上月

玉簫吹徹洞龍眠

客大に驚き異み、復た蔽月山房の詩を賦せしむ、王子口に隨ひ應へて曰く、

山近月遠覺二月小

便道此山大於月

若人有二眼、大如一天

遠見山小月更濶

梅檀は雙葉より馨ばしと、小詩人小哲學者の器度、迥然として早已に凡を抜くを見る。明年塾師に就く。當時王子は豪蕩にして荒々しき所爲多し、龍山公は常に之を憂慮せしも、竹軒翁は其器を愛し深くは咎めず。一日同學生と長安街を過ぐ、一相士あり、王子の風采を異とし、之を相して曰く、鬚領を掠ふ、其時聖境に入らん、鬚上丹臺胸上に至る、其時聖胎を結ばん、鬚下丹臺胸下に至る、其時聖果圓ならんと、王子其言に感し、爾後書に對する毎に輒ち靜坐思を凝らせり。嘗て塾師に問ふ、

相士豫言

竹軒王子の器を愛す

塾師問答

王子

何をか第一等の事となさん。

塾師

書を読み登第せんのみ。

王子

讀書學聖
是第一等
の事

登第は恐らく未だ第一等の事ならじ、或は書を読み聖賢を學ぶに在らんのみ。

十二歳の
王子眞諦
道破

龍山公之を聞き笑ふて曰く、汝は聖賢たらんと欲するか。嗚呼當時滔々たる天下を通じて、人心の全部を支配するもの實に登第高官に就くに在り。師然り、弟子然り、父は之を子に求め、子は之を父に誇る、聖賢の徳業は之を迂濶視せざれば到底及ぶ可らざるものとなす。今や十二歳の王子人生の眞諦を道破し、師をして顔色なからしめ、父公をして其大膽に驚かしむ、豈是れ天來の妙音に非ざるか。而て此聖賢たらんと欲するの志向は、實に王子の一生を貫通せる大精神なり。此大精神は遂に王子の覺醒を喚起し、王學の華實を成したる唯一の機關なり。學者先づ此の志向を立てんことを要す。

一貫精神

十五歳の
英雄兒

任侠に迷
ふ

騎射に耽
る

父公の叱
責

王子は上述の如き大志望を抱懷したるも、元來豪邁なる英雄兒、功名の念固より禁ずへくもあらず。十五歳の春秋を迎ふると共に、漸く眼を天下の形勢に注ぎ、慨然天下を經略せんとし、居庸關に遊び、諸夷の部落を訪ひ、備禦の策を聞き、胡兒を逐ひ、騎射の術を講ずるなどして、覺へず一ヶ月を此に過せり。夢に伏波將軍馬援後漢の廟在りに謁し詩を賦せしも此時なり。時に畿内及秦中に盜亂あり、屢書を朝廷に獻じて時務を論せんとせしも、龍山公が之を斥けて狂となせしを以て止みたり。十五歳の英雄兒が胸中に畫きたる動策と、老熟なる父公が叱責の狀と、冥想一番すれば、彷彿として眉端に上るを

覺ふ。

王子の初年は實に此の如くして過ぎぬ、時に異常の才識を發露せしよりすれば、麒麟兒の觀なからざるも、亦必しも世に多くを見る寧馨兒と太だ相遠からず。湛若水の謂はゆる神授異人の目に至つては、恐らくは過當の言たるを免れさらんか。

二、困迷時代

始て宋儒
格物の學
に志す

初志一頓

王子後年門人に語つて謂ふ、「衆人は朱晦菴の格物説に依るも、著實に受用するものなし。吾れ初年錢友名號履
歴未詳と聖賢とならんことを論じて天下の物に窮めたらんと欲し、亭前の竹を窮格せんことを約す。錢子先づ一竿の竹を截り、夙夜之が理を窮め、三日に至り疾を致す。吾れ其の精力の足らざるを言ひ、又た躬ら竹を截り之が格物に従事し其理を得ず、七日に至り亦た思を勞するを以て疾を致せり。因て相與に聖賢は到底到り得ず、吾人は遂に格物の大力量を缺けるを嘆息せり傳下六
八參照。其事幾年に屬するや、格的知す可らざるも、思ふに王子が父公に京師に従へる末期にして、其の十五六歳の間に在らんか。年譜
亦之を京中の當時學問と云へは程朱の學なり、其學は大學の致知格物より入る。朱子謂ふ「知は知識なり、格事は至るなり、知を致し物に至るとは、物に即いて其理を窮むるに在り、一草一木亦皆其理あり察せざる可らず」と。王子が聖賢を希ふの熱心は先づ此の致知格物の上に傾注せられたるなり。而かも思を勞し疾

始て辭章
に志す

を致して得る所なく、遂に其初心を翻せるは上述の如し。是より文儒と往來し、志を辭章に寄せ、一出
一入幾たびか迷溺の淵に沈淪せるを是非なけれ。

十七歳

十七歳王子は久し振りにて郷國に歸り、夫人諸氏を迎ふる事となれり。年齢よりすれば早婚の感ある

夫人を迎
始て仙術
に志す

も、或は父公が愛兒の粗豪を患へ早く家を成して沈實の志を養はしめんと欲せしに非ざらんか。夫人は
江西省の布政參議なる諸養和の女なり。王子は舅氏の官署に就きて婚を成し、合昏の日に飄然附近の山
中に入り、道教の寺院なる鐵柱宮にて道士に遇ひ、就て養生の説を聞き、相與に對坐して歸るを忘れた
り。諸氏の家にては婿君の影を匿したるに喫驚し、諸方を探索して翌朝山中より伴ひ歸りたり。王子は
朱子格物の旨に躰いて以來、詞章の林に入りしかど亦安んぜず、遂に道家養生の説に留心するに至れり

十八歳

合昏の大典を忘れて道士と山中に靜坐せるを見れば、いかに求道の念切なるものありしかを思ふべし。十

蕪諒に謁
す

八歳の十二月夫人を伴ふて餘姚に歸る。道すがら廣信と云へる處にて當時朱子學の大家なる婁一齋名は

初心提起

諒と云へる人に謁し、宋儒格物の旨を聞き、深く心に契ふ所あり、遂に聖人は學で至るべしと信じ、嘗

十九歳

て一たび擲ちし志向も、名儒提撕の下に再び初心を提起主持するに至れり。此の婁一齋は王學の關係に

於て忘る可からざる恩師なり。十九歳には父龍山公も歸郷し、愛子の學を大成せしめんと、從弟三人妹
婿一人に命じ、王子と課を立て經義を講析せしむ。王子晝は四人と課業に勉め、夜は獨り子史百家の書を
取つて繙閱すること夜半に至る。四人は王子の文辭日に進むを見て其の及ばざるを愧ちしが、後其故を

白を擧業
外に遊ば
しむ
放逸を改
む

知て、彼當時既に心を擧業外に遊ばせたり、我及ばぬも理なりと驚嘆しぬ。王子元と和易諧謔を喜ぶ、
既にして之を悔ひ、爾來は端坐して言語を慎む。四人信せず、王子色を正しくして曰く、吾昔は放逸な
りしも今は過を知れりと。王子が克己力の強く且つ過を改むるに吝ならざるを認むべし。

二十一歳
郷試に擧
らる
二十五歳
會試再下
第
詩社を結
ふ
二十六歳

二十一歳、浙江の郷試に擧げらる。明年京に入り會試に應じ下第す。二十五歳再び忌者に抑へられ會
試に下第す。同舍に下第を耻となすものあり、王子慰めて曰く、世人は下第を耻となすも、吾は下第の
爲め心を動かすを耻となすと。第と不第とは王子の心を動かすに足らず。既に餘姚に歸り、詩社を龍泉
山寺に結び、雄を詞賦に競ふ。二十六歳京師に在り。當時邊警頻に至り、朝廷將才を求むるに急なるも
武科士を探るの制度、僅に騎射技藝の士を得るに止まり、兵略統馭の眞才を得るに足らざるを慨き、心
を武事に留む。兵家の秘書を精研し、賓宴に遇へば、果核を座上に配列し、陣勢を講じて戯となせり。

心を兵略
に潜し
二十七歳

二十七歳、王子の志操は再び混亂の渦中に陥りたり。王子漸く、辭章藝術の終に至道に通するに足ら
ざるを念ふ。されど良師友も亦遇ひ易らず、頗る惶惑する所あり。偶々朱子の文を読み「敬に居り志を
持するは讀書の本たり、序に循ひ精を致すは讀書の法たり」の言を得、さては自己從來の學問は探討す
る事博からざるに非ざるも、序に循ひ精を致さざりしを以て、得る所なかりしも道理なりと思ひ、是に
於て經傳を取り、序に循ひ精思苦慮す。されども是亦物理と我心と判れて二つとなり、到底治決の妙を
得ず、苦悶の久しき再び疾を來たしぬ。是に至り王子益々謂ふ、人の聖賢となるは自ら其分あり、妄に

再初志を挫く
再仙術に迷ふ

冀ふ可らずと、因て再び初志を挫く。偶々道士の養生談をなせるを聞て深く之を喜び、遂に世を棄て山中に入らんと念を起すに至りたり。

二十八歳
會試及第

二十八歳、京師に在り、始て會試に及第し、工部に就官す、是を王子任官の始となす。時に朝廷詔を下し言を求む、王子乃ち邊務八事を疏陳す、其言剴切を極む。思ふに曾て時事を獻白せんとし父翁に叱責せられて止みき。爾來十三年、今始て抱負を實にしたり。二十九歳刑部に轉官す。三十歳命を奉じて

工部就官

江北の刑囚を審録し、平反する所多し。王子の釋教に心を寄せたるは蓋し此前後ならんか。此行無相化

三十歳

城等の諸寺に宿す。時に道士の蔡なる者善く仙を談す、王子禮遇を厚くし再三道を問ふ、蔡斥けて曰く

心を釋教に寄す

汝終に官相を忘れずと、王子一笑して別る。又地藏洞に異人を訪ふて道を論じ、再訪すれば他に移りて

三十一歳

王子の三十一歳は亦頗る變化に富む、而て其の志向略は駁を去り純に就けるも亦此歳なり。五月京師に復命す。是時の王子は已に前日の王子に非ず、京中舊游の諸士が徒に詩文を作り才華を馳せて自ら高しとするの陋を見て、再ひ其の渦中に投ずるに勝へず、歎じて曰く、吾れ焉を限りある精神を以て無用の虚文を作らんやと、遂に志を辭章に絶つ。而かも又た風塵に埋没して求道の終に機なきに想到しては一日も官途に在るに勝へず、乃ち疾の故を以て歸養を乞ひ、越に歸り室を陽明洞中に築き、道士の導引術を修む。既にして事物の來る之を先知するに至れり。一日洞中に坐す、友人王思輿等四人來り訪ひ、

志を辭章に絶つ

方に五雲門を出づ。王子之を前知し、僕に命して中途に迎へ、且つ詳に其來路を語らしむ。四人驚異して斯術の蘊底を得ると爲す。然れども王子は遂に之を斥けて曰ふ、此れ徒に精神を簸弄するのみ、眞の道に非ずと、漸く仙術の非を悟る。已にして洞中の靜寂に化し、世海の塵勞を厭ひ、世を離れ縁を絶ちて斯身を終らんとす。然るに齡傾ける祖母及び父龍山公常に其念頭に往來して因循決せず。之を久くして忽ち悟て曰く、父母を懷ふの念は人の孩提に生ず、此念にして去る可くば、是れ人間の種性を斷滅するものなりと。斯くて禪釋出世間の思想も全く王子の胸中より掃ひ去られたり。嗚呼貴ひ哉此一覺や、聖人の學は人情の上に立つ、人情を去らば茲に人なく、人なくんば即亦學なし、聖人の學百世弊なきもの、實に人情の學なればなり。

導引術を修む

三十二歳
世用を冀ふ

三十二歳、風景絶佳の稱ある錢塘の西湖に移つて疾を養ひ、再び出でて世に用ひられん事を冀へり。蓋し父母を懷ふの念己に孩提に生ずるを覺らば、君を念ひ民を思ふも亦孩提自然の人情ならざる可らず王子濟世の發念即ち自然の轉機なり。既にして南屏虎跑の諸寺を往來す。一禪僧あり、關に打坐するこ

仙術の非を悟る

と三年、口嘗て言はず、目嘗て見すと稱す。王子往き見、一喝之を叱して曰く、此の和尚、汝終日口巴巴たるは何を説けるぞ、終日目睜々たるは何を看るぞと。僧驚き起て目を開き相語る、王子徐ろに家族の有無を問ふ、僧曰く一老母あり、王子曰く念ふなきや否や、僧曰く念ふなき能はず、王子乃ち父母を慕ふは人の本性なることを指摘懇諭す、僧泣涕して恩を謝す。明日再び往き見れば僧既に去れり。嗚呼

父母の念孩提に生ずす釋教の非を悟る

坐禪僧を説く

父母を慕ふは人の本性

三十二歳
世用を冀ふ

前篇 第二章 王子の經歷と立教の過程

坐禪僧を説く

困迷時代

父母を慕ふは人の本性

一五

何等の神化ぞ、我已に迷ふ、何に由て人の迷を啓かん。王子已に一覺し、欄柄手に在り、機に隨ひ點化す、意の如くならざるなきは其所なり。

三十三歳、京師に在り、山東郷試を主る。其試録を讀む者、皆王子經世の學を嘆異す。九月兵部の官に就く。三十四歳京師に在り、始て聖學を掲げ同志と斯道を講ず。思ふに三歳以前の王子は、京中舊遊の士詞章才華に驚すの弊に勝へず、南方山中に放浪し、仙釋に出入せしが、今日京中の王子は、時人が身心の學あるを知らざるを嘆じ、人をして先づ必ず聖人たらんと志を立てしむ、前後別人の感なくんばあらず。當時道義の教起らず、師友の道久しく廢たる、時人王子の言行を見て、多くは異を立て名を好むものとす。然れども又其説を聞て感奮し、贊を納れ教を請ふものも少からず。王子ひたすら門生と學を講ずるを樂めり。時に湛若水翰林の庶吉士たり、志合ひ道同じく、一見交を定め、共に聖學を倡明するを以て目的とす。若水は甘泉と號す、初め陳白沙に學ひ、時に年四十、王子は永く心友として切磋の益を受けたり。

三十五歳は來れり、一大災厄は王子の頭上に降下せり。天の大任を斯人に降さんとするや、必先づ其の身を窮乏し、其の爲す所を拂亂せしむるもの非歟。當時の皇帝を武宗と云ふ、宦官劉瑾寵を怙み政柄を竊み、己に従はざる者は逐斥到らざるなし。南京の言事官なる戴銑薄彦徵の二人諫を納れ瑾の怒に觸れ詔獄に下さる。十二月王子疏を上り之を救ふ。其大旨は「彼等は言職に在り、其言善ならば之を嘉賞

門人始て進む

心友湛若水

三十五歳一大災厄降下

上疏言官を救ふ

詔獄に下る

歲暮の吟

すべし、其言善ならざるも包容して忠言の路を開き、陛下大公無我の仁を擴め、過を改るに吝ならざるの勇を明にすべし」と云ふに在り。劉瑾は最早己の威力に懾服せざる者無かるべしと思ひきや、意外の處に反對の聲揚りしかば、大に怒り立るに詔獄に下す。王子獄に在ること數句「囚居亦何事。省愆懼安飽。瞑坐玩羲易。洗心見微奧」の句あり。又歲暮の吟に云ふ、

元坐經句成木石。忽驚歲暮還思郷。高簷白日不到地。深夜黠鼠時登牀。峰頭霽雪開草閣。瀑下古松開石房。溪鶴洞猿爾無恙。春江歸棹吾相將全集

龍場驛丞

三十六歳

錢塘疾を養ふ

王子一たび氣絶して幸に蘇り、遂に貴州省なる山中の一荒村龍場驛丞に貶謫せらる。三十六歳の春王子謫地に赴かんと欲して南下す。途に諸弟の來り會するを喜ひ「己分天涯成死別。寧知意外得生還」の句あり。錢塘に至りて疾を獲、春より夏に及び、居を勝果寺に移す「病肺正思移枕簟。洗心兼得遠塵埃」の句あり。時に劉瑾猶餘怒を啣み、壯士を遣りて尾行せしめ、機を見て之を死に致さんとす。王子尋常手段の禍を免る、能はざるを察し、一夜江水に投して死せる如く装ひ跡を昏まして遁走す。途に商船に便乗して舟山島に向ひ、偶颶風に際し、一晝夜の後閩界に漂着す、即福建省なり。岸に上りて數十里の山徑を走り、一寺に就て宿を求む。寺僧故らに納れず、已むを得ず附近の野祠に入り臥す、何ぞ圖らん此處は猛虎の棲窟ならんとは。夜半虎出で祠廊を遶りて大吼す、然れども竟に害を加

入水に擬して活路を求む

虎窟危を免る

異人と出處を論ず

異人に警發せらる

父子再會

局に當れば迷ふ

へず、王子は不思議にも生命を拾ひたり。王子後年啾々吟に云ふ「東家老翁憂虎患、虎夜入室啣其頭。西家兒童不知虎。執竿逐虎如驅牛」と、無心の王子克く獐猛の虎王を退けたるか。夜明け寺僧は虎に死せし旅人の財囊を収めんとて來り、王子の香案に凭り熟睡せるを見て大に驚き、呼醒して曰く、公は常人に非ずと、伴ひ歸りて禮遇す。然るに不思議にも寺中に二十年前鐵柱宮に逢ひし異人あり、共に出處を論ず。王子は表面已に水死の人、郷里の老親弟姪皆其死を信せし程なれば、天地の廣き身を置くに處なく、遂に世を棄て遠く遁れんかとの念慮動く。異人曰く、足下は尙老親あり、萬一にも劉瑾が足下の死せざるを知り、彼は北の方胡に走り、又は南の方越に走りたりと誣ひて足下の父を逮捕せば如何と。王子此を聞て驟然省發する所あり、曰く我過てりと、遂に改めて謫地に赴くに決す。間道より鄱陽湖に出て、父を南京に省す。己に死せる愛子突如として歸り來る。父子再會の喜知るべきなり。十二月錢塘に還る。嗚呼王子嘗て父母を懷ふの念は孩提に生すと省覺せるは四年以前に在り、今や人生の至變流離の極に際し、初心三だひ動て遠く去らんとし、光明の體覺るす微翳を生ず。人心至微の點此に在り、嘗ては禪僧を喝破提撕せし身も、今は却て異人の提撕を受く、局に當れば迷ふ、一念の微、主客處を換へ、論す身も忽地論さる、身となる、吁危い哉、然れども微翳久しく天日を掩ふ能はず、異人の一語立るに本體に返る、亦尊からずや。當時異人の言に覺り、一詩を壁間に題して云ふ、

險夷原不滯胸中。何異浮雲過大空。夜靜海濤三萬里。月明飛錫下天風。

全書外集

泛濤の吟

五溺

大疑の下大悟あり

海濤三萬里、飛錫天風を下る、何等の曠懷を、洒々落落の心地當に此の如くなるべし。以上は王子が三十六年間經歷の梗概とす。此間迷ふては出で、出でては迷ひ、幾度か困惑の淵に沈淪せり。湛若水王子の碑に誌して五溺の目あり。初め任俠に迷ひ、次で騎射に耽り、又た辭章に志ざし、幾たびか道家の仙術に腐心し、最後に釋門の禪理を喜び、初心度々動きて漸く正に歸す。五十七歳にして歿せる王子に取りては、三十六年の困迷短しとなさず。然れども大疑の下に大悟あり、煩悶の度深からざれば、覺醒の力強からず、龍場に於ける王子の大覺醒は眞個三十六年困迷の賜なり。

三、覺醒時代

三十七歳

王子の三十六歳は赴謫の道途に費され、流離顛頓死生の間に入出し、其歳十二月遂に錢塘より龍場に向ひ、三十七歳の春を以て龍場驛丞の任に就けり。此より三十九歳に涉り前後三年間は之を王子の覺醒時代となす。蓋し此の貶謫は王子の身上に在りては不幸之に過くるものなきも、王子の覺醒と王學の成立とに在りては、實に天與の好機會なりしなり。

龍場は貴州省の西北萬山中にあり。夷人穴居の地、家屋の設けなく、言語通せず、偶々語るべき者あれば中國より亡命せし浮浪にして、蛇虺瘴癘の外親むべきものなし。王子は先づ土人に土を築き木を架し家屋の形を造りて住居することを教へ、茲に村長然たる驛丞の任に就きけるが、往を顧み來を察し、

驛丞就任

得失榮辱の念掃蕩

胸中に往來する感慨や果して如何ならん。蓋し人間煩悶の根は得失榮辱の念に在り、王子既に此念を掃蕩す。されども當時劉瑾の怨恨尙解けず、何地に禍機の伏在するやも料る可らず、父を懷ひ君を思ふて疑懼の念去るへくもあらず。王子謂ふ得失榮辱は皆能く超脱するも、惟だ生死の一念未だ融化せざるを覺ふと、因て石棺を作りて其中に臥し、身を大死一番の底に置き、吾唯命を俟たんのみと誓ふ。既にし

生死超脱

九死の底主従和樂

て胸中灑々然一點の曇りを留めず、遂に生死を超脱し得たり。時に從者病臥す、王子躬ら薪を採り粥を調へ、又其抑鬱を慰めんと、歌詩を吟し越曲を雜へ、滑稽笑談遂に彼等をして疾病患難異境を忘れしめぬ。蓋し主従が九死の底に在りて怡々和樂此の如きもの、王子が生死を超脱せる賜ならずんすあらず。

大覺前の小覺

さらば王子は此の如くして覺醒したるか、安心立命を得たるか、否、此れ猶消極的の覺醒なり、大覺

不動の一大欄柄

前の小覺なり、生死の關を打破したりとて、大機大用何の處より出て來らん。王子は更に煩悶せり、そは得失榮辱の上にあらず、又た死生の上にもあらず、積極的に活動奮闘の活機に向ひて不動の一大欄柄を把握せんとするに外ならず。因て日夜に工夫すらく、古の聖人此場合に處らば如何なる道あらんかと。

格物致知上の大悟

既にして半夜忽ち格物致知の旨を大悟す、時に夢寐の間、人の來つて語るものある如く、覺へず呼躍し、從者皆驚きぬ。さらば此時大悟せし境地は如何、曰く、

聖人之道吾性自足

聖人之道。吾性自足。向之求理於事物者誤也。

右の三句は實に王子に與ふるに新生命を以てし、一大欄柄を以てしたり。思ふに王子半生の困迷は格物

困迷の楔子

致知の上に在り。物に理あり我に心あらば、心と理と判れて二つとならざるか。限りなき天下の事物を限りある精神を以て究むくもあらず。何時まで究むれば豁然貫通の境に至るべきか。工夫すれば工夫する程支離して要領を得ず、是れ王子困迷の楔子なりしなり。然るに一夜忽然として、さなりさなり、理は事物の上にあらず我心に在り、聖人の道は我性にて自ら足りしものと自覺し、茲に三十年の疑團を解決したるものなり。時に座右一卷の書なし、乃ち諳記せる五經の言を取り來りて之を參證するに一々照合せり。大に喜び因つて、五經臆說此書大部分傳らず全書二六卷一三丁參考を著はして之を証せり。以上を龍場覺醒の大略となす。

新生命開拓

斯くて王子は大覺醒の下茲に新生命を開拓せり。此時より進で夷人に接す、夷人日に來て親み狎れ、王子の居處陰溼卑濕なるを以て、相聚り木を伐つて工を起し、龍岡書院、何陋軒、君子亭等の諸宇を新築す。王子又た獎誘善導に懈らず、蕃醜の間風化漸く行はる。地方の官吏巨族皆信服して敬を致し教を乞ふ。三十八歳には貴州の提學副使席書來て朱陸異同を問ふ。王子答へず、別に自己の悟りし所を語る。明日又來る、王子始て知行合一の旨を五經諸子に證して教示す、數度往復の後、席書大に悟りて曰ふ、聖人の學再び今日に見はる、朱陸の異同は辨するに及ばず、之を吾性に求めて自ら明かなりと。乃ち、貴陽書院を修繕して王子を學長に聘し、躬ら諸生を率ゐ師禮を以て王子に事ふるに至れり。斯くして三十八歳は終り、三十九歳の春は劉瑾罪死して王子赦宥の恩命に接し、更に新時期を開きたり。

聖人の學再見はる貴陽書院學長

四、講學時代

吾人は王子の三十九歳より四十九歳に至る十一年間を呼んで講學時代と謂はんとす。前半は士友門人と平和の間に道を講し、後半は干戈騷擾の間に實修鍊心の工夫を積めり。前半は勿論、後半も亦講學と稱するの不當に非ざるを信するなり。

廬陵知縣

正徳五年(三十九才)逆閹劉瑾誅せられ、王子赦されて江西省の廬陵縣知事に陞任せらる。顧ふに三年の間貴陽萬山中に幽蛰せし王子、一朝籠禽の圍を脱して東下す。士友舊門途に迎へ慶を致し、併せて教を乞ふもの多かりしや想ふべし。其の辰州を過くるや、舊門冀元享、蔣信、劉觀時等皆能く卓然持守する所あるを喜び、乃ち説くに靜坐の要を以てし、共に僧寺に靜坐して自己の心體を悟らんことを勉めたり。思ふに此事たる龍場以後に於ける王子の新教旨にして、龍場の一悟が伴ふべき當然の工夫たらずんばあらず。斯くて諸生皆能く師教に従ひ參修を積み恍然得る所ありき。然れども既に靜坐と云ふ、諸生多くは直に坐禪入定を以て之に擬し、空漠枯淡を以て宗旨となし、王子の眞旨と懸隔を生ずるを免れず。王子之を憂へ、既に諸人と別れ、途中より書を寄せ戒めて曰く、

坐禪入定
に非ず

前在寺中所云靜坐事。非欲坐禪入定也。蓋因吾輩平日爲事物紛拏未知爲己。欲以此補小學收放心一段工夫耳。全書四卷與辰中諸生

靜坐心體
を悟る

三家訂交

是れ以て王子が靜坐に對する見解を窺ふべし。既にして三月廬陵に至る、政を爲すに威刑を事とせず、唯人心を開導するを以て本となす、囹圄日に清く、民風頓に改まる。冬京師に入朝す、後軍都督府都事黃綰字宗賢來つて王子を見る、王子共に語つて大に喜んで曰く、此學久しく絶ゆ、子何の聞く所ありて能く然るやと、明日淇若水に見へしめ、三人交を訂す。十二月、王子陞任せられ官に南京に就かんとす、若水、綰の二人時相に言ひ王子の官を改めて京師に留め、三人益志を砥ぎ聖學を講明せんことを期せり。

心體廓清

當時王子の抱持せる教旨は、心體を廓清し眞性を徹見して操持涵養の地となすに在る如し。そは王子が黃綰應良の二人と學を論せし語に知らる、曰く、

眞性始見

聖學久不明。學者欲爲聖人。必須廓清心體。使纖翳不留。眞性始見。方有操持涵養之地。全書年譜一七丁
應良其の難きを疑ふ。王子曰く、聖人の心は明鏡の如し、纖翳自ら容る、所なく本と磨刮を要せざるも常人の心は斑垢駁蝕せる鏡の如し、痛く磨刮し盡く駁蝕を去りて後纖塵即ち見へん。從來此意思を見得せず、故に功夫の講すべき處なかりき。今幸に此を見得す、然るに學者却て易きを好み難きを惡まば、却て流れて禪釋に入り去らんと。案するに右は前述せる靜坐の見解と共に、王子の深旨を窺ふべきものなり。夫れ一世の士人記誦祠章に溺れ、功名富貴に熱し、語るに聖人の道を以てすれば笑ふて狂となす。今之か蒙を啓き正に導かんとす、先つ其疾を去り源を清むるに非ずんば、何れの處に向ひて化導の手を下さん。是に於て第一に一切の私慾邪念功名富貴の念を拂去りて心體を廓清せん事を要す、心體廓

易を好み
難を惡む
勿れ

佛の見性 清せば眞性始て見はれん、眞性を徹見せば此を涵養操持して向上の一路を辿る、是れ龍場の大悟より來れる王子の本旨なる如し。或は其の説が佛の見性に似るを疑ふ。然り禪の見性成佛は、善を思はず惡を思はず、涅槃寂定の妙境に悟入するなり。王子の見性は、心體を廓清し垢塵を磨刮して、涵養操持の根本田地を養ひ出だすなり、聖人の道吾性に足れる活潑々地の眞性を捉ふるなり。形迹は彼に似るも内容は彼に同らずと知るべし。

四十歳 斯くて四十歳は京師に在つて講學に従事し、晦菴象山の學を論じて與徐成之書あり。十月湛若水命を奉じて安南に使す、王子、聖學明かにし難くして惑ひ易く、人生別るゝに易くして會うに難きを懼れ、文を作つて之に贈る。其一節に曰く、

世之學者、章繪句琢以誇俗。詭心色取。相飾以僞。謂聖人之道勞苦無功。非復人之所可爲。而徒取辯於言辭之間。古之人有終身不能究者。今吾皆能言其略。自以爲若是亦足矣。而聖人之學遂廢。則今之所大患者。豈非記誦辭章之習。而弊之所從來。無亦言之太詳析之太精者之過歟。某幼不問學。陷溺於邪僻者二十年。而始究心於老釋。賴天之靈。因有所覺。始乃治周程之說。求之而若有得焉。顧一二同志之外莫予翼也。岌々乎仆而復興。晚得友於甘泉湛子。而後吾之志益堅云々。全書七卷別 湛甘泉序 以て王子の深慨と、其の甘泉に俟つもの尋常ならざるを窺ふべし。

四十一歳 四十一歳十二月、南京太僕寺少卿に任せらる、是より王子長く京官を離るゝこと、なりたり。赴任の

舟中大學を論す 途次、便道歸省す。時に妹婿徐愛亦南京に官し、王子と同舟越に歸り、舟中にて大學の宗旨を論す。愛歡喜奮ならず、王子年譜之を記して「踴躍痛快如狂如醒」云へり。四十二歳八月、任に滁州に就く。此地山水佳絶而かも政務閑暇なり。乃ち日に門人と山水の間に逍遙講學し、月夕には座を龍潭に移す、諸生潭を環つて坐する者數百人、歌聲山谷に振ふ。舊學の士亦來り學び、從遊者の多き此時より始めり。

從遊始多 四十三歳 四十三歳四月、南京鴻臚寺卿に陞り、南京に赴く。滁の士人送つて烏衣に至り、別るゝに忍びず、王子詩を以て其の歸るを促がし「欲慰相思情。不如崇令德。墟地見泉水。隨處無弗得。何必驅馳爲。千里遠相即」の句あり。五月南京に着す、徐愛其間に周旋し、從遊者益多し。

教旨少變 此時に至り王子の教旨又少變するものあり、そは始めて「存天理去人欲」の教言を掲げたること是なり。時に滁より來遊の士、放言高論を喜び、往々師教に背くものあり。王子曰く、

高明一路 吾年來欲懲末俗之卑汚。引接學者。多就高明一路以救時弊。今見學者漸有流入空虛。爲脫落新奇之論。吾已悔之矣。故南畿論學。只教學者存天理去人欲。爲省察克治實功。全書年譜 丙 二六丁 是れ以て教旨一變の概を察知すへし。高明一路とは、前述せる靜坐して心體を廓清し眞性を見る工夫なり。思ふに記誦詞章に耽着せる俗習を打破し、功利に惑溺せる陋見を一洗せんには、高明超脫の一路を肝要とするのみならず、其實時弊を拯ふ方便とのみ謂はず、道理元來此に外ならず。然れども如何せん學者手段に泥み、形式に拘り、虛見に馳せ易く、空漠の間に眞性の影を妄想して道此に在りと

眞性妄想の弊 前篇 第二章 王子の經歷と立教の過程 講學時代 二五

二十年來の錯處

し、放言高論して實功を輕易す、是れ王子の憂ふる所なり。因て茲に心體を清め眞性を見よと言ふに代へて、心體の命脈骨子なる天理を抉出し、天理を守り存して、人欲を切り拂へと立言し、其手段は省察克治に在りと教ふ。斯くて修業に捉持の個處あり、工夫に下手の手段あり、空漠見性の弊なく、着々着手の件事湧き出づ、是れ蓋王子苦心の在る處、即ち教旨の再變せし所以なり、學者潛心玩味せざる可らず。門人王嘉秀、蕭惠好て仙佛を談す、王子之を警めて曰く「吾幼時聖學を求めて得ず、亦嘗て篤く二氏佛仙に志す、其後夷に居ること三歳、始めて聖人の端緒を見、二十年來錯つて功を用ひしを悔ひたり。二氏の學、其妙處は聖人と只毫釐の間あるのみ、故に辯し易からず。唯篤く聖學に志さず者始めて能く其隱微を究析す、測億の及ふ所に非ず」全書年譜と二六丁

四十四歳立嗣

四十四歳、時に王子尙嗣子なし、父龍山公の命を以つて再從子正憲季叔王宗の孫王守信の第五子を養ひ嗣とす、時に年八歳なり。是歲王子京師に朝す、時事に感じ佛を迎ふるを諫むる疏を作る、而かも上らずして止みたり。時に祖父岑太夫人年九十六、王子請ふて歸省訣を告げん事を請ひ、疏を上ること再度、其辭甚懇切を極めしも允されず。

四十五歳討賊就任

四十五歳、是より先き江西、福建、湖廣、廣東四省の壤地を接したる一帶連山中に巨賊起り、容易に平がず。時の兵部尙書王瓊特に王子を擧げて討賊の任に當らしむ、王子勘亂の事業此に始まる。十月許されて越に歸省す、友人王思輿、季本に語つて曰く、陽明の此行、必事功を立てんと、本曰く、何を以

觸るるも動かす

て之を知る、曰く吾之に觸る、も動かす。四十六歳、正月任地贛州江西に至り、先づ府を開いて十家牌法を行ひ、父老子弟に告諭し、父慈子孝兄愛弟敬夫和婦隨長惠幼順を教へ、風を興し俗を敦くすることを奨む。又民兵を選び、二月、軍を進め、賊と遇ふて大に戦ひ、斬獲頗多し。既にして少く利を失ふ諸將秋を俟つて再舉せんとす、王子之を不可とし、兵を三路に分ち、夜に乗じて賊巢を搗き、勝に乗じて連戰諸洞の賊を殲す。此役三月に涉り、漳南數十年の通寇悉平ぐ。四月師を班す。

提督拜命

九月、改めて南贛汀漳等諸州一帶地方の軍務に提督たるの命を拜し、旗牌を給し便宜事に從ふを得しむ。南贛の地、西は湖廣に接し、桶岡横水の諸賊巢あり、南東は廣東に接し、洞頭の諸賊巢あり、連和して勢を張る。王子十月を以て密に兵を横水に進め、賊巢五十餘を破り擒斬算なし、次で又桶岡を破りて賊酋を擒にし、十二月師を班す。百姓歡喜途に迎へ頂香禮拜し、經る所の州縣皆生祠を立て、遠郷の民肖像を祖堂に掲げ歲時尸祝するに至る。此役門人揚仕徳に書を寄せて左の言ありき。

破山中賊易破心中賊難

破山中賊易。破心中賊難。區々翦除風竊。何足爲異。若諸賢培蕩心腹之寇。以取廓清平定之功。此誠大丈夫不世之偉績。數日來諒已得必勝之策。奏捷有期矣。何喜如之。全書年譜四三丁
嗚呼百千里に蔓延する山賊は之を平ぐるに難からず、方寸に蟠れる人欲てふ心賊は之を掃蕩すること頗至難の業たり。余の祖父方谷、文久元年五十九歳、藩主老中板倉侯の顧問に備はりて江都に在り。偶々愛宕山下に吐血して倒る、即時詩あり曰く「賊據心中勢未衰。天君有令殺無遺。滿胸迸出鮮々血。正是一場

誰か慶戦
血を見ん

慶戦時」と吾人は王子の謂はゆる易を好み難を惡むの常情に狃れ、因循偷安以て賊と對持し、營に賊を破る能はざるのみならず、知らずく彼が爲めに誘惑同化せらるゝこと比々是なり、誰か能く慶戦血を見んものぞ。

四十七歳、三月疾の爲めに疏を上り致仕を乞ふ允されず。乃ち更に大帽洞頭等の老賊を進剿し、四月師を南贛に還す。謂ふ民風の不善なるは教化の明かならざるに由ると、所屬各縣に告諭して、社學を立てしめ、師を延き子弟を教へ、詩を歌ひ禮を習はしむ、之を久うして禮讓の風漸く興る。六月、都察院右副都御史に陞任し、廕子及世祿の典を賜ふ、其の戦功を賞するなり。王子疏を上り辭謝するも允されず。是より先き、王子征途に出入して寧居に暇なきも、門人薛侃、歐陽德等數十人講習して散せず。是に至り軍を回し士を休へ、始めて意を講習に專にすることを得たり。此間の事業として著しきもの三あり其一を大學古本の刊行とす、古本とは、朱子の大學章句本に對して、王子は其以前の古本のまゝにして改補の要なしと云ふなり。其二を朱子晚年定論の刊行とす、初め王子自己の教旨が朱子と合はざるを疑ひ、反覆檢尋して遂に其の晚年悟後の説は頗自己の旨と相符合せるを發見し、之が書牘三十四篇を輯録したり、是歳門人之を刻したるなり。其三を傳習錄の刊行とす、始め門人徐愛其師との問答十四條を筆録す、同門なる薛侃陸澄の二人亦師に聞く所を筆記し、合せて一百二十九條を得、因て師に請ひ徐愛の筆録と併せて之を贛州に刊行す、即ち今行の傳習錄に於て上卷一冊是なり。斯くて王子は一面には赫々

傳習錄

大學古本
刊行
朱子晚年
定論

徐愛歿す

たる事功の名譽を荷ひ、一面には刊行の傳習錄四方に傳播し、道を問ひ教を請ふもの遠近輻湊し、濂溪書院を修して之を收容するに至りたり。是歳徐愛歿す、愛王子に師事し、道を聞くこと最早し、疾の爲め南京兵部郎中を辭し、歸耕して王子の歸るを俟つ、歿する年僅に三十一、王子毎に語つて之を傷めり。

四十八歳

王子の四十七歳は右の如くして畢り、四十八歳は依然贛州に在任せり。正月朝廷其功を賞して廕子の典及世襲の封戸を増す、王子辭謝すれども允されず。又祖母疾重きの故を以て致仕を乞ひしも復た許されず。斯くて六月まで無事なりしが、茲に一大事變湧起せり。元來江西省南昌府は王族寧王宸濠太祖ノ子寧獻王四孫封地にして、世々異志あり、宸濠に至り最も奸惡にして、恩を施し士を集め、諸方賊徒を驅使して羽翼となし、陰に己の第二子を容れて武宗の後となさんと希ふ、朝廷内官亦往々氣勢を通す。是に至り遂に兵を擧げて反し、年號を改め官屬を置き、麾下の兵十萬、江を下りて南康を略取し、九江を陥れ、屬縣風を聞いて皆潰ゆ、直に南京を襲ひ、遂に北京を犯さんとす。王子適々福建の賊を平げんとして輕装途に在り。賊始めより王子を忌む、乃兵を派し來り襲ふ。王子變を聞き漁舟に投じ、纔に逃れて吉安城に入り、明日變報を朝廷に奏す。又た知府伍文定等と檄を四方に傳へ義兵を集め、兩京の備なきを憂へ、種々の偽檄及反間を放ちて賊の進程を阻む。既にして宸濠其の偽を察知し、守兵一萬を南昌に留め七月二日大舉東下して安慶を圍む。十三日王子竊に軍伍を整へて吉安を發し、二十日遂に南昌を抜く。宸濠大に驚き、兵を回し來り襲ふ。二十四日王子其先鋒を破り、二十五日再其本軍を破り、二十六日遂

王子討賊

宸濠反す

宸濠を擒にす

に宸濠を擒にす、擒斬三千、水に落ちて死するもの二萬餘、衣甲器械財物浮屍委積して十餘里に及ぶ、蓋し兵を起してより十四日に過ぎず、古來禍亂を平ぐる此の如く神速なるはなし。王子乃ち捷文を朝廷に上る。此時宦官張忠、許泰等討賊の兵を率ゐて途に在り、王子の功勳を忌み、武宗に親征を勸む、武宗之を許し、車駕南下す。八月王子疏を上りて親征を諫め、九月俘を獻せんとして南昌を發す。張忠等王子に逼り、宸濠等を鄱陽湖に放たしめ、武宗親ら賊と戦ひ之を擒にするを俟つて凱を奏し功を論せんことを主張す、王子從はず。既にして宦官張永來り候す、王子其志を諒し、宸濠を以て之に付し、身は西湖の淨慈寺に疾を養ふ。時に忠泰等王子の功を忌み、讒誣至らざるなし。王子又祖母己に歿し、父亦衰疾の故を以て、數々職を解き歸省せんことを請ふ、許されず。勅あり、江西の巡撫を兼ね、乃ち南昌に還る。

武宗親征

四十九歳

羅整菴に答ふ

四十九歳 天子南京に在り。正月、忠泰等王子の必反するを諷す、武宗曰く、何を以て之を驗せん、對へ曰く、召すとも必來らずと、武宗詔して王子を召す、王子即ち行く。忠泰等懼れ之を中途に阻む、王子己むを得ず九華山に入る、武宗命じて南昌に還らしむ。二月兵を九江に閱す。五月江西大水あり、疏して自ら効す。七月贛に往き、途泰和に出づ、羅欽順號整菴書を以て來り問ふ。其答書に曰ふあり大學古本乃孔門相傳舊本耳。朱子疑其有說誤。而改正補緝之。在某則謂其本無脫誤。悉從其舊而已矣。失在過信孔子則有之。非故去朱子之分章而削其傳也。夫學貴得之心。求之於心而非也。雖其言之出於

學は心に得るを貴ぶ

孔子。不敢以爲是也。而況其未及孔子者乎。求之於心而是也。雖其言之出於庸常。不敢以爲非也。而況其出於孔子者乎。全書二卷答 羅整菴書

公等何そを講せらる

再捷文を上る

既に贛に至り、大に士卒を閲し戦法を教ふ、宦者密に人を遣し動靜を覘ふ。諸人王子を戒め、危難を踏むことなからしむ、王子從はず、啾々吟を作り之を解く。門人陳九川等亦言ふ所あり、王子曰く「公等何を學を講せざる、吾昔省城南昌に在り、權豎の禍目前に在りしも、吾亦帖然たりき、縱令大變あるも亦避け得ず、吾輕しく動かざるは深慮あるのみ」と。時に武宗久しく南京に在り、姦黨自ら俘を獻じ功を襲はんとす、張永聽かす。乃命を王子に下し重ねて捷奏を上らしむ、王子乃ち宦官及車駕扈從諸官の姓名を記入せる捷文を上る、是に於て群小人の嫉妬稍解け、始めて車駕北還の議起る。此間王子は一面には職を解き歸省せんことを請ひ一面には持重して群小の兇餓を折き、且つ門人と學を講し道を論ずるを輟めず、其實驗親修の工夫をなせるは最も此時に多しとなす。門人錢德洪曰く「平藩事。不難於倡義。而難於處忠泰之變」と是なり。是より先き祖母歿す、王子歸て葬に會せんことを請ふも允されず。父龍山公亦病む、王子憂慮の極職を棄て逃れ還らんと欲す。門人周仲王子執著の甚しきを咎めて曰ふ「先生思歸一念。亦似著相」と、王「稍暫くして曰ふ「此相安能不著」と。思ふに佛は一切世間の動不動の法を以て敗壞不安の相となし、著するに足らざるを教ふ。而かも儒教に在つては父子の親、君臣の義、人道の立つ處。天理の表はる、處固く執し深く著せざる可らず、學者思を潜むべし。十一月、武宗の駕南京を

此相安そん

倡義は易く處忠泰は難く

始て愁眉
を開く

發す、王子始て愁眉を開く。斯くて王子十一年の講學時期は茲に畢りぬ。前半は官務に執掌し、後半は兵間に馳驅す、然れども是皆動中養心の境にして事上練磨の地ならざるはなく、次期に於ける王學の完成は實に此間に鍛え出されたるものなり。

五、完成時代

良知拈出

王子己に宗社の大難を靖定し、危疑の間を經過し、百鍊千磨、體驗益々親切にして工夫愈簡易となり茲に其の五十歳を以て始めて良知の二字を拈出して立教の大標準となし、進修の根本義となし、茲に王學を完成するに至りたり。蓋し龍場の一覺は「聖人之道吾性自足」と叫び、爾後門人を率ゆるには靜坐を勧め、眞性を徹見せしむ。南京在官後は専ら人欲を去り天理を存するの教旨を掲ぐ、されども天理に就いて問ふ者あれば、自ら之を求めしめ、先づ人欲に向ふて省察克治の工夫を致さしむるを常とす。蓋し天理言ひ易からず、且つ茫漠の嫌ひなしとなさず、簡易直截を宗とする王子に在りては更に至近至切の端的を見出さざれば已まざるは其勢の自然なりき。尤も龍場以來王子が思想の徑路は大凡致良知の上を辿り、良知の二字幾たびか言辭の間に用ひられしも、猶一段の親切と徹底とを缺き、従つて之を標掲して講學明道の宗旨となすは未だしなりき。然るに四十八九歳の交、憂懼危難一時輻湊の極に處り、思を潜め工夫を凝らす所以恰も龍場の其れの如きものあり、是に於て翻然覺り來り、確乎信し得たるは、

至近至切
の端的

良知具足
せざるな

正法眼藏

千古一快

「此良知無不具足」の一語にして、猶龍場の「聖人之道吾性自足」と了悟せるに髣髴せり。此良知こそ人々圓成具足せる靈明の本體、天理の端的にして、簡易直截之に加ふべきものなく、王子の喜び龍場の其れに劣らざりし如し。鄒守益に書を興へては「益此の二字、眞に吾が聖門の正法眼藏なるを信得す」五卷と云ひ、魏師孟の卷に書しては「致良知の外に學なし、孔孟既に没してより此學傳を失ふこと幾千百年天の靈に頼り偶々復た見る所あり、誠に千古の一快、百世聖人を俟つて惑はざるものなり」八卷と云へり其の歡天喜地の情何如ぞや。又曰く、

一語洞見

吾良知の二字、龍場より以後己に此意を出でざりしも、此二字を點じ出ざりしたため、學者と言ふに多少の辭説を費せり。今幸に此意を點出して一語の下に全體を洞見せしむ、學問の頭腦是に至りて己に是れ説き得て十分の下落あり。全集傳習錄 二卷六八丁

畫龍點睛

と、見るへし王學の完成につき畫龍點睛の手段を全うせしもの、此良知なるを。

是歲王子南昌に居る、武宗崩して世宗立ち、新政の初め王子の功勳を嘉みして召用の勅至る。六月、王子程に上りて錢塘に至り、輔臣の沮抑に遭ふて果さず、南京兵部尙書に陞り始めて歸省を許さる。乃ち八月を以て越に歸り、又た餘姚に先塋を展し、深く母氏の生前に孝養する能はざりしと、祖母死して殮に與る能はざりしとを傷めり。既にして宗族親友と宴遊し、地に隨うて良知を説示す。後年王子の年譜を撰著せる高弟錢德洪も、是時二姪を率ゐて門下に來り學べり。十二月、詔書新建伯に封し祿米千石

錢德洪來
學

父誕辰春
風堂に滿

を給し、兩京兵部尙書を兼ね機務に參贊せしむ。時に父龍山公の誕辰に値ひ、親朋悉く集りければ、王子觴を捧げ壽を獻し、門戸光輝を添へ、春風堂に滿つ。公因つて誠むるに盈滿の義を以てす、王子跪いて曰く「大人の教、兒の日夜切心せる所なり」と、聞く者感嘆せざるはなかりしとぞ。

龍山公歿

當路壓迫

五十一歳、二月龍山公七十七歳にして歿す。王子喪に居り且つ疾めり、遠方道を問ふ者日に至るも、多くは之を辭謝し、各々歸て之を孔孟の訓に求めしむ。時に宰輔王子の功を忌むものあり、部下將卒の論功行はれず、王子心に安せず、再び封爵を辭せしも允されず。時に御史の程啓充給事の毛玉二人、時相の意を承け、王子を彈劾するに異説を唱へ正學を遏むと云ふを以てす、是れ王學に於ける當路壓迫の始めとす。此時門人陸澄朝廷に在官し、六辨を爲りて其其言を折く、王子聞て之を止めて曰く、

辨せずし
つて謗を止

他の非難
は吾人砥
礪の地

辨せずして謗を止むとは、嘗て昔人の教に聞けり、惟だ之を己に反省すべきのみ。苟も彼の言にして是なる所あり、吾の心にして未だ信する能はざる所あらば當に其の是なる所を求むべし、容易く人を非とす可らず。又た彼の言にして非なる所あり、吾の心には自ら信する所あらば、益々踐履の實を致して自ら慊くするを求むべし。然らば今日他の非難は、吾人が心を動かし性を忍び砥礪切磋の地に非ざるはなし。且つ議論の起るは我に私怨あるに非ず、亦自己の道を衛らんと欲するのみ、徒に彼を罪す可らず。全書五卷
輿陸元靜

翌年二月南宮進士の策問あり、當路者心學の間を試み暗に王學を排す。王門の徐珊之を讀み嘆じて曰く

聖學
明なら

「吾惡んそ吾知を味まして以て時好に投せんや」と、答へずして出づ。同門歐陽德、魏良弼等は忌憚なく王學に本づき師教を發揮せしも、幸に當選せり。錢德洪は下第して歸り、王子に面して深く時事の非なるを嘆す、王子喜んで曰く「聖學茲より大に明ならん」と、德洪之を問ふ、王子曰く「吾學徧く天下の人に語るを得ず、今會試の錄天下に弘布せば、窮郷深谷も到らざる所なし、若し吾學果して非ならば天下必起つて眞是を求むるものあらん。全書年
譜六丁と、以上の數項は、王子の胸次灑然、群毀衆難耳に入て逆はざるの概を想見すべし、孔聖耳順の境涯に近きものあるなからんか。

五十三歳

南大吉問

多し、先生何ぞ一言の訓なきや」と、王子曰く「何の過ちぞ」と、大吉其過失を歷舉す、王子曰く「吾既に訓へ了る」と、大吉曰く「如何の訓ぞ」と、王子曰く「我教訓したるにあらずんば、汝何を以て過ちを知らるや」と、大吉曰く「そは某の良知之を知るのみ」と、王子曰く「良知は我平常の訓言に非すや」と、大吉笑ふて謝し去る。數日又來り請うて曰く「過つて改めんよりは、預め訓へられて過たざるの佳となすに如かず」と、王子曰く「人の之を訓へんよりは、過つて自ら悔ゆるの眞なるに如かず」と、大吉復た笑ふて辭し去る。復た數日請ふて曰く「身過は勉むべし、心過は奈何にせん」と、王子曰く「昔鏡の未だ開かざる、垢汗を藏すべけれど、今や鏡に既に明なり、一塵落ち來るも脚を住め難し、是れ入聖の機なり之を勉めよ。全書年
譜九丁と、問ふ者善く問ひ、答ふ者善く答ふと謂ふべし。斯くて大吉は稽山書院を創め、郡中

入聖の機
稽山書院

老詩人入門

吾所好に
従はん

八邑の秀才を聚めて王子を聘し、躬ら率先督勵して斯學を講習す。諸方の名士も亦來り會し、講壇を環りて聽く者毎に三百餘人。王子は主として萬物同體の旨を發揮し、人をして良知を極めて至善に止るの功夫を致さしむ。海寧の老詩人董溧年六十八、蘿石と號す、會稽に遊び、瓢笠詩卷を肩にし颯然來り訪ひ、遂に弟子と稱して歸るを忘る。郷黨社友懇に招いて曰く「翁老いぬ何を自ら苦むこと是の如きぞ」と溧曰く「吾方に苦海を逃れて、汝等の自ら苦めるを憫めり、却て吾を以て苦となすや、吾は吾が好む所に従はんのみ」と、遂に従吾道人と號す、王子「從吾道人記」を作り之を嘆賞せり。八月門人を天泉橋に宴す、侍坐する者百餘人、酣飲興劇歌聲耳に盈つ。王子退いて詩を作り「鏗然含瑟春風裏。點也雖狂得我情」の句あり。時に朝廷大禮儀あり、世宗、生父興獻王を尊んで獻皇帝となし皇考と稱せんとす、衆議頗噪き、故友往々問質する所あり、王子答へす。夜碧霞池に坐し、二律を賦す、蓋す時事に感ずる所ありなり。

碧霞池二律

一雨秋涼入夜新。池邊孤月倍精神。潜魚水底傳心訣。棲鳥枝頭說道真。莫道天機非嗜慾。須知萬物是吾身。無端禮樂紛々議。誰與青天掃舊塵。

獨坐秋庭月色新。乾坤何處更閑人。高歌度與清風去。幽意自隨流水春。千聖本無心外訣。六經須拂鏡中塵。卻憐擾々周公夢。未及惺々陋巷貧。

五十四歳

五十四歳、王子前きに父の喪に服し官職を去る、前年服既に除くも朝廷起復の命なし、禮部尙書席書

宇宙間有
數文字
五十五歳

良知と太
虚

天地萬物
一體

特に論薦する所ありしも容れられず。九月先墓を餘姚に省し、諸生を龍泉寺の中天閣に集め、爾後毎月數次會集切磋せしめ、文を壁に書して之を獎勵す。又た顧東橋に答へ、朱子の格物説が心と理とを析ちて二となすの非を論し、心の虚靈明覺は即ち本然の良知なりと云ひ、身、心、意、知、物の一なる所以を辨じ、格物の格は之を正と訓すべきを詳説し、其末に「拔本塞源論」傳中三〇を以て之に繼ぎ、萬物一體の教旨を餘蘊なく説盡せり、實に宇宙間有數の文字とす。

五十五歳。鄒守益に答へて「良知之在人心。則萬古如一日。苟順吾心之良知以致之。則所謂不知足而爲屨。我知其不爲黃矣」全書の言あり。南大吉入朝して官を罷めらる。時に千數百言の長牘を王子に致し聖人となるを得ざるを以て憂となし、一字も得喪榮辱の上に及ばす。王子「朝聞道夕死可也」の志あるを賞し、且つ「良知の昭明靈覺圓融洞徹は廓然太虚と體を同くす、大虚の中何物が有らざらん、而して一物の能く其の障礙をなすなし、良知も亦然り、富貴貧賤愛憎取舍何物も良知を蔽ふに足らず」全書六卷と答南元善との意を致す。又州守歐陽徳が政務緒に就けるを以て、始めて諸生と學を講すと謂へるに答へて「吾が講する所の學は、正に政務倥偬の中に在り、豈必徒を聚めて後學を講すとなさんや」全書年譜と誠め、又た「致良知是學問大頭腦是聖門教人第一義」傳中六の說あり。聶豹に答へては「夫人者天地之心。天地萬物本吾一體者也」傳中八の說あり。門人情陰會を創む、王子情陰説を作つて言ふ「嗚呼天道の運一息の停まるあるなし、吾心良知の運も亦た一息の停まるあるなし。良知は即ち天道なり、之を亦と謂は、則猶之

天人一理
萬物不二
嗣子正億
生る

を二にせり。良知の運一息の停まることあるなきを知らば、則ち惜陰を知らん、惜陰を知らば、則ち其良知を致すを知らん全書七卷。是に至ては良知は即ち天道にして、良知の活潑停滯なきは即ち天道の流行と一體、吾人分寸の光陰を空過すれば、即ち我良知に分寸の缺空を生ずるなり、即ち又た天道の流行に停滯を生ずるなり、天人一理萬物不二の道理を此に會得せざる可らず。是歳嗣子正億生る、前年夫人諸氏歿して子なし、繼室張氏を納る、始めて子あり。

五十六歳

五十六歳、正月書を京官なる門人黃賢に與へて「人の仕途に在るや山林退處の時に比すれば工夫の難

出世一遭

き十倍す、良友を得て時々警發砥礪するに非されは平日の志向弛然として頽靡に就かん云々。微細だも氣を動かすの處あらば、致良知の話題を提起して互に相規切すべし、良知一たび提醒されるれば、白日一出して百鬼忽ち消ゆるが如けん。然れども此れ天下の大勇に非されば能はず、眞に能く己私に克ち去り天地萬物を以て一體となし、實に天下を康濟して三代の治を挽回す、方に是れ聖明の君に負かず、方に此の出世の一遭を空しくせず全書との意を致せり。四月、鄒守益請ふて王子の文章四冊を刻み、文録と稱す。王子預め其作の順序に従ひ年月を標して曰く「所録以年月爲次。不復分別體類。蓋專以講學明道爲事。不在文辭體要之間也」全書年譜と、是れ王子の文集世に公にせられたる始なり。

文録刊行

斯くて前後七年に涉り、越城に於ける王子の歸隱は、幸に無事平穩にして講學明道に餘念なからしむ

是れ天が王子を閑地に置いて斯學を完成せしめたるなからんか、王學が天壤間に抜く可らざる根柢を植

え、掩ふ可らざる光耀を開發せるもの、殆ど此時代の賜なり。憾むらくは前途猶春秋に乏しからざる王子をして早くも晩年期に入るの已むを得ざるに至らしめたるを。

六、晩年

思田討賊
病患の王
子

天は有爲の材をして永く山林に在らしむるを許さず、王子五十六歳の五月、茲に思田征討の朝命は下れり。是より先き廣西省田州に土賊起り、提督姚鏞四省の兵を率ゐて進討せしも克たず、朝廷遂に王子を起して四省の軍務を總督せしめ、便宜撫勦の特典を附與し、促して任に就かしむ。然るに王子の南贛軍務に提督として賊亂を勘定するや、炎瘴を冒して咳痢を病み、肺患と足瘡とは遂に其痼疾を成して征

錢王二子
と四句教
法

苒愈へず、此時病勢頗る進みたれば、疏を上りて命を辭す。されども許されず、九月九日を以て遂に征途に就けり。其前日錢德洪王畿の両高足師門の四句教法に就き議論相合はず、德洪曰く吾二人見る處同

天泉橋上
の質問

しからずんば、何を以てか人の見る所を同くせんや、何ぞ相與に正を先生に取らざるやと、夜半天泉橋上に侍して質問す。王子曰く「二子正に此一問あるを要す」と、因て上根下根本體工夫等の旨につき、循

々説示して四句の宗旨を囑付す、二人大に省發する所あり、王子歿後斯學決裂に至らざりしものは當日問質の効多きに居る。本篇四句教法参照翌日程を發し、錢塘を渡る、錢王二子送て嚴灘に別る、王子言を留めて曰く「我れ良知の兩字を拈出す、是を是とし非を非とし自ら天則あり、乃ち千聖の秘藏なり。昏蔽の極と

是々非々の天則

雖、一念自ら反すれば即ち本心を得、以て立どころに聖地に躋るべし。只人看得て太だ易きに縁つて反て玩び忽せにすることを成す龍溪語錄卷八書と先師過釣臺遺墨。王子の二子を従へ釣臺を過ぐるの詩に曰ふ、

釣臺萬斛の感慨

憶昔過釣臺、驅馳正軍旅。十年今始來。復以兵戈起。空山煙霧深。往迹如夢裏。微雨林徑滑。肺病雙足厭。仰瞻臺上雲。俯濯臺下水。人生何碌々、高尚當如此。瘡痍念同胞。至人匪爲己。過門不遑入。憂勞豈得已。滔々良自傷。果哉未難矣。全書二十卷七十二丁

千聖皆過影良知乃吾師

道體に方所なし

眞機妙諦

既に衢州を経て常山を過ぎ、「乾坤由我在。安用他求爲」。千聖皆過影。良知乃吾師同上七十四丁の句あり。既にして廣信より舟に上る、門人徐樾追うて至り、舟中教を乞ふ。樾は白鹿洞に打坐し禪定の意あり、王子之を察し、座上の燭光に譬へ道體を説て曰ふ「道體豈方所あらんや、燭光在らざる所なし、獨り燭上に其光を指す可らざる如し。此處も亦光なり、彼處も亦光なり、舟外の水面も亦光なり」年と、樾拜謝して辭し去れり。蓋し禪定の工夫たる、方寸の間に心體を握り殺す弊あり、王子は燭光を借りて、感應自在宇宙に徧滿する眞機を説示せるなり。「心に體なし、天地萬物感應の是非を以て體となす」などの言に併せ考へなば、斯學の眞機妙諦蓋し領得するに難からざらんか。

此の如き大捕人

十月南昌に入る、父老軍民香火を頂にして歡喜出で迎へ、道途に填塞して行く能はず。大學を明倫堂に講ず、聽者堂に溢る。唐堯臣始め斯學を信せず、講を聽くに及んで沛然疑ふ所なし。知友笑うて曰く通逃の主も亦來りて投降するやと、堯臣曰く、此の如き大捕人ありて方に能く我を降すと。次で南下吉安

六虛周流

愈眞切なれば愈簡易なれば愈眞切なれば愈眞切なり全と

五十七歳

至誠感字

に至り、大に士友を會す、遠近集る者三百餘人、王子立談して倦まず、曰く「堯舜は生知安行の聖人なるも、猶兢兢業々として困勉的の工夫を用ふ。吾人は困勉的の資質を以て、悠悠蕩々坐して生知安行の成功を享けんと欲す、豈己を誤り人を誤らざらんや」全書三四卷四〇丁と。又曰く「良知の妙は眞に是れ六虛四方上下に周流して變通居らず、若し假りて以て過を文り非を飾らば害たるや大ならん」全と、其流弊を虞るや親切なり。又た別に臨み諸士に懇囑して曰く「工夫は只是れ簡易眞切なり、愈眞切なれば愈簡易なり、愈簡易なれば愈眞切なり」全と、是れ斯學徹底の窮竟義なり。

五十七歳王子既に廣西の梧州に着し、府を開らき方略を議す。因て叛亂の因を察して、主として守備を撤し、民心を靜め、恩威を示す。二月賊會感喜し、徒衆一萬七千を率ゐて來り降る、王子皆之を散遣して農耕に歸せしむ。是に於て二省を擾亂せる猾賊、一兵を煩さずして鎮定せり、豈至誠感孚然るを期せずして然るものあるに非ざらんや。乃ち學校を興し、風化を導き、勉めて地方安輯の基を作る。是より先き朝命あり、王子をして兩廣の巡撫を兼ね、暫く邊地に駐らしむ、王子病の故を以て之を辭せるも允されず。七月更に進んで八塞斷藤峽の賊を掃蕩す。抑此賊は廣西省の西南山中に盤據し、南は安南交趾、西は雲南貴州の諸蠻夷と連絡し、出沒自在、明朝の初より王命に抗す。王子諸將を部署し、道を分つて其の不意に出で、斬獲三千、其巢窟を一掃せり。九月錢王二子に書を與へて曰く「地方の事幸に平息す。相見ること漸く期すべし。近年同志集會の狀如何を審にせず、法堂の前今己に草深きこと一丈

法堂前草深一丈なるや否

疾劇興つ能はず

伏波廟に謁す

なることなきを得るや否や全書六卷三一丁と、王子が兵馬倥偬の中に在て、常に眷々の思を千里同志の上に寄するの深情を窺ふ可し。然るに宿疾漸く劇しく、往々臥内に在て事を視しも、是に至り復興つ能はず、遂に上疏して休を請ひ、南寧廣西省西南より舟路梧州に出で、南雄韶州廣東省の南部江西に近しの間に朝命を待たんことを奏請し、遂に程に上る。途に漢の伏波將軍馬援の廟に謁す、王子年少夢に伏波廟に謁し詩を賦せり、今祠下に拜し、見る所宛然夢と相符す、因て詩を賦し「此行天定豈人爲」の句あり。又た書を魏廷豹に贈りて必ず事とする所あれば、忘る、勿れと助け長する勿れとを説くに及ばずとて、時々集義の教旨を示せり。

満子の廬を訪ふ

火燃泉達

病勢猖獗

王子既に疾を扶けて途に上り、増城に至る、此地五世の祖王綱の廟あり、乃ち之を祀る。又た湛甘泉の廬を訪ふて「落々千百載、人生幾知音。道通著形迹。期無負初心」全書二〇卷七十七丁の句あり。錢王二子の書に答へては、其工夫の進歩せるを喜び。餘姚紹興等の同志會講奮起せるを聞き、吾道の昌なる、眞に火燃へ泉達するの機ありと説く。何廷仁に答へては「區々病勢日に猖獗、廣城に至てより、又た水瀉を増し、日夜數行、両足坐立する能はず。少快を待つて嶺を踰へ東歸せん、諸友果して志あらば、錢塘の舵を鼓し、徳洪汝中の輩と一會聚せよ、彼此必ず益あらん。己れ養病の疏、旬日後必ず旨を得ん、縦ひ歸田を遂げざるも、亦必ず一たび陽明洞に還り、諸友と一面して別ることを得ん。徳洪汝中の輩には、之を促して早く北上の圖入京殿試を爲さしむべし、伏枕潦草」全書六卷三三丁と、眷々獎掖尤も觀縷を盡す、誰か其

誰か伏枕瀕死の人なるを知らんや。十一月二十五日、遂に北上して梅嶺を踰へ、南安府江西省南部に入り、更に舟に上る。南安の推官なる門人周積來り見ゆ、王子起坐せるも、咳喘已ます、徐ろに謂ふて曰く、近來の進學如何と。積乃ち政を以て對へ、遂に道體恙なきや否やを問ふ、王子曰く、吾れ病勢危亟なり、未だ死せざるものは元氣のみと。積退いて醫を迎へ來り診藥す。二十八日晚舟を泊す、王子問ふ何の地ぞ、侍者曰ふ青龍舖と。翌日王子積を召し入れ、暫くして目を開き視て曰く「吾去矣」と。積泣いて遺言を問ふ、王子微笑して曰く、

吾去矣

臨終の一語

此心光明。亦復何言。

と。少頃の後曠世の大人物陽明王子遂に瞑目して旅次に長逝せり、時に二十九日辰時午前十時なり。贛州兵備官張思聰は門人なり、追うて南安に至り、遺體を南野驛に迎へ、沐浴袞歛禮の如くす。十二月三日、官屬師生相集り、祭を設け棺歛す。明日櫬を輿して舟に上り、贛を経て南昌に至る、沿道士民道を遮り哭聲地に震う。是より前き錢王二子入京殿試に應せんと欲して途に在り、王子の歸轅を聞き、迎へて嚴灘に至り、始て訃に接し、翌年正月三日嘉靖八年同門に訃告す。二月、喪、越に歸る、親族子弟門人始て臨哭の禮を行ふ。此時朝廷に異議あり、爵廕贈諡の諸典皆行はれず、且つ詔を下して偽學を禁す。門人黃綰等上疏之を辨せしも報せられず。十一月洪溪鶴城を距五里に葬る、門人千餘人葬に會し柩を扶く、四方より來り觀る者、皆涙を揮ふ。其後穆宗統を承け、王子の功勳を追褒して新建侯を贈り、文成と諡し、且つ

偽學禁

追褒

詔して

從祀

堯孔の心傳を紹きて、微言式で開け。周程の學術を倡へて、來學の宗とする所の文あり。時に王子歿して三十八年、天定つて人に勝つもの非歟。萬曆中孔子の廟廷に従祀せらる。

第三章 總 結

近時の人至聖孔子の人格を論して曰ふ、孔子は何等の助けを假らず、何等の奇蹟を履まず、刻苦修養尋常徑路を履みて大聖の域に入るの模範を遺せり、實に平凡の非凡なる者なりと。今之を王子の上に視んか、其の五濁は孔子の溫良恭儉讓に比すべくもあらず、彼に入り此に出て、迷惑百端、實に王子は缺陷多き人なり、性癖多き人なり、何ぞ其の平凡なるや。而かも簡易純正の歸を得ずんば已まず、五十七年の生涯を鞭撻して、眞儒哲人の域に進入し、劣機下根の凡夫も、眞修實行の心だにあらは、賢たり聖たるは極めて易々たるの模範を示し、法門を開く、其の偉業は亦一層の非凡を示せり。學者王子一生の經歷を通觀せば自ら其の然るものあるを知らん。吾人は更に王龍溪が王子進修の次第を同志に告げたる滁陽會語を左に掲げて本篇の總結となさん。

平凡にして一層非凡

王龍溪の滁陽會語

先師之學。凡三變而始入於悟。再變而所得始化而純。其少稟。英毅凌邁。超俠不羈。於學無所不窺。

一變

二變

三變

悟後一變
悟後再變

嘗泛濫於詞章。馳騁於孫吳。雖其志在經世。亦才有所縱也。及爲晦翁格物窮理之學。幾至於殞。時苦其煩且難。自嘆以爲若於聖學無緣。乃始究心於老佛之學。築洞天精廬。日夕勤修。煉習伏藏。洞悉機要。其於彼家所謂見性抱一之旨。非惟通其義。蓋已得其髓矣。自謂嘗於靜中內照形軀。如水晶宮。忘己忘物。忘天忘地。與空虛同體。光耀神奇。恍惚變幻。似欲言而忘其所以言。乃眞境界也。及至居夷處。困動忍之餘。恍然神悟。不離倫物感應。而是々非々。天則自見。徵諸四子六經。殊言而同旨。始嘆聖人之學坦如大路。而後之儒者妄開逕竇。紆曲外馳。反出二氏之下。宜乎高明之士厭此而趨彼也。自此之後盡去枝葉。一意本原。以默坐澄心爲學的。亦復以此立教。於傳習錄中。所謂如鷄覆卵。如龍養珠。如女子懷胎。精神意思。疑聚融結。不復知有其他。顏子不遷怒貳過。有未發之中。始能有發而中節之和。道德言動。大率以收斂爲主。發散不得已。種々論說。皆其統體耳。一時學者聞之。翕然多有興起。然卑者或苦於未悟。高明者樂其頓便。而忘積累。漸有喜靜厭動玩弄疎脫之弊。先師亦稍覺其敎之有偏。故自滁留以後。乃爲動靜合一工夫本體之說以救之。而人者爲主。未免加減廻護。亦時使然也。自江右以後。則專提致良知三字。默不假坐。心不待澄。不習不慮。盎然出之。自有天則。乃是孔門易簡直截根源。蓋良知即是未發之中。此知之前更無未發。良知即是中節之和。此知之後更無已發。此知自能收斂。不須更主於收斂。此知自能發散。不須更期於發散。收斂者感之體。靜而動也。發散者寂之用。動而靜也。知之眞切篤實處即是行。眞切是本體。篤實是工夫。知之外更無行。行之明覺精察處即

居越後益
圓熟
晚年益融
釋
事業學問
兩事に非

是知。明覺是本體。精察是工夫。行之外更無知。故曰。致知存乎心悟。致知焉盡矣。遠居越以後。所操益熟。所得益化。信而從者益衆。時々知是非。時々無是非。開口即得本心。更無假借湊泊。如赤日麗空而萬衆自照。如元氣運於四時而萬化自化。亦莫知其所以然也。晚年造履益就融釋。即一爲萬。即萬爲一。無一無萬。而一亦忘矣。先師平生經世事業震耀天地。世以爲不可及。要之學成而才自廣。機忘而用自神。亦非兩事也。龍溪全集卷二

冷暖自知

右は王子一生積累神化の次第を叙し來つて、頗る其蘊を盡せり。末段功名兩事に非ざるの一議、殊に王子の眞頭腦を見得せるものに非ざらんや。龍溪更に實心もて致良知に従事すべきを説き、最後に曰く、「諸君が今日悟る所の虚實と、得る所の淺深と、之を先師が終身經歷の次第に質さば、其の合ふと否らざるは謂はゆる人の水を飲み冷暖自ら知るが如けん、此を以て之を求めば沛然として餘師あらん」と。先づ我意を獲たるもの、王子終身の經歷、豈漫然讀過すべけんや。

本篇 教義門

第一章 立志

一聖一賢

孟子曰く「志は氣の帥なり、」又曰く「志至り氣次ぐ」と、志は實に吾人百行の指揮者なり。孔聖曰く「吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。」論語と、爲政矩を踰へざる聖域に上れる孔子も其修業は十五歳の志學に始まり。之を一聖一賢に徴するに立志の緊要なること言ふを俟たず。されども之に與ふるに甚深の意義を以てし、急言竭論して殆ど餘蘊なきもの蓋陽明王子の如きは稀なり。

晴天の霹靂

立志の道破 王子三十一二歳の交漸く仙と釋との非を覺り、三十四歳京師に在り、始て子弟と斯學を講ず。時に學者率ね詞誦に溺れ、復た身心の學あるを知らず。王子謂ふ、聖學の興らざる風教の純ならざるは、其弊根此に本づく。乃ち劈頭喝破して曰く「人は必先づ聖人たらんと志を立てざる可らず」と是實に荒迷せる當時の學界に向ふて晴天の霹靂なりき。而かも王子が徒に壯語せるにあらで學問向上の端的實に此に在り。されば後年王子の龍場に在るや、子弟を教化せんとて四個の教條を掲げ、第一に立志を説いて曰く、

龍場の訓

聖に志さば賢に

志立たずば天下に成すべきの事なし、百工技藝と雖未だ志に本づかざるものあらず。今學者の曠廢墮惰して、百、成す所なきは、皆志の立たざるに由る。故に志立たば、聖に志さば聖となり、賢に志さば賢とならん。志立たずば、舵なき舟の如く、銜なき馬の如く、漂蕩奔逸して終に亦何の底る所ぞや。全書二卷一〇

志は舟の舵なり、馬の銜なり、賢を志さば賢とならん、聖を志さば聖とならん、誰か之を遏め得んや、吾人向上の機此に在るを忘る可らず。

責志 志を立つるは專一ならざる可らず、專一ならざれば怠忽生じ邪惡入る。此時に當つては又唯だ責志の一方あり、能く魔障を拂ひ初志に還るを得べし。王子曰く、

只此志を責めよ

志は氣の帥なり、人の命なり、木の根なり、水の源なり、是を以て君子の學は、時として處として立志を以て事となさざることなし、猫の鼠を捕る如く、雞の卵を覆ふ如く、精神心思凝聚融結して他あるを知らず。然る後此志常に立ち、神氣精明義理昭著にして、一も私欲あらば即ち知覺して自然に容住し得じ。故に一毫私欲の萌すや、只此志の立たざるを責めば、私欲便ち退聽せん。一毫客氣の動くや、此志の立たざるを責めば、客氣便ち消除せん。或は怠心生ず、此志を責めば即ち怠らじ。忽心生ず、此志を責めば即忽せならじ。貪心生ず、此志を責めば貪らじ、傲心生ず、此志を責めば傲らじ。故に志を責むるの功、其の人欲を去るに於けるや、烈火の毛を燎く如く、太陽一たび出で、魍魎潛消するが如けん。中畧後世の大患尤も志なきに在り、故に今立志を以て説を爲す、蓋終身問學の功、只是れ志を立て得るのみ。傳中一

烈火毛を燎く

立志と學問

學問は志を立てるに始まる、志立たば學問自ら生ず。王子は弟子郭慶の歸省に臨み之に告

立志の要と、責志の功と、説き得て底蘊を竭せり。

志は種子なり學は耕耨なり

げて曰く「志は種の如し、學問思辨して篤く行ふは耕耨灌溉して以て秋あらんことを求むるが如し」全書七卷一六。立志は學問思辨の種子なり、種子を下さずして耕耘に従事する農夫はあらし、志を立てずして學問に従事する學者ある可からず。若し之あらんか之を俗學と曰ふ。眞學問は立志の下に始まらざる可らず。而かも王子の工夫は年と共に益親切に赴けり。其の克彰太叔族叔に與ふるや曰く、

志立て學問の功半を過ぐ

惡念は習氣なり、善念は本性なり、本性が習氣の汨たす所となるは志の立たざるに由る。故に凡そ學者にして習の移す所となり、氣の勝つ所とならば、則ち務めて痛く其志を懲らせよ、久しければ志も亦漸く立たん。志立たば習氣も漸く消へん、學は立志に本づく、志立つて學問の功已に半を過ぐ。此れ守仁邇來新に得たる所の者、願くは輕しく擲つこと勿れ。全書二六卷二三

志立つて學問の功已に半を過ぐとは、親切精到の教旨に非ずや。譬へば山に登る如し、登らんか登らざらんかと吾人は終年山を眺め麓に彷徨し、遲疑の下に動もすれば半生否一生を空過す。而かも一人あり決然志を立て、邁往せんか、其人縱令體弱きも、脚健ならざるも、いつかは雲を排し、巔に上りて高根の月を賞せん。此時山下を瞰みんに前の人は依然として麓に遲疑彷徨せるを見る、是に於て立志と否とは頃刻の間に、人に雲壤の差あらしむるなり。斯く觀じ來れば、志已に立たんか、學問の功已に半を過ぐるもの徒言にあらじ。而かも王子の工夫は又更に一段の直截を加へぬ、そは五十三歳門人朱守諧の爲めに其卷に書せる言に見よ。

立志と爲
學と二に
して一也

守諸問^レ爲^レ學。予曰立志而已。問^レ立志。予曰爲^レ學而已。守諸未^レ達。予曰。人々學^レ爲^レ聖人一也。非^レ有^レ必爲^レ聖人一之志^上。雖^レ欲^レ爲^レ學。誰爲^レ學。有^レ其志一矣。而不^レ下^レ日用^ニ其力^一以爲^レ之。雖^レ欲^レ立^レ志。亦烏在^ニ其爲^レ志乎。故立^レ志者爲^レ學之心也。爲^レ學者立^レ志之事也。全書八 卷一〇

立志は學
問の全體
なり

夫れ登山の志立たば、登山の事生ず、志は登山せんとする心にて、登山は登山せんとする志の仕事なり。學問も亦然り、爲學は立志の仕事にして、立志は即ち爲學の心なり。誰か王子は讀書講學を輕んずと云ふや、讀書講學と立志とは二にして一なり。是れ知行合一の教旨が到達すべき必然の歸著點にして、此に至つては志立たば學問の功已に半を過ぐるのみならず、立志は實に學問の全體なり。眞箇立志の二字斯學の第一義諦とす。

王子の深慨 立志と云ひ、爲學と云ふ、必や聖人たらんと志を立て、聖人たるの學を爲すは言ふを俟たず。然るに世教の頹弛するや、人心靡然華に馳せ、易きに就き、立志希聖の眞學に至つては嘗に馬耳の東風のみならず、聖人の稱呼を聞けば、瞠目疑怪して嘲笑の資となさざるは稀なり、請ふ王子の深慨を聽け。

怪物

聖人の學や久しく世に棄てらるゝこと、嘗に土苴の如くなるのみならず、苟も言論之に及ぶものあれば、衆共に非笑詆斥して怪物となせり、惟だ世の賢士大夫と稱する人にして、始て或は聖學を以て相講究するあり、然かも其の身を立て己を行ふの實と、其平日常庭の間に於て其子孫を訓督し期望する

粉飾文具

所以とを考ふれば、亦汲々として惟だ功利を之れ務めとせずんばならず、而かして謂はゆる聖賢の學は、徒に其談論に資し、其外を粉飾文具するに過ぎず。是の如き者常に十にして八九なり。全書八 卷一九

立志幾立
志哉

右は王子の五十六歳に係れり。此年王子は南方討賊の軍務に就き、明年賊平いで未だ凱旋するに及ばず「此心光明亦復何言」の一語を遺して竟に道途に歿せり。晩年の深慨、百歳の下尙生氣凜々として吾人の肺腑に徹るものあらずや、嗚呼記誦詞章の博に趨らんか、功名利達の榮に就かんか、聖賢の眞學に従事せんか、左右分水の關頭は立志に在り、立志なる哉立志なる哉。

第二章 心即理

王學の出
發點

王子の龍場に大悟せるや、「聖人の道吾性自ら足る、向きに理を事物に求めしものは誤れり」と道破せり。此の道破は實に斯學の出發點にして、又た王子の根本精神なり。而して此一悟は全く「心即理」の上に立てるものなり。而かも「心即理」を究めんと欲せば先づ「性即理」を究めざる可らず「性即理」を究めんと欲せば先づ「天即理」を究めざる可らず。

一、天即理

天とは何
ぞ

天とは何ぞや。蒼々たるものは天か、莊周曰く遠くして至極する所なければ其の下を視るも亦是の若

自然の天
機恒久の神
理

けんど、然らば其の蒼々たるは遠きより見たる色のみ、天に非ざるなり。然らば日月は天か、吾れ其の
遞に炤くを知るのみ。山川は天か、吾れ其の時つと流るゝを知るのみ。而かも誰か之を蒼々たらしむ
る、誰か之を遞炤し流時せしむる、上天の載こせもなし臭かもなし、然れども日月星辰上に懸り、森羅萬象
下に列なり、四時行はれ百物生じ、古往今來生々して息まず、新々故々變化して窮らず、秩然たり井然
たり、萬古此の如し、吾人は仰觀俯察、そこに自然の天機恒久の神理を感得認知せざる能はず。此の天
機此の神理、之を呼んで天と謂ふ。此の天機此の神理を外にして、吾人は何れの處より天てふ觀念を導
き來らん、故に曰く「天即理」なりと。

程朱と天
即理

孔子は「天何言哉。四時行焉百物生焉」傳と云ひ、孟子は「莫之爲而爲者天也。莫之致而致者命也」萬章上
と云ひ、子思子は詩の「維れ天の命穆として己まざる」を贊して、「天之所以爲天」中庸と云へり。聖賢の認
知したる天、固より此の天機此の神理を指稱するに外ならず、されども、未だ語つて詳ならず。宋に及
び程伊川及朱子始めて「天即理」の説あり、性理大全二此の一語は古人の未だ道はさる端的を道破して其要
を示せるに近し。されども茲に辨せざる可らざるは。程朱の宇宙觀より來る理の觀念なり。二子は宇宙
の根本を理氣の二元に立て、天地萬物の運行變化を以て陰陽となし、氣となし、氣に先つて運行變化す
る所以の理を立つ、故に其理や氣を外にしたる理にして、吾人が先きに述べたる恒久の神理自然の天機
を對象として直に之に下すに理の稱呼を以てするは程朱の意に非ざるなり。是に由て之を論すれば吾人

陸象山と
天即理

は陸象山に至りて始て純乎たる「天即理」の觀念に逢著する感なくんばあらず其言に曰く、

塞宇宙一理耳。學者之所以學。欲明此理耳。象山全集 一二卷八

此理塞宇宙。古先聖賢常在目前。同上

王子の先
驅

斯くて象山は理と氣とを分だす、宇宙に塞がるものを以て直に一理となす、是れ實に王子の先驅なり。
然らば王子は何とか言へる、請ふ之を左の言に見よ。

天地の間原と只此の性あり、只此の理あり傳中 九一

天地の間活潑々地此の理に非ざるはなし傳下 七二

宇宙間只
是此理あり
氣を外に
して理なし

王子の見地に立てば、宇宙間只是此の理あるのみ。吾人が眼前に日々夜々逢著接觸する所の、雲行き雨
施し、山峙ち川流れ、鳶飛び魚躍るの千變萬化の流行は此の理に非ざるはなし、人の人たる、禽獸の禽
獸たる、造化鬼神の幽眇なる亦皆此の理ならざるはなし。而かも理は氣中の條理なり、氣を外にして理
なし。王子の謂はゆる理は即ち吾人が先きに述べたる神理なり、天機なり、理氣合一の理なり、是を王
子の「天即理」の觀念となす。此の觀念は即ちまた王子の宇宙觀にして、此の宇宙觀より茲に「人欲を去
り天理を存する教旨」を生み、やがては「致良知」の大宗旨を孕み出す根本思想なることを忘る可らず。
斯くて「天即理」の次に來る問題は「性即理」なり。

二、性 即 理

人性とは
何ぞや

諸家性説

伊川始て
性即理の
説あり

凡そ道義の學に於て、性の問題ほど緊要なるはなし。道義とは何ぞやてふ問題の前には、先づ人とは何ぞやの問題が提供せられざる可らず。人とは何ぞやてふ問題の前には、必先づ人性とは何ぞやの問題が説明せられざる可らず、人性の根本問題曖昧にして茲に人を説き道を説くは、的なきに矢を放つ如けんか。されば湯語に云ふ「惟皇上帝。降衷下民」經と、詩に云ふ「天生蒸民。有物有則。民之秉彝。好是懿德」詩經大雅燕民と、降衷と云ひ、秉彝と云ふ、是性善説の始原なり。孔子は「性相近」の言あれども、又た「民之生也直」と云へり、其の性善説たるや明かなり。中庸には「天命之謂性」と云ひ、樂記には「人生而靜天之性也、感於物而動性之欲也」とあり。孟子は性善説の巨擘にして、告子其他に對し論辨大に力め性善の旨始て大に明かなり。荀子は之に反して性惡を標榜す。漢の楊雄は「人之性也善惡混。脩其善則爲善人。脩其惡則爲惡人」揚子法言修身と云ひ、唐の韓愈は性に上中下の三品ありと云ひ、李翱に復性の説あり、是れ其概なり。然らば「性即理」の説如何。程明道曰く「生之謂性。性即氣。氣即性。生之謂也」二程全書一と、其の性を説く固より性善の範圍を出てざるも、未だ「性即理」の言なし。伊川曰く「性即理也。天下之理原其所自。未有不善」二程全書二と、是に於て「性即理」の目立つ。朱子曰く「性即理也」の一語、孔子より後惟だ伊川説き得て盡す、顛撲すれども破れず、性即ち是れ天理、那ぞ惡あるを得ん近思錄一、十九と。是に

程朱性を
説て其本
を二にす

性は一の
み

一性字萬
里燦然

性と心と
の關係

因て見れば性即理の説、伊川に出で朱子に成る。然れども兩家の性を説くや、性の外に氣の説あり、故に伊川曰く「氣有善、有不善。性則無不善也」宋元學案と、朱子曰く有天地之性。有氣質之性性理大全三と、是れ性を説て其本を二つにせり、其説に本づけば、天地の性は理にして善なり、氣質の性は善あり惡あり、理と謂ふ可らず。是に於て其の謂はゆる「性即理」と呼號せる性は氣を外にせる性にして、既に明道の「生之謂性」とて理氣を渾一せる旨と異なるのみならず、又た王子の旨と遠きものあり。王子曰く、性は一のみ。其形體より之を天と謂ひ、主宰より之を帝と謂ひ、流行より之を命と謂ひ、人に賦するより之を性と謂ひ、身に主たるより之を心と謂ふ。心の發するや、父に遇ふては便ち之を孝と謂ひ、君に遇ふては便ち之を忠と謂ふ。此より以往、名無窮に至て只一性のみ。猶人は一のみ、父に對しては之を子と謂ひ、子に對しては之を父と謂ふ。此より以往無窮に至て只一人のみなる如し。人は只性上に在りて功を用ひんことを要す。一性字を看得て分明なれば即ち萬理燦然たり傳上三。夫れ天と謂ひ、帝と謂ひ、命と謂ひ、心と謂ふ、一性字に外ならず。性に天地の性なく氣質の性なく、一性萬理を含む、一性字を擧げて萬理燦然たり。是れ「性即理」を見得て其要を提げ其粹を發するものに非ざるか。

天命の流行する、其の人に賦するより之を性と謂ふ。然らば性と心との關係如何。王子曰く「心の體は性なり、性は即ち理なり」全書八と、又曰く「性は心に具す」全書四と、是に由て見るに、性は心の體

性は心の生理

にして心に具するものなり。之を他の語を以て説明せば、性は猶心の生理鄭東 廊語と云ふが如けんか。性の字、心を偏へんとし生を傍つくりとす。心の生根生理、是れ性を説明する恰好の語なるなからんか。此の生根生理身に主宰し知覺するより之を心と謂ふなり。而かも此の生根生理は固より死理格套の謂に非ず。王子曰く「氣即是性。性即氣」傳下 三四と、性は即ち活潑々地たる生根生理たるを忘る可らず。而して此生根は善にして惡なし、故に曰く「人性は皆善なり、中和は是れ人々原とより有せる的」傳上 四八と。而して善と云ひ惡と云ふ、人心動いて後の稱呼なり、相對の名なり。性本と絶對至善なり、故に曰く「至善なるものは性なり、性は元と一毫の惡なし、故に至善と云ふ」傳上 五三と。

至善は性なり

諸家の性説に對する王子の見解

然らば王子は古來諸家の性説を如何か見たるぞ。そは門人が古人の性を論せるに各異同あり、何れを定論となさんやと問へるに答へて曰く。性に定體なし、論も亦定體なし。本體上より説くものあり、發用上より説くものあり、源頭上より説くものあり、流弊上より説くものあり、總て之を言ふに只是れこの性、只だ見る所淺深あるのみ、若し一邊を執定すれば便ち不是にしする。性の本體原と是れ善なく惡なき的、發用上もまた原と是れ善をなすべく以て不善をなすべき的云々。傳下 五三されば諸家の性を説くや王子より見れば皆一邊を説けるものにて、其の本體は原と無善無惡即ち絶對至善なるものとなすは王子の本旨なり。王子より以前王子より以後性を説て此に至れるものなし。斯學を

究むる者先づ此の根本思想を把握せざる可らず。斯くて「心即理」の本問題に入らん。

三、心即理

朱子に心即理の言なし

朱子に「心即理」の言なし、何となれば朱子は性と心とを析ちて二つに見、従つて心と理との間に劃然たる分界あればなり。張橫渠曰く「心統二性情」こと。其意に謂ふ、性は理にして情は氣なり、心は理の分子と氣の分子とを含有すと。朱子亦此を祖述し理と氣とを合して知覺する上につき心の名稱を立つ、故に性は即ち理なれども心は理と言はず、其言に曰ふ「理と氣と合せて便ち能く知覺す」性理大全 三二卷と。門人問ふ靈處は是れ心か抑々性かと。朱子曰く「靈處は只是れ心なり、是れ性にあらず、性は只是れ理」同上と。朱子の心と性とを見ること此の如きは、是れ「心即理」の言なき所以なり。其の此あるは陸象山に始まる。象山幼より天地の窮際する所を思ふて得ず、十三歳書を讀み、宇宙の二字を解して「四方上下曰レ宇。往古來今曰レ宙」とあるに至りて大に省悟して曰く、元來無窮なり、人と天地萬物と皆無窮の中に在りと。乃ち筆を援つて書して曰く、

象山と心即理

象山の達悟

宇宙内事。乃己分内事。己分内事。乃宇宙内事。」又曰。宇宙便是吾心。吾心即是宇宙。東海有_二聖人出_一焉。此心同也。此理同也。西海有_二聖人出_一焉。此心同也。此理同也。南海北海有_二聖人出_一焉。此心同也。此理同也。千百世之上。至_二千百世之下_一。有_二聖人出_一焉。此心此理亦莫_レ不同也。象山全集三 六卷年譜

象山年少達悟實に驚くべきものあり。宇宙は時間空間の上に現はれて而かも時間空間の拘束を超越す、故に之を無窮と云ふ。無窮は宇宙の體なり。人獸草木悉く無窮なる宇宙の顯現なり、故に人獸草木も亦無窮なり。宇宙と我と、我と宇宙と、此心同し、此理同し、古今東西聖人出づるも此心二ある可らず。此理二ある可らず。故に又曰く「心一理也。理一理也。至當歸一。精義無二。此心此理。實不容有二」同上と「心即理」は實に象山の心學の大根柢なり。

象山と王子の相異

王子の教義亦實に「心即理」の上に立つ。然らば象山已に之が眞諦を道破すると此の如し、王子何が故に象山に發悟せずして必龍場の一悟を待つや。他なし象山天分甚高し、其の發悟は天地の窮際を疑ふより來る。王子は致知格物以て聖人たらんと欲し、物理と我心と岐れて二となる上に困惑し、遂に天下の理我心に外ならず、格物は物に格るにあらで心中の物を格すなりと發悟し、茲に心は理なり性は理なり天は理なりと領悟し來れるなり、されば孟子の謂へる「盡其心者知其性一也。知其性一則知天焉」盡心上と謂へるは實に王子悟境の過程とも謂ふべけんか。象山の悟は宇宙觀より來り、王子のは人生倫理觀より來る。其の從つて入る所已に異なれり、故に進修の途涵養の方、王子に於て最精最密なる所以なり。王子が象山を表章しながら、嘗て門人に答へて、濂溪明道の後其人を求むるは象山の外なきも、只此の粗處ありと評せるは此間の消息を漏らせるものなり。且つ天既に理なれば性も亦理ならざる可らず、心も亦理ならざる可らず。是れ一貫直下すべき理勢なるべきも、王子の領悟は却て「心即理」の上に發し、

象山の粗處

之が當然の推理として「性即理」に溯り、「天即理」に溯り、因て茲に天理を存し人欲を去る教旨が打立てられたるなり。陸王の別其大旨此に存するを忘る可らず。

王子は心を如何に説けるか。

其の天に在るより之を命と謂ふ。其の人に賦するより之を性と謂ふ。其の身に主たるより之を心と謂ふ。心なり、性なり、命なり、一なり。全書七卷三九

心と性と二ある可らず、天より賦與せられたる生理生根より之を性と謂ふ、人身に主宰となり靈動知覺するより之を心と謂ふ、心は實に生理生根の靈動知覺なり。故に王子又曰く「心は是れ一塊の血肉にあらず、凡そ知覺する處便ち是れ心なり、耳目の視聽を知り、手足の痛癢を知るが如きは、此れ知覺にして便ち是れ心なり」傳下六九と。知覺を心と呼ぶは朱王皆同じきも、朱子の知覺は性の理と氣の運行とより來る。王子の知覺は獨り性の理より來る。故に朱子に在りては「心即理」と立言し能はざるも、王子に在りては爾かく道破し得べし。曰く、

心は即ち理なり、此心私欲の蔽なければ即ち是れ天理にして外面に一分を添ふるを須ひず、傳上四と是なり。而して心即ち天理なれば、一面天に合し一面道に合せざる可らず。故に曰く、

心は即ち道にして、道は即ち天なり。心を知れば則ち道を知り天を知る。傳上四斯くて王子が尤も心力を注いで開發に勉めたるは、心と理とを析つて二となす朱子の説に對してなり。

心道天一なり

知覺是心なり

心性命一なり

心外に義を求むるは告子義外の説

曰く、

心を外にして理を求むるは、是れ告子義外の説なり。理は心の條理なり、是の理や之を親に發すれば孝となり、之を君に發すれば忠となり、千變萬化するも吾の一心に發するに非ざるはなし。故に端莊

靜一持敬を謂ふて養心となし、學問思辨を謂ふて窮理となす者、心と理とを析つて二つとなせり。全書八卷一

朱子心と理とを析ち説く

朱子の性を説くや、性の外に氣を認め、宇宙の事相運行を呼ぶに氣を以てし、此氣には各々理を蔵すとなす「事々物々皆有理」とは是なり。故に我心を養ふには持敬即ち端莊靜一の存養方法を以てし、天下の事物を窮むるには格物窮理の知的研究を以てするは朱子學問の大端なり。之を王子より言へば我心と物理とを析ちて二つとなせり。告子が長を敬するは義なり、長は外に在りとして義外説を立てたるに似ずや。性は理なり、心は理なれば、天下萬物の理悉く吾心に完具せざる可らず。孟子の謂はゆる「萬物皆我に備はる。身に反して誠なれば樂これより大なるはなし」盡心上と云へるは是なり。是れ王子が尤も嗚々を費す所なり。

立言宗旨 「心即理」の旨義以上の如し、然れども王子立言の深旨は別に存する所あるを忘る可らず。門人が「心即理」を問へるに答へて曰く、

諸君我立言の宗旨を識得せんことを要す。世人心と理とを分て二となす、故に許多の病痛あり。五伯の夷狄を攘ひ周室を尊ぶが如き、都て是れ一箇の私心便ら理に當らず、今人却て彼れ做し得て理に當

心理を析つての弊

心上に工夫せよ

る、只心未だ純ならざるあるのみとなし、往々其爲す所を悦慕し、外面に做し得て好からんことを要す、其流は伯道の偽に至て自ら知らず。故に我れ「心即理」を説いて心と理と是れ一箇なるを知て、心上に工夫を做し、義外に襲ひ去ららしめんと要するのみ。便ち是れ王道の眞、此れ我が立言の宗旨なり。傳下六九

動機と結果

右を讀む者、王子が立言の深旨那邊に在るやを會得すべし。心と理とを分離する結果は、人をして知らず識らず外面に形式を趁うて覇道の偽に陥らしむ。恰も動機と結果との議論に於て、心上の動機を問はず事上の結果を以て善惡を定むると一般、功利主義に流れざらんと欲するも得ず、是れ王子の最も恐るゝ所なり。

動靜體用 心は理なり、之を靜と言はんか動と言はんか、王子曰く、

動靜は時なり

心は動靜を以て體用となす可らず。動靜は時なり、體に即て言へば用は體に在り、用に即て言へば體は用に在り、是を體用一源と云ふ。傳上六五

心に動靜なし

動靜は時なりの一語、王子が徹底せる意見を窺ふべし。譬へば水の如し、淳善して淵となり。奔激して湍となる、一靜一動是れ水の時なり。淵中に用存し、湍裏に體藏す、動靜を以て體用を分つ可らず。心も亦然り、動くや體存じ、靜まるや用藏す、動靜は時なり、分離すべし、體用は一源なり、否な一體なり、分離するを容さず。故に又た曰ふ「心は動靜なきものなり」と。

然れども王子次で又た曰く、

靜には以て其體を見るべく、動には以て其用を見るべしと説かば卻て妨げず傳上 六五

此語善く觀んことを要す。其意靜時用なきに非ざれども、以て其體を見るに宜しく、動時體なきに非ざれども、以て其用を見るに宜しと謂ふのみ。猶水の渟蓄するや體顯はれて用潜む、以て體を見るに宜し。其奔激するや用顯はれ體潜む、故に以て用を見るに宜しと云ふが如きなり。故に王子又曰く「動靜は一理なり、一理隱顯して動靜となる傳中 五一と。又曰く「動靜は端なく、陰陽は始なし、道を知る者默して之を識るすに在り、言語を以て窮む可らず」同上と。

王子は更に門人が深夜思慮を絶てる時の儒者の空々靜々と、釋氏の説ける靜と如何に分別せんかと問へるに答へて曰く、

動靜は一箇簡 儒釋毫釐の差處

動靜は只是れ一箇なり。三更の時空々靜々たるも只是天理を存するのみ、即ち是れ如今事に應し物に接する心なり。如今事に應し物に接する心も、亦是れ天理に循ふのみ、便ち是れ三更の時空々靜々の心なり。故に動靜は只是れ一箇分別し得ず。動靜合一を知得すれば、釋氏と毫釐の差處亦た自ら揜ふことなけん。傳下 一七

是に至ては動靜は時なりの見解は、更に動靜は、一箇なりの見地に進めるを理會すべし。動靜一箇の話頭に至つては、本體工夫の精處にして更に項を改めて研究する所あるべし。第八章 參照

第三章 天理を存し人欲を去る

一、總 説

王子四十三歳官に南京に就いての後は、専ら「存天理去人欲」てふ六字の教旨を掲げて學を論し人を導き、往くとして六字の教法に非ざるはなし。天理滅ぶれば人欲横流す、人の禽たり獸たるは全く此に在り。之を反すれば人道存す、實に人道は人欲を去り天理を存するより切なるはなし。

天理人欲の字面樂記禮記 篇名に見ゆ、曰く、「人生而靜。天之性也。感於物而動。性之欲也。物至知知。然後好惡形焉。好惡無節於内。知誘於外。不能反躬。天理滅矣。夫物之感人無窮。而人之好惡無節。則是物至而人化レ物也。人化レ物也者。滅天理而窮人欲者也」と。陸象山は樂記の旨老子に出

づるを疑へり、象山全集 集語錄されども天性と云ひ、性欲と云ひ、好惡と云ひ、反躬と云ふ、何れか儒家の教旨に非ざらんや、天理も亦天命天道天則と一例の語にして必しも怪むを須ひず、然れども之を慣用せるは

北宋諸儒に始まる。程明道曰く「吾學雖有所受。天理二字。却是自家體貼出來」程全書 二卷 三九卷と、明道が天理の上に體得せる觀念は、やがて明道の哲學を形成し、爾後天理の二字愈肝要の問題となれり。然らば天理とは何ぞ、曰く天理とは天の理なり、自然の天機恒久の神理第二章 天理即理參照にして、天命の軸となり、人道の根となり、爲すなくして爲し、言はずして生成する神化の本體なり。

天理とは何ぞ

程明道と天理

樂記疑ふを須ひず

樂記

六字の教法

天理とは何ぞ

天は理にして性も亦理なり、然らば天理の我に在るものは性に外ならず。中庸に「率性之謂道」とあれば天理の性に在るものは道に外ならず、古人之を道心と云へり。書經大禹謨に曰ふ、

大禹謨

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執其中。

大禹謨は偽古文として定論あれども、荀子には「道經曰」として「人心之危道心之微」解蔽篇と引けるより見れば此語の舊るきを知るべし、宋明諸儒の心學を説くや、此數句は緊要の教語となれり。程子曰く、人

人心道心の解

心は即ち人欲、道心は即天理と。王子曰く心は一なり、未だ人を雜へざる之を道心と謂ふ、雜ふるに人偽を以てする之を人心と謂ふ傳上、以て兩家の所見を窺ふべし。斯くて純一自然人偽を雜へざるを道心と云ふ。即天理なり。好惡作爲計較變詐愈出で愈窮りなきを人心と云ふ、即人欲なり。人欲横流して躬に反し初に復る能はざれば天理滅ぶ、故に修道の要は人欲を去て天理を存するより要なるはなし。王子謂ふ、講學の本旨は人欲を去つて天理を存するに外ならず。

學是學下去人欲存天理傳上

又謂ふ、聖人の六經を刪述する本旨亦此に外ならず。

聖人述六經。只是要正人心。只是要存天理去人欲傳上

又謂ふ、聖人となるの工夫全く此に在り。

必欲下此心純乎天理而無一毫人欲之私。此作聖之功也。傳中

作聖工夫

存天理の三字は去人欲の三字と連用せらる、他なし人欲を去るは天理を存する所以なればなり。蓋し生知の聖人に非ざるよりは、人欲の雜りありて天理の發現を阻礙するなき能はず、故に用功の著手は人欲を去るに在り。故に曰く、

吾輩用功。只求日減。不求日增。減得一分人欲。便是復得一分天理。傳上

人欲を減すれば天理復す
積極手段

或は謂はん、減するものは消極なり、増すものは積極なり、減せんよりは増さんに若かずと。知らずや天理の本體完々全々我に具存し一分の増すを用ひず、之が障礙を去れば天理日に流行す、健康を圖る者病根を去り水を治むる者壅塞を通ず。是れ消極の如くにして其實積極の手段たるを知らざる可らず。

二、心外事なく物なし

天理は我心の體なり、人欲は我心の蔽なり、之を存し之を去る皆我心上に於てすべし。心即ち理なれば萬理我心に燦然たり、此心を外にして事もなく物もなし、孟子の謂はゆる「萬物備于我」とは是なり。是に於て「心外無事無物」の教言屢王子に因て繰返さる。さればとて天地萬物皆我心の所造幻影と謂ふには非ず、天地萬物は我心を俟つて始て存在す、心を外にして天地萬物を求む、天地萬物何の意義かある、宜しく之を我心に求むべしと云ふなり。換言せば天地萬物は我心感應上の物に外ならずと云ふなり、是れ「心即理」より當然到達すべき思想教義なり。然れども向外の形式的研究が人心を錮するの弊

天地萬物は我心感應上の物

深く且つ久し、故に幾多の高弟よりして皆此に疑なき能はず、王子の苦心察すべし。心外無物の旨、王門の顔回と稱せらるゝ高弟にして、且つ王子の妹婿なる徐愛と王子との問答略ぼ之を盡せり。

徐愛問ふ

至善只これを心に求めは、恐らくば天下の事理に於て盡す能はざる所あらん。

王子答ふ

心は即ち理なり、天下又心外の事心外の理あらんや。

徐愛曰ふ

父に事ふる孝、君に事ふる忠、友に交はる信、民を治むる仁の如き、其間許多の理のあるあり、恐らくば亦た察せざる可らず。

王子嘆じて曰ふ

此説の蔽久し、豈一語の能く悟す所ならんや。今姑く問へる所に就いて之を言はんに、父に事ふる如きは、父の上に就て孝の理を求むるにあらず、君に事ふるは、君の上に就て忠の理を求むるにあらず、友に交はり民を治むるは友の上民の上に就て信と仁との理を求むるに非ず、都て只此心に在り。心は即ち理なり、此心に私欲の蔽なければ即ち是れ天理にして、外面より一分を添ふるを須ひず。此の天

理に純なる心を以て、之を發して父に事ふれば便ら是れ孝、之を發して君に事ふれば便ら是れ忠、之を發して友に交はり民を治むれば便ち是れ信と仁となり。只此心の人欲を去り天理を存する上に就て功を用ひば便ち是なり。

徐愛曰ふ

先生の此の如き説を聞いて、愛己に省悟の處あるを覺ふ。但だ舊説胸中に纏ふて尙脱然たらざる所あり。父に事ふる一事の如き、其間に温清定省の類許多の節目あり、知らず亦た講求すべきや否や。

王子答ふ

如何ぞ講求せざらん、只是れ頭腦あり、只此心人欲を去つて天理を存する上に就て講求するのみ。冬の温を講求する如きもまた只此心の孝を盡して一毫人欲の間雜するあらんことを恐るゝのみ。夏の清を講求する如きも、また只此心の孝を盡して一毫人欲の間雜するあらんことを恐るゝのみ。只是れ此心を講求す、此心若し人欲なく純ちっはら是れ天理ならば、親に孝するの誠心は冬時には自然に父母の寒からんことを思量して自ら之を温むる道理を求め、夏時には自然に父母の熱あつからんことを思量して之を清すずめる道理を求むべし、此れ都て誠孝の心より發出し來る條件なり。先づ此の誠孝の心ありて然る後此等の條件發出し來る。之を樹木に譬へんに、誠孝の心は根にして許多の條件は枝葉なり、先づ根ありて然る後枝葉あるべし、先づ枝葉を尋ねて然る後根を種うるにあらず。禮記に孝子の深愛ある者

頭腦

根ありて
然後枝葉
あり

は必和氣あり、和氣ある者は必愉色あり、愉色ある者は必婉容ありと言へり、是れ深愛が根となるありて自然に此の如くなるのみ傳上三

儀節と扮
戲子

王子又た鄭朝朔に答へて曰く「溫清の節、奉養の宜きは、一日二日之を講じて盡すべし。何の學問思辨を用ひんぞ中若し只儀節の上には是當を求めて之を至善と謂はば今の扮戲子伴の如きは許多の溫清奉養の儀節を扮して是當せり、亦た之を至善と謂ふ可し傳上六。徐愛此の説話に接して大に省發する所ありたり。

王子の聖
人論

聖人と精金 王子の聖人論は古來學者の未だ道破せざる所、但し立論爾かく斬新なるも、眞旨の存する所實に孔孟の教旨に外ならざるなり。蓋し學は立志に始まる、立志は聖人たるの志を立つるに在り、是に於いて人は皆聖人たるの資格あるなり。何を以て人は皆聖人たるの資格ありと云ふや、曰く、聖人は地位の謂に非ず、事功の謂に非ず、心外に事なく物なし人心皆箇々の聖人あり、唯人欲を去つて天理を存し人々具有の聖人を完うする處、其處に何人も聖人となり得べし。故に曰く、

人は天理
に純にし
て方に
是

聖人の聖たる所以は、只是れ其心天理に純にして人欲の雜りなきに在り、猶精金の精たる所以は、其成色足つて銅鉛の雜りなきを以てなる如し。人は天理に純なるに至て方に是れ聖、金は成色足るに至て方に是れ精なり。傳上五七

然らば古來諸聖の體段必して一樣ならざるは何如、曰く、

聖人と分
量

聖人の才力亦大小不同あり、金の分量に輕重ある如し。堯舜は萬鎰、文王孔子は九千鎰、禹湯武王は七八千鎰、伯夷伊尹は四五千鎰の如し、才力同しからざるも天理に純なるは同し。蓋し精金たる所以は成色に在つて分兩に非ず、聖たる所以は天理に純なるに在つて才力に在らず。同上

右の如くなれば何人も聖人たるを得べし、故に曰く、凡人と雖、肯て學を爲して此心をして天理に純ならしめば亦聖人となるへし、猶一兩の金、之を萬鎰に比すれば分兩懸絶するも、成色の處に到ては愧づるなきが如し。人は皆以て堯舜たるべしと曰ふは此を以てなり。同上

純を求め
ず分量を
希ふ

然るに學者は心外に聖人を求め、知識才能の上に聖人を尋ね、精金の純を求めずして分量を増大せんとす、是れ王子の最も嘆慨する所なり。故に曰く、後世作聖の本は天理に純なるに在るを知らず、却て専ら知識才能の上に聖人を求め、聖人許多の智識才能を逐一理會して始て得へしとなし、徒に精を弊ひやし力を竭し、冊子上に従ふて鑽研し、名物上に考索し形迹上に比擬す。智識愈廣くして人欲愈滋く、才力愈多くして天理愈蔽ふ、正に人の萬鎰の精金あるを見て私の鍛鍊成色が彼の精純に愧つるなきを求むるを務めず、妄に分兩を希ひ錫鉛銅鐵雜然として投し、分兩愈増すも成色愈下り、其梢末復た金ある無きが如し。同上五八

智識愈廣
くして人
欲愈滋し
才能愈多
くして天
理愈蔽ふ

右は王子の聖人論にして、王子一生人を率ゐ自ら勵む所以實に此に在り。宏大の旨、的確の論、學者自

智識中毒

反自警せば必や自ら躍然たるものあらん「知識愈廣而人欲愈滋。才力愈多而天理愈蔽」の數語、沈痛骨に入る。智識中毒の弊何れの世か無からざらん、噫。

三、致知格物

身心意知物一件
物は心上の正

心外己に事なければ、天理を存するの功夫は其れ唯だ吾知を致し物を格さんののみ。大學に曰く「古之欲明_レ明德於天下_一者先治_二其國_一。欲治_二其國_一者先齊_二其家_一。欲齊_二其家_一者先脩_二其身_一。欲脩_二其身_一者先正_二其心_一。欲正_二其心_一者先誠_二其意_一。欲誠_二其意_一者先致_二其知_一。致知在_レ格物」と、大學の八條目とは是なり。右は治國平天下より順次遞下して致知格物に歸入せり、致知格物の重きこと知るべし。而て古來の解説殆ど其要を得ず、王子龍塲以前の煩悶は實に此の致知格物の上に迷へり、従つて龍塲の大悟も亦致知格物の上に悟れり。然らば格物の義何如、王子曰く「身の主幸は便ち是れ心、心の發する所は便ち是れ意、意の本體は便ち是れ知、意の在る所は便ち是れ物」_{傳上}と。是れ王子に在りては身と心と意と知と物との五者は別箇の物に非ずして一件なり。是に於て格物の物は心上の物となり、格物の格は心上に正すの義となる。故に曰く、

意が親に事ふるに在らば、親に事ふるは便ち是れ一物なり。意が君に事ふるに在らば、君に事ふるは便ち是れ一物なり。意が民を仁し物を愛するに在らば、民を仁し物を愛するは便ち是れ一物なり、意

が視聽言動に在らば、視聽言動は便ち是れ一物なり。故に某は心外の理なく心外の物なしと説く、_{傳上}

又曰く

格物の正解

物を格すは、孟子が大人は君の心を格すと謂へる格すの如し、其心の不正を去つて以つて其本體の正を全うするなり。但だ意念の在る所につき、其不正を去つて其正を全うせんことを要す、然らば時として處として天理を存せざることなけん_上

又曰く

知は是れ心の本體。_中然れども常人に在つては私意の障礙なきこと能はず、故に致知格物の功を用ひて私に勝ち理に復るへし。_{傳上}

死的活

致知格物の義、古來の諸家異説の多きこと幾十に及び、果して、孰か正解なるを知り易からず、而かも實心體驗の上より得來れる王子の旨は、到底動かすべくもあらず。中庸に云ふ「不_レ誠無_レ物」と、物は誠の上に存立す。孟子曰く「萬物皆備_二於我_一矣。反_レ身誠。樂莫_レ大_レ焉」_禮と、誠あらは萬物我に在り、皆是れ王子の心外に物なきの旨なり。施邦曜曰く「人の、物の字を見るや是れ死的なり、先生の、物の字を見るや是れ活のなり」と旨い哉言や。

四、朱子の即物窮理

朱子の致知格物を説くや、格を至ると訓み、物を身外の物とし、知は猶識の如しと解し、物に即いて知を致し理を推し窮むるとなす。其説に曰く、

我に知あり物に理あり

謂はゆる知を致すは物に格るに在りとは、言ふこゝろは、吾の知を致さんと欲せば物に即いて其理を窮むるに在り。蓋し人心の靈は知あらざるなく、天下の物は理あらざるなし、惟だ理に於て末だ窮めざる所あり、故に其知盡さざる所あり。是を以て大學の始教は必學者をしてあらゆる天下の物に即いて、其の己に知れるの理に因つて益々之を窮めて其極に至らんことを求めざるなからしむ。力を用ふの久しうして一旦豁然として貫通するに至らば、衆物の表裏精粗知らざる所なくして、吾心の全體大用明ならざる所なけん。此を物に格ると謂ふ、此を知の至ると謂ふ。大學朱子補傳

煩瑣要乏

嗚呼天下衆物の多き、萬變の窮らざる、一々其理を窮めんと要するは、あまりに煩瑣にして其要乏しからずや。斯の如くせざれば知や盡さざる所あり、知盡さざる所あらば豁然貫通の境得て望む可らずとせば、誰か望洋の嘆なからんや。是れ王子が困迷の時代を通じて一出一入幾たびか迷溺を重ねし所以なり。龍場の苦悶幸に致知格物の上に徹悟する所あり、水到つて渠成り沛然亦疑ふ所なかりしは斯道の幸なり。其の即物窮理の非を述ぶるは後年顧東橋に答ふる書に於て最之を悉せり。曰く、

朱子心と理とを析つ

朱子の謂はゆる格物は、物に即いて其理を窮むるに在り。物に即いて理を窮むるは、是れ事々物々の上に就いて其の謂はゆる定理を求るなり。是れ吾心を以て理を事々物々の中に求め、心と理とを析ち

告子義外

心理合一

て二となせり。夫れ孝の理を親に求む、孝の理果して吾の心に在るか、抑果して親の身に在るか、假りに親の身に在りとせば、親没する後吾心遂に孝の理なきか。孺子の井に入るを見て必惻隱の理あり是れ惻隱の理果して孺子の身に在るか、抑吾心の良知に在るか。其の之を救ふに、井中に従はんか、或は手を以て之を援かんか、是れ皆理なり。是れ果して孺子の身に在るか、抑果して吾心の良知に出るか。是を以て之を例するに、萬事萬物の理皆然らざるはなし、是れ心と理とを析ちて二となすの非を知るへし。夫れ心と理とを析ちて二となすは、告子義外の説、告子曰く「仁内也義外也」と孟子に出つなり、鄙人の謂はゆる致知格物は、吾心の良知を事々物々に致すなり、則ち事々物々皆其理を得るなり。良知を致すものは致知なり、事々物々皆其理を得るは格物なり、是れ心と理とを合せて一となすものなり。傳中一〇

朱子の格物は物に即いて理を窮むるなり、王子の格物は心の知を致して心上の物を格すなり。朱子のは、吾心もて彼の理を窮む、是に於て心と理とは析れて二つとなる。王子のは、心固より吾に在り、理も亦吾に在り、心は即ち理なり、是を以て心と理と合して一となるなり。斯くて心理合一の旨此に喩るべく「存天理去人欲」の教義始て十分の意義を具へて、完全に樹立し發揮し得らるべきなり。

五、頭 腦

百體四肢は頭腦を俟つて活く、頭腦なき百體四肢は泥塑のみ、木人のみ。學問亦然り、三千の威儀萬

六字頭腦
學者頭腦
を缺く

心の明な
らざるを
患へよ

變の事爲、一處に統括する所なかる可らず、他なし「存_二天理_一去_二人欲_一」の六字是れ學問の頭腦なり、此
 心人欲の蔽なくは即ち天理に純なり、天理に純なる極は聖境なり。從來學者外に向ふて講究し、心體と
 關せず、又た心體を知らず、是れ頭腦を缺く所以なり。故に王子の龍場より還るや、學者にして自己の
 心體を廓清せば眞性始て見はれんと説き、之をして靜坐收斂眞性を徹見せしむ。既にして學徒漸く空虛
 に流れ若くは新奇に赴くの弊に勝へず、是に於て「存_二天理_一去_二人欲_一」ふて六字の宗旨を立て、頭腦を標
 示せり。徐愛に答へて曰く「如何ぞ講究せざらん。只是れ頭腦あり、人欲を去り、天理を存する上に就
 て講究す」^{傳上}と是なり。又曰く「聖人の心は明鏡の如し、只是れ明ならば感するに隨うて應し、物とし
 て照さざるはなけん、事變を講求するも亦是れ照らす時の事なり。學者は惟だ心の明かならざるを思へ
 よ、事變の盡す能はざるを思へざれ」^{傳上}と。人欲を去り心鏡の明を全うするは即ち頭腦なり。此頭腦已
 に立たば照上百端の事爲は自ら其中に存す、照上の事を廢するに非ず。故に又た曰く、
 學は是れ人欲を去り天理を存するを學ぶ。人欲を去り天理を存するに従事すれば、則ち自ら之を先覺
 に正し、之を古訓に考へて、自ら許多の間辨思索存省克治の工夫を下さん、然れども此心の人欲を去
 り吾心の天理を存せんと欲するに過ぎず。^{傳上}
^{六六}
 學問は六字の頭腦に歸着す、六字の頭腦已に立たば、講求思索は自ら其處に生ぜざる能はず、講究を斥く
 るに非ず、講究をして頭腦の上に根在せしめんとなり。若し頭腦なけんか、講究思索は悉く是れ猿猴の人

自己の性
情を理會
せよ

を摸し俳優の他を扮すると一般ならん。故に門下言ふ「一草一木皆理あり察せざる可らず」と、王子曰
 「我は則ち暇あらず公且つ自己の性情を理會し去れ」^{傳下}と、痛切骨を刺すの感なからずや。

六、人 欲

人欲とは
何ぞ

私欲客氣
は性の蔽

人欲去れば天理存す、六字の宗旨は本と「去人欲」の三字に歸入す。然らば人欲とは何如。王子曰く、
 性は一のみ。仁義禮知は性の性^{一本、性を}なり、聰明睿知は性の質なり、喜怒哀樂は性の情なり、私欲
 客氣は性の蔽なり質に清濁あり、故に情に過不及あり、而て蔽に淺深あり。私欲客氣は一病にして両
 痛なり、二物に非ず。^{傳中}
^{六〇}

右に謂はゆる私欲客氣は即ち人欲の謂なり、我性體を蔽ふものなり。蓋し人の生る、や、仁義の性體は
 萬人一樣なれども、形軀に具在せる氣質に至ては、人々に因り清濁昏明の等差なきこと能はず。是に於
 て吾人七情^{禮記、禮運に云ふ「何謂}の動くや氣質の清濁昏明に従ひ、心は蔽はれ、氣は動き、目は非禮を視
 んど要し、耳は非禮を聽かんと欲するに至る、之を人欲と謂ふ。更に細分すれば、客氣とは性體に根せ
 ず仁義の鍛鍊を経ざる七情の發動なり。私欲とは客氣が或る欲求に動けるものなり、兩者は一の病にし
 て両痛の名たり。又た欲求は必事物に對して起る、因て物欲と謂ふ。物欲は性體を蔽ふ、故に之を物蔽
 とも謂ふ。其名無數にして其病根一なり。又た之を總稱して習氣とも謂ふ。習氣とは人の生あつてより

客氣
私欲
物欲
物蔽
氣習

以來情動き物誘ひ染汚積習せる習心なり、王子曰く「惡念とは習なり。善念とは本性なり」全書二六卷と。與克彰太叔。又た曰く「理に循へば便ち是れ善、氣に動けば便ち是れ惡」傳上六一と、人欲と云ひ惡と云ふ皆客氣に動くものなり。

人の心體本と自ら好惡す。大學に云ふ「所謂誠_二其意_一者母_二自欺_一也。如_レ惡_二惡臭_一。如_レ好_二好色_一。此之謂_二自謙_一」と。然れども其處に一分の意思を著くれば、好色必しも好まず、惡臭必しも惡まず、偏倚拘滯の病此に生ず。故に心體上には一分の意思を著く可らず。王子の謂はゆる「好惡一に理に循ふて又た一分の意思を著けざれ」傳上六一とは是なり。孟子曰ふ「理義之悅_二人心_一猶_二芻豢之於_レ口_一」と。然り中正至善誰か崇嚮せざらん、忠孝節義誰か嘆賞せざらん。然れども人欲事を執れば邪惡に浸潤して自ら知らず。王子曰く、

人心本と自ら理義を悦ぶこと、目の本と色を悦び、耳の本と聲を悦ぶが如し。惟だ人欲の爲めに蔽はれ累はされ始て悦ばざるあり。人欲日に去れば理氣日に洽浹す、安んぞ悦ばざることを得んや。傳下六七天理を存せんと欲せば、人欲を去らざる可らざること此の如し。

七、省察克治

聖人に非ざるよりは、人欲の潜伏せざるはなし。吾人一塊の血肉は、是れ人欲の宿舍なり。然らば天

一塊の血肉に人欲の宿舍

人心本と自ら理義を悦ぶ

靜時の掃蕩

猫の鼠を捕ふる如くなる

逐一搜尋の家法

理を存する手段としては、斯に人欲を掃蕩し宿舍を清淨にせざる可らず。其功夫を省察克治と云ふ。省察とは草を分け毛を分け一物も見遁さじと詮議搜索するなり。克治とは曲せ物を見出したる上は克ち終ふし伐り盡して根も葉も留めぬ様にする事なり。王子曰く「山中の賊を平くるは易く、心中の賊を平くるは難し」と、省察克治の手段を實にして、始て心賊掃蕩の功を奏し得べし。吾人目今寧靜なり、人欲の尋ねべきなしと謂ふ勿れ、猾賊暫く其形を潜むるに及んで之を掃蕩せざる可らず、王子曰く、事なき時、色を好み貨を好む等の私を逐一搜尋し來り、病根を抜き去つて永く復た起らざらしめて始て快となす。常に、猫の鼠を捕ふが如く、眼を一にして看著し、耳を一にして聽著し、一念の萌動あらば即ち之に克ち去り、釘を斬り鐵を截ち、姑くも彼の方便を容與す可らず、窩藏す可らず、彼の逃路を放過す可らず、斯くて眞實に功を用ふと謂ふべく、斯くて方に能く掃除廓清し得べし。傳上三四色と云ひ、貨と云ひ、名と云ふ、心賊の魁なり。吾人は逐一搜尋して克治の必勝を期すべし。逐一搜尋は王子人を導くの家法たるを忘る可らず。若し克治すべき賊を認めずと謂ふ者あらんか、是れ著實に功夫を用ひざる者なり、王子曰く「私欲の日に生ずるは地上の塵の如し、一日掃はざれば便ち又た一層あり」傳上四三。或は又た曰ふ、吾人は克治の前先づ天理人欲を研究するの要あらんと、王子答へて曰く、人若し眞實に功を用ひて已ますば、天理の精微一日は一日より見え、私欲の細微も亦一日は一日より見得ん。若し克己の工夫を用ひずんば、終日只是れ説話するのみ。人の路を走ると一般、一段を走り

一段を走り得て一段を認む

得て方に一段を認め得ん、走つて岐路の處に到り、疑あらば便ち問ふ、問ひ了つて又走りて、方に漸く到らんと欲する處に到り得ん。傳上 四三

何等適切の話頭ぞや。袖手安坐以て長亭短亭の驛路を諳んせんと欲せば、終身知らずして了らんのみ。王子又た次で曰く、

問講無用

今人己に知るの天理に於て肯て存せず、己に知るの人欲に於て肯て去らず、只管に盡く知る能はざるを愁へて只管に問講す何の益かあらん。且らく自己に克ち得て私の克つべきものなきを待ちて方に盡く知る能はざるを愁ふるも未だ遅からず。同上

嗚呼王子の學此に至つて眞學なり、活法なり。吾人は終日間話し、終年間講し、以て一生を徒了す亦愧死す可らずや。第六章致 眞知参照

第四章 知行合一

性即理との關係

知行合一の立教は王子の卅七歳に於ける龍場の發悟に本づき、「性即理」の教旨と密接の關係を有するものなり。當時王子は格物致知の上に苦心せる結果、始めて聖人の道は吾性自ら足る、向きに理を事物に求めしは誤れりと悟りたるが、是ぞ「性即理」の大教旨なり。而して性即ち理ならば、内外萬事心上に具

備せざるはなく、知と云ひ行と云ふも唯是れ一心一理の働きにして、其指す所に因て兩名を生ずるに外ならぬを知るべし、因て茲に知行合一の大立言となるなり。今之を本體的立言と宗旨的立言の兩面より考察せん。

一、本體的合一

合一と言へば元來二つのものを一つに合せたるが如きも、本義はさに非ず。知と行とは元來一つのものなり、それを従來の學者が二つに分説したれば、王子は其謬りを正し、元來合一にて一つぞと謂ひたるなり。夫れ心は理なる上は、知るとは此心働いて此心の理を知るに外ならず。行ふとは此心働いて此心の理を行ふに外ならず。王子が「心を外にして以て理を求む、此れ知行の二なる所以なり、理を吾心に求む、此れ聖門知行合一の教なり」傳中 七と云へるは是なり。知と行とは既に一心の作用なれば、之を分たんやうなし。譬へば物の表裏の如く、相離る可らず。又た一條の棒の何れを首とし何れを尾となす可らざるが如けんか。

知行は一心の作用

元來合一

真切篤實と明覺精察 知と行とは一心の作用なり、然らば王子如何に之を解説せるか。其言に曰ふ、

知の真切篤實の處は即ち是れ行なり、行の明覺精察の處は即ち是れ知なり。傳中 五

心は一つなり、此心が金を見て金と明覺し、銀を見て銀と精察する處、之を知と云ふ。此心が金を見て

知は行の
知は行の
知は行の

此の金の賈金に非ざるを眞切に思惟し、銀を見て此銀の純銀なるを篤實に考驗する處之行と云ふ。知は行の中の此は金なり銀なりと知る方面にして、行とは、知の中の此は何如に彼は何如にと思惟考査する方面なり。知は判断なり、行は考査なり、判断の一面には考査を伴ひ、考査の一面には判断を生む。明覺精察を離して眞切篤實を得んとする徒勞なり、眞切篤實を離して明覺精察を得んとするは妄想なり。知は行の知にして、行は知の行なればなり。

主意と工夫 前節は心體入微の處に就て知行の一體なることを示せるが、王子は更に心體發動の上に就て左の如く説明せり。

知は是れ行の
主意にして、
行は是れ知の
功夫なり。

知は是れ行の主意にして、行は是れ知の功夫なり。知は是れ行の始め、行は是れ知の成るなり。若し會得する時は只一個の知を説くも、己に自ら行の在るあり。只一個の行を説くも己に自ら知の在るあり。傳上

右は先づ主意と功夫とを以て知行を解説す。主意とは目當と云はん如し、功夫とは仕事と云はん如し。譬へは險を踏むに此處は危険なりと知る知は、用慎して歩む仕事の目當なり。又た用慎して歩むは、危険なりと知る知の上の仕事なる如し、次に始と成とを以て知行を解説せるも、亦此の道理なり。足を運ぶ時、此地は危険なりと知る、是を知は行の始と云ふ。而かも一步一步の間に危険と知れる知の觀念は連続して、全く歩み畢り茲に初めの危険なりと知れる知が成就して結末を告ぐ、之を行は知の成ると云

知は始に
非ず行は
終に非ず

ふ。知は始にして行は終に非ず、知は最後まで連続して始て成就し、行は知の知るまゝに行動して暫時も知を離れぬなり。之を一つの知を説けば己に行あり。一つの行を説けば己に知ありと曰ふなり。要するに一心の働があるのみにて、其働の或る方面を姑く知と名づけ、或る方面を姑く行と名けたるに外ならざるを會得すへし。

眞知 次に王子は百般行爲の上に進み、行はずんば眞知に非ずとの教言を繰返せり。曰く、

眞知は即ち行たる所以なり、行はずんば之を知と謂ふに足らず。傳中

行はずば
知と謂は
ず

例せば某は行を知り、某は弟を知ると稱するは、其人必ず孝を行ひ弟を行へるよりして斯く稱すべし。其人が孝弟的説話に巧なるより、爾か稱するに非ず。自己が痛み了て痛を知り、寒へ了て寒を知る、道途の險夷は、身親ら涉歴するを待つて之を知る。眞知には必ず行あり。行はずんば眞知と稱するに足らざるなり。

本體遮蔽
假知妄斷

さらば吾人は親に孝すべきを知り、君に忠すべきを知る、何が爲めに忠孝の實行が出で來らざるやと云はゞ、是れ私意の隔斷あるなり。「心即理」の本體遮蔽せられ、格物致知の發動萎靡し、忠すべくして忠ならず、孝すべくして孝ならざるなり。斯くてまた前に忠すべきを知り、孝すべきを知りたる知も、實行伴はざれば、假知妄想にして眞知に非ざることを知るへし。

人或は王子が用語の斬新に駭き、時弊を救ふ爲め發せる方便の教言となすものなきに非ざれども、王

本來是の如し
子が顧東橋に答へて「此れ喫緊に弊を救ふて發すと雖、然かも知行の體本來是の如し、己が意を以て其間に抑揚し、姑くこの説を爲して以て一時の效を苟もするものに非す」傳中と謂へるを見れば、知行は本體的に合一なることを領會すべし。

二、宗旨的立言

倫理的實踐的
知行は本體上合一にして分離す可らざるは、前項述ぶる所の如し。而かも王子立言の深旨は別に在り、それは純理的よりは倫理的なり、實踐的なり、王子は常に之を立言の宗旨と曰へり。其の或者に答ふるや曰く、

立言の宗旨
一念發動の處即是行ひ了る
此れ須らく我立言の宗旨を識るべし。今人の學問、知行を分て兩件となすに因て、故に一念の發動不善ありと雖、未だ行はざれば便ち禁止し去らんとせず。我今知行合一を説くは正に人をして一念發動の處は便ち是れ行ひ了るを曉りて、發動の處不善あらば、この不善の念を克倒し了り、根に徹り底に徹り、一念の不善をして胸中に潜伏し在らしめざるを要す、是れ我立言の宗旨なり。傳下

世人終身行はず終身知らず
是れ王子滿腹の精神なり。此精神此宗旨を會得せずんば、本體上合一を説くも、王子に負く所多し。王子謂ふ「世人知行を分て兩件となし、先づ講習討論して知的の工夫を爲し、知り得ること眞なるを待ちて行ひ去らんと欲す、故に終身行はず、亦遂に終身知らず、此れ小病痛に非ず、其來ること己に一日に

對病與藥

非ず。某今知行合一を説く、正に是れ病に對する藥なり。今若し宗旨を知り得る時は、即ち兩箇と説くも亦妨げず、亦只是れ一箇なり。若し宗旨を會せずんば、便ち一箇と説くも亦何事をか濟し得ん、只是れ間説話のみ」傳上と。王子の沖々たる深慨紙面に躍るを見ん、

一念可懼 王子が知行合一を唱破せる立言の大主旨は、前項に見て其の倫理實踐上に在るを知る。倫理實踐上とは他なし、人をして一念の微を慎ましめんとなり。吾人若し一念動かんか、即ち既に行ひ了り、懼るべし慎むべし。法律は心上の動機を問はず、問はんと欲するも人心の微を察知するニラキマ千里眼も無きを如何せん。道德は之に反して心源を出發點とす、自己の心源は自己がニラキマ千里眼たることを得て、心上の動機を仔細に察知す。是に於て一念の上盜心動けば自己先づ之を知り、宣して云はん、汝は既に盗み了れりと。一念の上淫心動けば、自己先づ之を知り、宣して云はん、汝既に淫し了れりと、豈恐る可らずや。明の薛瑄せん號敬軒曰く、

一念之善。景星慶雲。一念之惡。疾風暴雨。

又曰く、

一念生慙。面上發赤。一念生悸。背上發粟。

一念の善も微と謂ふ勿れ、景星現はれ慶雲緩びく。一念の惡も微と謂ふ勿れ、疾風吹き暴雨灑ぐ、其機や神の如し。一念慙を生ずれば赤斯に發し、一念悸を生ずれば粟斯に生ず、其機や影響も營ならず。是

ニラキマ千里眼

心上の行
を心上に
格せ

を以て吾人は一念の動くや既に行ひ了れるを信得し、心上の行を心上に格さざる可らず、是れ知行合一の大精神にして、また立言の大宗旨なり。

三、知行並進

其本體より言へば合一なるも、功夫より言へば並進の字面切當ならに若かず。故に王子亦並進の語あり。而かも二つのもの相並びて進むにあらずして、元來内外表裏一體なるもの相並びて進むなり。

朱子の中
庸解

五者皆行

學問思辨行 中庸に云ふ、「博學之。審問之。慎思之。明辨之。篤行之」と。朱子は學問思辨の四者を知となし、最後の篤行のみを行となし、前者を格物窮理の知的研究に當て、學問思辨の知的研究を積み、然る後之を最後の實行に置くものとす。王子に在つては然らず、五者皆學を爲す所以にして行に外ならず。學んで疑へば問ふ。問は行なり。疑へば思ふ、思は行なり。疑へば辨す、辨は行なり。又從ふて其功を息めざるを篤行と云ふ、學問思辨を知的研究と見、篤行に至り獨之を行と稱すへきに非ず。王子は此旨を説いて更に「此れ區々心理合一の體、知行並進の功、後世の説に異なる所以のもの正に是在」^{傳中}と謂へり。他なし知らんと欲すれば行之に伴ふて起り、既に行へば益知らざる所を知つて行又た之に伴ふて起る、學問思辨の五者、何れを知とし先とし、何れを後とし行として相分たんや。本體より言へば合一なり、功夫より言へば並進なり、並進せざれば其知や假知にして、其行や冥行のみ。

四、知行合一は普遍的なり

何れの場合
にも眞理

知行合一の教旨は普遍的なり、何れの場合にも眞理なり。或は云ふ、是れ道德上に於ける教旨なり、道德修養以外には通す可らずと。其意は百般の研究必しも實行し得べからざるを言ふなり。然れども王子既に曰く「天下の學を盡して、行はずして以て學を言ふべきものあるなし」^{傳下}と。又曰く「天下皆行はずして學ぶ者あらんや、行はずして遂に之を窮理と謂ふべきものあらんや」^{同上}と。天下に心外の事理外の物あれば己む、苟も之なき以上は、悉く是れ行ふて學ぶ範圍に屬せざるものなし。朱子の説に本づけば、之を手足の行動に置いて始て行と謂ふなり。若し然らば學理研究の事、或は實行す可らざるものあらん。王子に在つては、行は獨手足の行動のみならず、心上の働きを含む、學問思辨の行たる所以は即ち是なり。然らば凡天下の事學問思辨の外に立つものなし。従つて行の外に立つものなし。天體の研究、星捫す可らず、天梯す可らず。絶域の地理、目接せず、耳聞かず、是れ遂に實行と離れ眞知を得る能はざるか。否、王子曰はずや「書を學へば、必紙を伸へ筆を執り、觚を操り、翰を染む。射を學べば、必弓を張り、矢を挟み、滿を引いて的中つ」^{傳下}と、夫れ學へば必ず其事あり、天を究めんと欲せば、天體窺はざる可らず。數理推さざる可らず。地理を究めんと欲せば、地圖を披くべく、實歴者に聽くべし。凡眞切思辨の功を積み、「心即理」の上より講究し去らば、足其境に至らず、目其物に觸れざるも、知行

龍溪の語

知行合一
は徹上徹
下

並進たるを妨げず、従つて亦真知を得べし、唯懸空口耳上に講説し、漫然臆度上に妄斷す、之を真知と曰ふ可らざるのみ。王龍溪曰く「知非見解之謂。行非履踏之謂。只從一念上取證全集明倫堂會語と、學者此旨に達せば、知行合一の旨、徹上徹下往くとして可ならざるなきを覺らん。然れども是れ本體上より爾か言ふなり。王子立言の宗旨よりすれば其本意の進徳修養上に在るは亦言ふを俟たざるなり。

五、古人の立言

偏を補ひ
勢を救ふ

古來聖賢の立言は、多く知行を分説せり。例せば「非知之艱、行之惟艱」書經の如き、「知及之。仁不能守之」論語衛靈公の如き、知と行と全然分離さる、言辭少からず。王子此に對して言ふ、此れ古人偏を補ひ弊を救ひ己むを得ずして分説せしなり。何となれば世間に全く思惟省察を缺いて冥行妄作する徒あり。此種の人には知を説いて之を導く要あり。又た懸空に思索揣摩して著實に躬行せざるものあり。此種の人には行を説て之を矯むる要あり。傳上八と。余を以て之を見れば、獨此のみならず、古人の教言は多く分析説明的に出づ、故に便宜上指す所に従ふて各其名稱を立つ。王子は綜合實行上より教を立つ、故に古人の分説せる所、悉く之を一路に歸せしむ。易文言の「敬以直内。義以方外」を合説しては「敬即是無事時義。義即是有事時敬。兩句合說一件」傳上七〇と云ひ。博文約禮の二に非ざるを説いて「博學而詳説之者。將以反說約也」傳中二五と云へるが如き是なり。更に例せば、火の熱と光とに於ける如し

古人の分
析と王子
の綜合

之を説明せんには光を措いて熱を説くも可なり。熱を措いて光を説くも可なり。而かも其の實體實驗に至りては、光中に熱あり、熱裏に光あり、両者は相離るべくもあらず。王子の教言此處に立つを忘る可らず。

程伊川 古人が知の難きに非ず行の難きなりと云へる如く、古來知と行とを分別せるに拘らず、其間に密接の關係を認め、真知行は必隨從して起るものなるを立説したるは程伊川なり。其説に云ふ、

伊川の知
行關係説
虎の喩

燭理明自然樂循理。性本善。循理而行是順理。事本亦不難。但爲人不_レ知旋安排著_レ便道_レ難也。知有_レ多少般數。然有_レ深淺。向親見_レ一人曾爲_レ虎所_レ傷。因言及_レ虎神色便變。傍有_レ數人。見_レ他説_レ虎。非_レ不知_レ虎之猛可_レ畏。然不_レ如_レ他説_レ有_レ畏怖之色。蓋真知_レ虎者也。學者深知亦如_レ此。且如_レ膾炙_レ。貴公子與_レ野人。莫_レ不_レ皆知_レ其美。然貴人聞着便有_レ欲_レ嗜_レ膾炙_レ之色。野人則不_レ然。學者須_レ是真知。纔知得是便泰然行將去也。二程全書十九卷九

膾炙の喩

程子が知行の關係に於ける見解は、従前の學者に比して大に親切を加ふ。然れども「理に循ふの事本と難からず、但だ知らざるが爲めに難し」と云ひ、「學者は眞に知るべし、纔に知り得れば泰然として行ひ去る」と云へる處、知先行後の思想に立ち、知あれば行之に伴ふ隨從的關係を認めたるを否む可らず。今之を王子より言へば、行なければ知なし、知行は合一にして隨從的に非ず。且つ虎と膾炙との喩頗妙なるも、吾人より之を言へば、虎の話を聽き神色變じて畏怖の色あるは、曾て虎に傷けられ眞に虎の畏

伊川の知
先行後

兩喻取つて反證となすし

るへきを實驗實得したればなり。貴公子が膾炙を嗜む色あるも、曾て膾炙を喫して其味を實驗實得したればなり。皆取て以て行先知後の理を反證すべきに非ずや。

程子亦曰く

知_レ至則當_レ至_レ之。知_レ終則當_レ遂終_レ之。須_レ以_レ知爲_レ本。知_レ之深則行_レ之必至。無_レ有_レ知_レ之而不_レ能_レ行者。知而不_レ能_レ行。只是知得淺。饑而不_レ食_レ鳥喙。人不_レ踏_レ水火。只是知。人爲_レ不善。只爲_レ不知。同上十六卷二十九

右は入關語録に出で、或は明道の語なりとも言傳ふれど、前項伊川の説と同じ見解に出づるものなり。伊川又曰く

君子以_レ識爲_レ本。行次_レ之。今有_レ人焉。力能行_レ之。而識不_レ足_レ以_レ知_レ之。則有_レ異端者出。彼將_レ流宕不_レ知_レ反。内不_レ知_レ好惡。外不_レ知_レ是非。雖_レ有_レ尾生之信曾參之孝。吾不_レ貴矣。同上二八卷六

伊川は断して知先行後説なり

是以て伊川の知先行後説を断すべし。要するに致知格物を以て物に窮め格ると解する伊川に在つては、窮格の知を第一要件とするは其所にして、格を正すと訓む王子が、格正の實行を第一要件とするは其探一なり。今兩家の所説を總括表掲すれば左の如し。

程子

王子

一、眞に知らざれば眞の行なし

一、眞に行はざれば眞の知なし

兩家所説の表掲

二、眞行は眞知の結果なり

二、眞知は眞行の結果なり

三、知は本にして行は之に次ぐ

三、知と行とは一體なり

朱晦庵 程子の「涵養須_レ用_レ敬。進學在_レ致知」の教法を繼承せる朱子に在つては、知行の見亦伊川の範圍を出でず。其言に曰く、

知行常相須。如_レ目無_レ足不_レ行。足無_レ目不_レ見。論_レ先後。知爲_レ先。論_レ輕重。行爲_レ重。性理大全四八卷二

知は先きなり
張南軒
黃勉齋

朱子既に知先行後の説を取る、其學流に屬する者皆然るは其所なり。張南軒名拭字敬夫曰く「致知力行互相發也。然知常在_レ先_レ同上四卷九と。黃勉齋名幹字直卿曰く「始_レ之以_レ致知。則天下之理洞_レ然於吾心。而無_レ所_レ蔽。終_レ之以_レ力行。則天下之理渾_レ然於吾身。而無_レ所_レ虧_レ同上四卷二と、是以て類推すべし。蓋し致知と力行と一偏に落つる所なくば何れを先とし何れを後とするも必しも事に害せず。然るに朱子歿後、遂に窮理に本づく知的研究の一派と居敬に本づき存養を重んずる一派とを生し、前者は遂に後者を壓し、章句訓詁の習は一世を風靡して明の中葉に及び、其流弊言ふに勝へず、王子が急言竭論知行合一の教旨を表掲せるは亦實に己むを得ざるなり。

王子の深意

歐陽南野 王門の高弟歐陽南野一名崇の人_一に答へたる一書は、頗師門の教旨を盡せり、左に録す。

承_レ翰教。諭以_レ知行合一之説。此固今之君子向所_レ共疑而近乃釋然者也。敢述以請。夫聖人之學不_レ失_レ其本心_レ而已。心之良知之謂知。心之良能之謂行。良知良能一也。故行也者知之真切運用。而知也者

南野の知行合一説

行之明覺精察。本合一者也。知而不_レ真切運用。是謂臆度。非_レ本心之知。行而不_レ明覺精察。是謂冥罔。非_レ本心之行。故學以不_レ失其心者。必盡其知行合一之功。然後能得其知行合一之體。故事親而知行合一則得其本心之孝。事兄而知行合一則得其本心之友。讀書講論而知行合一則畜其本心之德。以至事物細微。無_レ往而不_レ知行合一。則無_レ往而不_レ盡其本心之條理曲折。此合一之學所_レ以異於後世之知而不_レ行。行而不_レ知。終入於臆度冥罔而不_レ得其本心者也。心之精微。言不_レ能宣。何時披晤傾_レ竭所懷。南野文選 答李古原

第五章 良知

新學大宗
旨
良知の發
嘆

良知の二字は斯學の大宗師なり。良知が王學か、王學が良知か、良知は實に斯學の始を成し終を成す所以なり。されば王子が良知を體驗信得するや、其歡喜尋常に非ず。曰く「良知二字。實千古聖々相傳一點滴骨血也」曰く「此二字。眞吾聖門正法眼藏」曰く「眞所謂大本達道。舍此更無_レ學問可_レ講矣」曰く「考_レ三王。建_レ天地。質_レ鬼神。俟_レ後聖。無_レ不_レ同者」と豈亦盛ならずや。そも斯の如くあらゆる贊辭を以て王子の贊嘆を博したる良知は如何。蓋し良知は本と體驗すべく、信得すべく、智見筆舌の能く説明し得る所に非ざれども、以下試みに序を逐ふて之を講究せん。

一、良知の拈提

語源

江西以前
良知を點
出せず

良知の語源は、大學の致知、孟子の良知に本づき、之が擧揚は、遠くは龍場の發悟に胚胎し、近く江西の艱辛に醸成せられ、遂に其の五十歳を以て始て掲げ出されたる教旨なり。其の陳九川に答へて「爾那一點良知。是爾自家底準則」と謂へる語が、王子四十九歳の庚辰に係れるは傳習録に明文あり。又た「龍場より以後此意を出でざりしも、只此の二字を點出せず、學者と言ふに多少の辭説を費せり」と謂へり。既に點出せずと謂ふ、然らば良知の點出を江西以前に係く可らず。然るに王子の四十七歳に没せし高弟徐愛記して曰く「又曰。王知是心之本體。心自然會_レ知。見_レ父自然知_レ孝。見_レ兄自然知_レ弟。見_レ孺子入_レ井自然知_レ惻隱。此便是良知。不_レ假_レ外求。中在_レ常人。不_レ能_レ無_レ私意障礙。所_レ以_レ須_レ用_レ致知格物之功。勝_レ私復_レ上_レ理。即心之良知無_レ障礙。得_レ以_レ充塞流行。便是致_レ其知_レ也。知致則意誠」傳上と。良知の字面早く已に此時に見ゆ、是れ如何に解し去らんか。蓋し本條は、知は心の本體なるを説て致知の説明に歸入するを主とし、未だ良知を以て學問の全體を總括する聖學的傳とは信するに至らざりしなり、されば「心之靈明是知」傳上五〇又は「知是理之靈處」傳上七一などの語類出するも、皆未だ良知と曰はざるに見て推知すべし。蓋し江西以前は一面に「存_レ天理。去_レ人欲」の六字宗旨を掲げ、一面に致知の工夫を説く、此間に於ける知は直に之を後の良知に混す可らず、江西以後は、六字宗旨の把柄なきに慄らず。茲に「致良知」

三字宗

の三字を掲げ、心理合一の工夫一段の親切を加へたり。此より後の良知は直に之を前の知に混す可らず。王子の江西に陳九川に答ふるや曰く、「爾却て心上に箇の天理を尋ぬるは、正に謂はゆる理障なり、此間訣竅あり、只是れ知を致す、爾の一點の良知は是爾が自家底の準則」傳下と、是徒に天理を尋ぬるの理障に懲り、茲に「致良知」の教を掲ぐるに至りたる逕路を知るべし。又た五十四歳顧東橋に答へて曰く「吾心の良知は即謂はゆる天理なり中是れ心と理とを合せて一となすものなり」傳中と。斯くて心理合一の上に「致良知」の大宗旨を建て、始て靈丹一粒鐵に點じて金と成す底の妙用を發揮せり。されば良知拈提の江西に始まれるは蓋し誣ふ可らざるなり。

王子が「存天理去人欲」の教法を掲ぐるや久し、然れども天理實に言ひ易からず、故に問者あれば自己に反求せしむるを主とし、嘗て天理の何たるを説示せず。着手の手段としては大學の致知格物を拈出し、知は心の本體なり、此知を致すを格物となすと教へ。天理と我心との連鎖を示すには「性即理。心即理」を標榜するに止る。而かも天理と云ひ、心即理と云ふ、茫として端的を得難き憾あり。簡易直截を理想とする王子に在ては、蓋し悶癢の苦に堪へず、此間豈一大把柄なからずやとは常に其胸中に往來せる思想なりしなり。嘗て語て曰く「近ごろ此意を發揮せんと欲するも、只一言發し出さんとして得ず、津々然として物を口に含んで能く之を度る能はざるが知きを覺ゆ」全書三三三と。思ふに喉元まで出で吞み得ず、吐き得ず、大か小か、硬か、軟か、悶々苦惱せるは、是れ當時に於ける王子の心地なり。既

鐵に點して金と成す

悶癢に堪へず

良知の二字を吐出す

無二の寶珠

二、良知の本體

にして宸濠忠泰の危難を経、大鎔鑪の熱火た鍛へ上げられ、果然吐き出したる一塊は良知の二字なり。因て謂ふ、此良知こそ眞に患難を忘れ生死を出づるに足る、大本達道此を外にして他にあらずと、是に於てか「致良知」三字の拈提とはなりたり。嗚呼前きに物あり喉頭に轉々せしもの、罔地嘔き來れば料らざりき無二の寶珠ならんとは。

良知とは何ぞや

孟子曰く

人之所不學而能者其良能也。所不慮而知者其良知也。孩提之童。無不不知愛其親。及長也。無不知敬其兄。親親仁也。敬長義也。無他達之天下也。上

良知の字面始めて孟子に見ゆ。而かも孟子の意は、嬰兒幼童が能く親を愛慕し兄を敬重するものは人生自然の良知良能にして仁義の根なり、之を天下萬衆の上に擴めざる可らずと謂ふ、即ち仁義の天性に根ざすを説かため良知良能を拈出したるものとす。王子の工夫は、初め大學の致知より入り、知の天性に根ざすを説かため孟子の此語を掲げ來れり。既にして我心の良知即ち萬事の準則にして大本達道之を捨て更に求むべきなきを信得するに至つては、良知の二字實に九鼎大呂より重きを致せり。然らば重ねて言ふ良知とは何ぞや。

九鼎大呂より重し

良知即天理 良知とは、我心の本體なる天理の自然に是を是とし非を非とする明覺底の處を稱するに外ならず。之を王子の左の語に見よ。

良知は只是れ一箇の天理の自然明覺發見の處傳中九二

天理の昭明靈覺は

心の本體は即天理なり、天理の昭明靈覺は謂はゆる良知なり全書五卷一六

天理の昭明靈覺の處、是を良知と云ふ。此知や善ならざるなく良ならざるなし、因て之を良知と云ふ。而かも其語にな泥み天理の中に昭明靈覺の箇處を探求す可らず、昭明靈覺の儘が天理にして又良知なり。故に王子又た直に

良知は即ち是れ天理全書六卷二三

の語を用ひて、再び轉折擬議するを許さず。此に至りて人の天理を問ふあらば、言下に良知の二字を以て答ふべく、良知を問ふあらば、直に天理の二字を以て答ふを得べし。

心の靈明即良知 天理は良知なり、而して心は理なり、然らば心も亦良知ならざる可らず。然れども心に聖心あり凡心あり、本心あり習心あり。是を以て心は即ち良知と謂はずして心の靈明即良知と云ふ。

心の虛靈明覺は良知

心の虛靈明覺は即ち謂はゆる本然の良知なり傳中一六

心の虛靈明覺を良知と云ふ。さらば常人には之なきか、否、良知は其實吾人が是を是とし非を非とする公心に外ならず。故に又た曰ふ、

良知は只是れ是非の心傳下四三

是を是とし非を非とする靈明の知能は是れ聖體なり。聖體我に備はる、故に又た曰ふ、

心の良知は聖

心の良知は聖と謂ふ全書八卷一五

良知固有 良知は是を是とし非を非とする本然の良能にして、人々固有する所、學修思索して之を得たるものに非ず。猶鏡の如し、其明體は本と鏡中に存す。磨拂を俟つて始めて存するものに非ず。故に曰ふ、

良知は學と慮とを待て存せず

良知は即ち是非の心にして、人々皆之あり、學ぶを待て有るに非ず、慮るを待て得るに非ず。人孰か是の良知なからんや、聖人より愚人に至り、一人の心より四海の廣きに達し、千古の前より萬代の後に至るまで同じからざるをなし。全書八卷一四

良知は聖凡賢愚の別なく、古今東西の異なく、皆一様に固有享受せるものにて、經驗を加へ修爲を俟ち後天的人爲的に始て附け加へられたるものに非ず。故に又た曰ふ、

良知は天植靈根

良知は學ばず慮らず、天植靈根にして、聖凡を問つるなく、人の同く具する所なり。

天植靈根なる哉。天之を植へ、自然之を培ひ、如何なる災厄に逢着するも泰然微動せざる先天的一大靈根なり。

動靜一貫 己に良知と云ふ、天然易良の眞知なり。而かも吾人は往々良字を忘れ、知字にな泥み、之を言語

聞見の知識に求めて擬議摸索す、是れ皆良知を求むる所以に非ず。良知は聞見の知と異なり。若し良知が聞見を待て存せんか、何を以て天植の靈根と謂はんや。故に曰ふ、
觀ざる聞かざるは是れ良知の本體傳下

良知と知識と其差千里

學者良知を云々す、多くは是れ聞見の知識に向ふて摸索擬度せざるなし。王龍溪曰く「良知之與知識。爭若毫釐。究實千里。同一知也。良知者不_レ由_二學慮_一而得。聞見之知資_二諸外_一也」龍溪語 錄卷一、良知の聞見知に混す可らざる事此の如し。又良知は動靜を以て其體を二にせず。故に曰ふ、

動靜なし

良知の本體は原と是れ動なく靜なき的、便ち是れ學問の頭腦。傳下

動靜は逢ふ所の時なり、動靜の時に應じ動靜する本體は動靜ある可らず、故に良知は動靜を一貫す。寂感無二も亦然り、寂と感とは時なり、良知は寂感を一貫す。故に曰く、

寂感なし

人の本體は常々是れ寂然不動的なり、常々是れ感して而て遂に通する能的なり。應せざる是れ先ならず己に應ずる是れ後ならず。傳下 七一

本體とは良知なり。良知は、一面より言へば千古感應流通嘗て休まず。更に一面より言へば萬古寂然嘗て動かす、是を動靜一貫と云ふ。

無體の體 以上良知の本體を研究せり。斯く研究し來れるも、若し良知を一の理體と見、方所定在あるものとなさば大に謬れり。良知は生々息まざる活物なり、吾人は何れの處に其本體を認め得んや。之を

體ありて體なし

體ありて體なく、體なくして體ありと謂ふも可なり。何をか體ありて體なしと云ふや。王子曰く「良知即易。其爲_レ道也屢遷。變動不_レ居。周_二流六虛_一。上下無_レ常。剛柔相易。不_レ可_レ爲_二典要_一。惟變所_レ適。此知如何捉摸得。見得透時。便是聖人」傳下 七七と、良知の方物し捉摸す可らざること此の如し、是れ體ありて體なきに非ざるか。何をか體なくして體ありと云ふ。王子曰く「心無_レ體。以_二天地萬物感應之是非_一爲_レ體」傳下 三八と、是れ體なくして體あるに非ざるか。蓋し良知は天理なり、天則なり、人の死生物の消長より山時ち川流れ禽飛び魚躍るに至るまで悉く是れ天則にして、天地萬物感應の是なり。飛ぶべくして飛ばず、躍るべくして躍らず是れ天則ありあるなり、感應の非なり。天地感應の上に活着せば、良知に體を認めん、是を體なくして體ありと云ふ。故に良知の本體は之を無體の上に認めざる可らず、無體の體に達するもの始めて良知の本體を語るべし。

體なくして體あり

三、良知の作用

良知は天植の靈根なり、本心の靈能なり、動靜一貫の本體なり。然らば其作用は如何。

知情意の調和 心理學者は精神の作用を知情意の三方面に區別す、此の區別は又之を良知の作用に適用すべし。良知の是非善惡を知るは知なり、良知の眞誠惻怛善を好み惡を惡むは情なり。良知の志を立て己に克ち善に就き惡を去るは意なり、三者は良知の感應にして作用なり。而かも三者の動くや偏倚を生

知情意は良知の感應

し易く、拘滯を醸し易し、吾人は日常人に接し事に應じ、廓然大公にして物來つて順應する境地を養ひ出さざる可らず、是に至れば知情意の調和成り、良知の作用始めて完しと謂ふべし。而かも吾人毎に之が調和を破り之が作用を傷ふものは精思を缺くに坐す。王子曰く「若し精思せず漫然事に隨ふて應じ去らば、良知をば便ち粗了す」傳下。然り漫然玉を磨かば玉理を粗了せん、漫然友に交らば、友道を粗了せん、物皆然り。之に反し、精思審擇の結果は本體自然の作用を生み、順應となり、調和となり、孝悌忠信となり、惻隱羞惡辭讓是非となり、往くとして宜しからざるなけん。

精思審擇

七情と五官 喜怒哀樂愛惡欲之を七情と云ふ。人に七情なきはなし、良知の作用亦七情の外に出づ可らず。唯吾人の情緒は形軀に動き感情に盲動し易し。若し然るに於ては、七情悉く客氣私欲の奴隸となり良知の仇となる。而かも此時に當り翻然自覺し、良知を認め得て明白なれば、客氣私欲は忽然影を潜め良知自然の作用直に此に代り、七情皆良知の作用とならん。王子曰く「七情其の自然の流行に順へば皆是れ良知の用、但だ著する所ある可らず、七情著する所あれば俱に良知の蔽を爲す」傳下。是なり。

七情は良知の用

耳目口鼻四肢之を五官と云ふ、五官は思慮する能はず、但た七情を載せて走る、故に七情盲動すれば五官亦盲動す。而かも良知は七情五官の主宰なり、此時に當り主宰一たび令を正せば、五官皆良知の卒伍となり、良知の竅穴となる、王子曰く「主宰一たび正しければ、竅を目に發し、自ら非禮の視なく、竅を耳に發し、自ら非禮の聽なく、竅を口と四肢とに發し、自ら非禮の言動なし」傳下。六四と是なり。されば

五官は良知の竅穴

七情と五官と良知の作用卒伍に非ざるはなし、然れども若し一旦良知の羈絆を脱せんか、七情と五官とは盲動となり冥行となり、良知も亦其蔽を受け、其作用を傷はん、畏れざる可らず。

大尺度

大規矩 良知は吾人が世に立ち萬事萬變に處する大規矩なり、大尺度なり。良知を斥けて萬事萬變に應せんとするは猶規矩を斥けて方圓を作り、尺度を斥けて長短を度らんとする如し、勞して功なきのみならず、謬戾百出して其弊に勝へざるべし。然るに古今東西斯學に慊らざるものは、良知を以て到底萬變を盡すに足らず、眞理は講習討論を待つて始めて發見し得べしと信せり。然り講習討論を以て全く無用となさば、良知大規矩の説過甚を免れざらんも、王子の旨は然らざるなり。夫れ講習討論は良知の用なり、良知の動く處其處に講習討論を生ず、眞切に良知を致さんと欲せば、講習すべきは講習し、討論すべきは討論せん、是れ良知自然の作用に外ならず。而かも俗學者は道理を此心の天理に求むることを閑却し、預め節目時變を講習討論して一定の則を求め之に依つて萬變に應せんとす、是れ本を遺れ末を逐ふものなり、大規矩を閑却して死規矩を墨守するものなり。顧東橋王子を難して謂ふ、良知良能は愚夫愚婦も與り知る可けれども、節目時變の詳毫釐千里の繆に至ては、必學ぶを待つて而て後に知ると、因て講學を主張す。王子之に答へて曰く、

大規矩と死規矩

講習討論は良知の用

此心之天理を精察す

良知良能。愚夫愚婦與_レ聖人_一同。但惟聖人能致_レ其良知。而愚夫愚婦不能_レ致。此聖愚之所_二由_一分_レ也。節目時變。聖人夫豈不知。但不_二專_一以_レ此爲_レ學。而其所謂學者。正惟致_レ其良知。以精_二察_一此心之天理。

而與_二後世之學_一不同耳。吾子未_レ暇_二良知之致_一而汲々焉顧是之憂。此正求_下其難_二於明白_一者_上以爲_レ學之弊也。夫良知之於_二節目時變_一。猶_二規矩尺度之於_二方圓長短_一也。節目時變之不可_レ預定。猶_二方圓長短之不可_レ勝窮_一也。故規矩誠立則不可_レ欺以_二方圓_一。而天下之方圓不可_レ勝用_一矣。尺度誠陳。則不可_レ欺以_二長短_一。而天下之長短不可_レ勝用_一矣。良知誠致。則不可_レ欺以_二節目時變_一。而天下之節目時變不可_レ勝應_一矣。毫釐千里之謬。不下於_二吾心良知一念之微_一而察_レ之。亦將_二何所用_二其學_一乎。是不_レ以_二規矩_一而欲_レ定_二天下之方圓_一。不_レ以_二尺度_一而欲_レ盡_二天下之長短_一。吾見_二其乖張謬戾日勞而無_レ成也_一。傳中顧東橋は更に舜が親に告げずして婦を娶り、武王が父を葬らずして師を興せる等の事項を引て、凡此等の事に至つては必先づ是非を討論して事を制する本となさずば吾心體蔽ひを受け、事に臨んで失あらんと難せり。王子答へて曰く、

舜と武と
一念、良
知に求め
しのみ

夫舜之不_レ告而娶。豈舜之前已有_二不_レ告而娶者_一。爲_二之準則_一。故舜得_下以考_二之何典_一問_中諸何人_上而爲_レ此邪。抑亦求_二諸其心一念之良知_一。權_二輕重之宜_一。不_レ得_レ己而爲_レ此邪。武之不_レ葬而興_レ師。豈武之前已有_二不_レ葬而興_レ師者_一。爲_二之準則_一。故武得_下以考_二之何典_一問_中諸何人_上而爲_レ此邪。抑亦求_二諸其心一念之良知_一。權_二輕重之宜_一。不_レ得_レ己而爲_レ此邪。使_下舜之心而非_レ誠_二於爲_レ無_レ後_一。武之心而非_レ誠_二於爲_レ救_レ民_一。則其不_レ告而娶。與_二不_レ葬而興_レ師_一。乃不孝不忠之大者。而後之人不_レ務_下致_二其良知_一以精_中察義理於此心感應酬酢之間_上。願_下欲_下懸空討_二論此等變_レ常之事_一。執_レ之以爲_二制_レ事之本_一。以求_中臨_レ事之無_レ失_一其亦遠矣。傳中

東橋善く
問ひ王子
善く答ふ

以上東橋善く問ひ、王子善く答ふ。此の如くして良知の大作用は根柢より解決せられ、一讀の下明白痛快躍然として心會默契するものあらん。王子又曰ふ「良知は只是れ是非の心、只是非は就ち萬變を盡し了る」傳下と。又曰ふ「是非之両字は是れ大規矩なり、巧處は則ち其人に存す」傳下と。然り宇宙萬變此大規矩もて盡さざるなく、應す可らざるなし。而かも之を大用せんか、小用せんか、將た此大規矩を毀却せんか、巧拙は其人に存するを奈何せん。

四、良知の權威

良知の體は精々明々欺く可からず。誣ゆ可からず。良知の用は常に照らし常に覺り、知らざるなく能くせざるなし。無限の權威を具有するものは實に此良知なり。然るに世の學者往々慄らす、或は經驗を云々し、或は進化を云々す。余を以て之を見れば、皆未だ良知の本旨に達せざるものなり。

一派の論者は云ふ、人は生れながらにして良知を具ふる者に非ず、不斷の教育に因り、家庭及社會の感化に依り、諸種の經驗を経て始めて此知能を具有するのみと。是れ一を知て未だ二を知らざるもの、言なり。知に經驗知あり良知あり、論者の謂はゆる知能は經驗の知なり、經驗の知は聞見を俟つて始めて生ず、而かも聞見知の良知に非ざることば王子數々之を辨せり。我謂はゆる知能は良知なり、夫れ宇宙に磅礴せる靈氣、人の方寸に凝結し吾人の靈明となるや、學ばず慮らず茲に是非の眞知を發し、父母

經驗説
一を知つ
て二を知
らす

精々明々
常照常覺

巧處は其
人に存す

良知は經
驗知の奥
に存在す

には愛を知り、兄長には敬を知る、是を良知と云ふ。孟子が「仁義禮智非由外鑠也。我固有之也」^{告子上}と説けるも此に外ならず。論者は社會各般の事百千當ならず、聖人の良知固より悉く之を知る能はず。孔子も太廟に入つて事毎に禮を問へるを見て良知を疑ふ。而かも此の經驗知の奥に精々明々常照常覺の眞良知存在するを認むる能はず、是を人間の權威を損ひ自家の寶珠を遺るゝと謂ふも豈不可とせんや。

進化説

猿猴は人
とならず
良知は進
化の奥に
活く

世に進化説あり、其説に云ふ。人は猿猴と其祖を同くせり。吾人は蒙昧の原人より漸次進化して今日に至り、今後も亦益進化して休まざるものなりと。是れ亦一を知つて未だ二を知らざるものなり。夫れ人は猿猴と其祖を同くするや否や吾之を知らず、然れども、猿猴が進化して人とならざるは確なり。是れ人には人的良知あるも、猿猴には之なければなり。吾人は進化を認めざるに非ず、而かも進化とは經驗知が良知の指圖の下に行動する變化に外ならず。良知は進化の奥に活ける靈機なり、本體なり、良知ありて進化あり、進化ありて良知あるに非ざるなり。

文明は良
知の發現

然らば文明の進歩人事の發展は如何に見んか。曰く、是れ良知が時處位に應じて發現するに外ならず。形式の上より人は之を進歩とも發展とも見ん、良知の上には元來何等消長盈縮のあるべきなし。王子曰く、

周公禮を制し樂を作つて以て天下を文^{かぎ}れり、是れ皆聖人の能く爲す所、堯舜何ぞ盡く之を爲さずして

此時に遇
へば此事
あり

而て周公に待つや。孔子六經を刪述して以て萬世に詔ぐ、是れ亦聖人の能く爲す所、周公何ぞ先づ之を爲さずして而して孔子に待つや是れ知る聖人此時に遇へば方に此事あるを。^{傳上 二六}

然り、此時に遇へば此事あり、此事を取つて良知の進化となすを休めよ。冬に裘し夏に葛す、裘より葛に進むは形式上の進化を許すも、冬に裘し夏に葛する所以の靈知に至つては前後一ならずや。進歩と云ひ發展と云ふ、亦冬裘夏葛の類のみ。

良知増減
なく起滅
なし
良知の明
萬古一日

良知は古に亘り、今に亘り、増減なく、起滅なく、經驗に因つて在らず、進化に因つて變せざるものなり。唯其れ然り、是を以て能く靈能あり、權威あり、王子拔本塞源論^{傳下 三六}の終に述へて曰く「所^レ幸天理之在^二人心^一。終有^レ所^レ不可^レ泯。而良知之明萬古一日」と。然り、良知の靈明や、千古の前此の如く、萬年の後此の如し、天地之を得て無限の變化を爲し、人之を得て永劫の活動を爲す、其權威如何ぞや。

五、良知の絶對

良知の明萬古一日にして、其權威無限なり、然らば良知の物たる必や絶對ならざる可らず。絶對ならざれば明も塞がる所あり、知も窮まる所あり、何を以て萬古一日となさんや、何を以て無限となさんや又何ぞ萬變の大規矩たるに足らんや。

進化精靈 孔子は詩書禮樂を雅言し、文行忠信を縷述せるも、其信念の奥に活躍せる天てふ觀念に至つ

自信の妙
諦絶對の
天機

ては殆ど之を口外せざりき。王子は良知を是非規矩の上に雅言し、致知格物の上に縷説するも、其自信の妙諦絶對の天機に至つては容易に之を筆舌に上さず、されば左の一節は傳習録中尤も赫奕たる信條たらずんばあらず。

良知天を
生み地を
生む物を
對なし

良知は是れ造化の精靈なり。この精靈天を生み地を生み鬼を成し帝を成すも皆此より出づ、眞に是れ物と對なし。人若し他かれ知を復し得て完々全々少しの虧缺なくんば、自ら手の舞ひ足の踏むを覺へざらん。知らず天地の間更に何の樂の代ふべきあらんを。傳下 三一

良知を造化の精靈なりと信得したるは、是れ王子の大信念なり。現今の語を假りて言はゞ、良知は宇宙の大精神なり。蓋し天あれば地あり、鬼あれば神あり、宇宙の萬物悉く相對的ならざるはなし。相對は以て物を化生するに足らず、物を化生するもの其れ唯絶對か。絶對之を造化の精靈と曰ふ、人に在つては良知と曰ふ。天地鬼神皆此より出で、萬物皆我に備はる。人若し信じ得て惑はず、復し得て完くば、王子の謂はゆる天地の間更に何の樂の代ふべきものあらんとは是なり。されば王子の良知を見得するや曰く「自孔孟既歿。此學失傳幾百千年。賴天之靈。偶復有見。誠千古之一快。百世以俟。聖人而不惑者也」全書八 卷一五。夫れ至上絶對の良知を見得す、之を讚嘆歡喜するもの尋常に越ゆるは洵に故あるなり。**良知と良心** 西洋倫理學者に良心の説あり、淺見者往々之を良知に混同するは謬れり。良心とは彼に在つては是非善惡を識別する心的能力を稱す。天賦良心の語あるも、是れ亦良心の先天的固有を説明する

良心説と
良知との
相違

に外ならず。我に在つては良知は絶對なり、無限なり、天の配賦せる良知に非ずして、天其物なり。或は良知を單に是非の心と曰ふ、此場合には良心と何等異なる所なきが如きも、是非の心は即ち絶對なる天機天則に外ならざるを知らざる可らず。されば良知と云へば良心其中にあるも良心の語未だ良知を盡すに足らざるなり。

第六章 致良知

良知は大規矩なり。大規矩も之を用ひざれば方圓を爲さず、良知も之を致さざれば小知にだも如かず。是に於て致字を冠し、「致良知」の三字符を王門の大宗旨となす。王龍溪が「致良知之三字符吾人保命之符」と稱せるは是なり。

一、致知の外に學なし

王子が致知格物の一悟は龍場に發す。然れども良知の二字を江西五十に掲げたる以前に在りては、致知の解猶一段の明直を缺けり。徐愛の錄に「在常人不能無私意障礙。所以須用致知格物之功。勝私復と理。即心之良知更無障礙」傳上 二三と云へる如き、先づ致知の功を用ひて私に勝ち理に復り斯くて後

良知に障碍なしとなす、其語意頗轉折を要して直截を缺けり。然るに江西に良知を掲けたる後は、致知即ち直に良知を致すなり、良知は即ち直に天理なり、直截承當多方歸一の感なくんばあらず。是に於て王子に猛烈なる自信と譖嘆とあり。曰く、

邪妄の知
異端の學

良知の外更に知なし致知の外更に學なし。良知を外にして以て知を求むる者は邪妄の知なり、致知を外にして以て學を爲す者は異端の學なり。全書六 卷二四

又五十四歳の時門人朱守乾の卷に書して曰く、

黃州朱生守乾請學而歸。爲書致良知三字。夫良知者即所謂是非之心。人皆有之。不待學而有。

大本達道

不待慮而得者也。人孰無是良知乎。獨有不能致之耳。自聖人以至愚人。自一人之心以達於四海之遠。自千古之前以至於萬代之後。無有下不同是良知也者。是所謂天下之大本也。

致是良知而行則所謂天下之達道也。天地以位。萬物以育。將富貴貧賤患難夷狄無所入而弗自得也矣。全書八 卷一四

良知の外に知なく、此知實に天下の大本なり。致良知の外に學なし、此學實に天下の達道なり。

簡易無病 良知の外知なきに非ず、唯それ見聞知なり、識知なり、之を知なしと謂ふ。致良知の外學なきに非ず、唯それ俗學なり、功利の學なり、之を學なしと謂ふ。孟子の良知、大學の致知其の深旨埋没

すること千百年始めて其眞を王子に發す、之を天の靈と謂はざらんや、之を千古の一快と謂はざらんや。

簡易明白

王子又曰く「聖賢學を論ず、用ふ可らざるの工なし、只是れ致良知の三字尤も簡易明白實に手を下す處あり、更に走失なし」全書六 卷二九、又曰く「我の話頭、滁洲より今に至るまで亦較幾番を過ぐ。只是致良知

折肱能く
病理を察す

の三字病なし。醫は肱を折るを経て方に能く人の病理を察す傳下 卷三二と。夫れ天理を存する半面に人欲を去るの語を掲ぐ、本と二法なきも、意稍分析に失ふ。今六字を約して三字に歸入し、良知を致さば天理其處に存し、人欲其處に消ゆ、眞に簡易無病と謂ふべけれ。

百死千難中得來る 三たび肱を折つて良醫となる。豈但三折のみならんや、王子は千辛萬苦中より良知を得來れり。學者左の言を味ふを要す、

某此の良知の説に於ては、百死千難中より得來れり。已むを得ず人のために一口に説き盡す、只恐らくば學者之を得ることを容易にして、把つて一種の光景と作し、玩弄して實落に功を用ひす此知に負

かんのみ全書三三 卷三三

發見者は之を百死千難の實歴上より得來る、學ふ者之を實驗體得の上を受用せずんば、走失と病痛となきを欲するも得んや、王子の深愛言々涙あるを覺ゆ。吾人は光景を認め虚見に流れ、師心縦肆に陥りて此知に負き此發見者に負かずんば幸なり。

王子の深
憂

二、致とは何ぞ

良知は之を致さざる可らず、如何なるか之を致と云ふ。王子曰く

致とは至なり、喪には哀を致すと云へる致の如し。易には「知_レ至_レ之」と云へり、至るを知るは知なり、之に至るは致なり。知を致すとは後儒の謂へる其知識を充廣するにあらずして、吾心の良知を致すのみ全書二十六卷大學問

要するに致は實行するなり、良知の儘に循ひ去るなり。例せば温清定省は孝養の知なり、實に以て温清し定省す是れ知を致すなり。王子曰く「知を致すの必行ふに在つて、而て行はざるの以て知を致すとなす可らざるを知るべし」傳中と是なり。己の欲せざるは知なり、之を人に施さざるは知を致すなり。好色を知り惡臭を知るは知なり、好色を好み惡臭を惡むは知を致すなり、是れ良知の儘に循ひ去るなり。歐陽南野曰ふ「致知とは吾が獨知を踐履の間に致し、必自ら慊こころよくして自ら欺かざるの謂なり」南野文選と。然らば良知を致すとは良知を欺かざるなり。蓋し良知は是非の眞知なり。良知の是とする所之を是とし、良知の非とする所之を非とし、是非非一毫の夾雜なく、一毫の作爲なく、念々良知に依著し、刻々良知に循着し去らば、良知の面目斯に始めて完しと謂ふべし。

良知の説耳に盈ちて良知を致すもの寥寥たり、其弊何づくに存する。王龍溪に説あり、頗る王子の旨を發明するに足る。曰く、

今日良知の説孰か聞かざらんや、然れども能く實に其知を致す者幾人かある。此の中玄妙の説くべき

自ら欺かす

氣魄、知解、格套の三弊

なく、奇特の尙ふべきなし、須らく種々外に向へる精神を打併して一に歸せしめ一念獨知の處より實に理會し自ら省み自ら認め過ちの改むべきあれば徹底掃蕩し以て廓清の効を收むべし、方に是れ入微の工夫なり。若し氣魄の上より支持し、知解の上より湊泊し、格套の上より依傍し、傲然として道此に在りとなすものは世の紛華勢利に營々役々たる者と稍同しからずと雖、未だ本原を得ざると、性命に補ひなきときは一なり龍溪全集水西會約題詞

然り吾人は漫然として曰ふ、只知る所を實行せば足らんと。而かも其の謂はゆる知る所のもの、剛者は氣魄に任せ、智者は知解を弄ひ、柔者は格式に陥り、眞良知と迥に其撰を異にするを知らざるなり。宜なり眞に良知を致す者少きや。

千古聖學の秘

別法無し 王子曰く「致知の二字是れ千古聖學の秘」と。されば門下諸人王子の口頭より何等かの手段を聽かんとするや切なりき。然れども王子に別法なし、其消息を窺ふべき問答あり、左に抄出せん。

一生問ふ

學問の工夫は何如。

王子答ふ

學問の工夫は我早く一句に道ひ盡せり。何とて今日言へば言ふだけ遠ざかりて根本に著せざるぞ。

問

一句道ひ盡す

致良知の教は之を承はりぬ、されども亦講明すべき方法やあらん。

答

既に良知を致すてふことを知らば、此外何をか講明すべきぞ。良知は本來明々白々なり、其儘に實行せは可なり。言語の上にてあれこれと説けば説くだけ紛雜せん。

問

さなり、弟子は正に其實行の手段を講明せんことを求む。

答

そは各自身上に求めよ、我に何等別法の道ふべきものなし。昔一禪師あり人が來りて佛法とは何ぞと問へば只塵尾ほつすを把つて提起しけり。或る日弟子たち相談して塵尾を匿し、今度こそは我師何如に法を示さんかと復た問ひ試みたるに、禪師塵尾を探がして見へざりければ、乃ち空手で提起したりと。我の良知も禪僧が法を示すの塵尾なれば幾度説いても答へても致良知、外に何の示すべきものかあらん。

塵尾提起

斯くて暫時の後他の一生が何心なく再び問ふらく、

學問工夫の切要なる處は何如。

王子あたりを見廻して、

塵尾が見
へぬ

こらく、我塵尾が見へぬぞ、誰か匿しはせぬか。

是に於て列座の弟子ヒシと胸こたに徹へて省覺する所ありたり。傳下 四〇

致良知に別法なきこと此の如し。然るに唯一の法あり、何ぞや、曰く格物是なり。

三、格物

格物説七
十二家

大學に見へたる格物の義、古來諸家の説紛々として清の全祖望をして「七十二家格物之説。令末學窮レ老絶レ氣。不レ能レ盡舉ニ其異同一」皇清經解 卷三〇ハと曰はしむるに至る、以て異説多きを知るへし。朱王二家學問の相違する所、其根本亦此に在り。其の大略は既に之を「存天理去人欲」第三章 第三の條下に畧説せり。蓋

し天理を存し人欲を去らんと欲せば、吾が是非を知るの知を致して心上感應の事物を格さざる可らずと、王子が中年屢繰り返せる訓條なり。然るに後年致良知の三字宗を掲ぐるに至りては、格物の義も亦た之を致良知の下に再説するの要あり。蓋し其初め曰く「格物は是れ至善に止るの功」傳上 一〇と。又曰く、「誠意の功只是れ格物」傳上 二と。其間に致知の一階を畧せり。既にして四十七歳大學古本に序して曰く「格物は致知の實なり」全書 七卷と、實とは實功と云ふ如し、前に比して一段の親切を覺ふ。既にして五十三歳周道通に答へて曰く「格物は是れ致知の工夫」と、工夫とは仕事しごとなり、此に至つて格物の定義に最後の鐵案を獲たり。

格物の定
義

格物は致良知の工夫 良知を致すの道は格物の一方あるのみ。王子曰く、

格物は是れ致知の工夫なり、致知を知り得れば便ち已に格物を知得せり。若し未だ格物を知らずんば則ち致知の工夫も亦未だ嘗て知らざるなり。傳中 四二

格物は致良知の仕事なり、此ありてこそ致良知に始て實落の手段あり。王子曰く、

格物の致

吾れ人に良知を致すを教ふるに、格物上に在つて功を用ひしむ、卻て是れ根本ある的の學問にして、日は一日より長進し、愈久うして愈精明を覺へん傳下と、是なり。

王子に大學問傳習 附錄の著あり、五十六歳思田を征せんとするに臨み、高弟錢德洪に授けたるものにして

王子の大學に對する精旨を窺ふべき唯一の論著なり。今修身、正心、誠意、致知、格物、に關する所見を窺はん。

欲レ致其良知。是必實有ニ其事一矣。故致レ知必在ニ於格一物。物者事也。凡意之所レ發必有ニ其事一。格者正也。正ニ其不正以歸ニ於正之謂也。正ニ其不正者。去レ惡之謂也。歸ニ於正者。爲レ善之謂也。夫是之謂レ格。良知所レ知之善。雖ニ誠欲レ好レ之矣。苟不レ即ニ其意之所レ在之物一而實有ニ以爲上レ之。則是物有レ未レ格。而好レ之之意猶爲レ未レ誠。今於ニ其良知所レ知之善者。即ニ其意之所レ在之物一而實爲レ之。無レ有ニ乎不レ盡。然後物無レ不レ格。而吾良知之所レ知者無レ有ニ虧缺障蔽一而得ニ以極ニ其至一矣。夫然後意之所レ

惡を去り善を爲す之を格と謂ふ

發者始無ニ自欺一。而可ニ以謂ニ之誠一矣。故曰。物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而身

修。傳習 附錄

夫れ心の本體は至善にして正しからざるはなきも、意念發動して善惡あり、故に意を誠にせざる可らず。之を誠にせんと欲せば、意の善惡眞妄を明辨する爲めに是非を知る良知を致さざる可らず。良知を致さんと欲せば必や其仕事に取り掛らざる可らず、善か之を好み之に就き、惡か之を惡み之を去り、一毫の猶豫假借を許さず、之を格物と云ふ。されば説明上には先後次序の言ふべきあるも、實地の上に立たんか格物の一事完くば良知も致され、意も誠となり、心も正しく、身も修ること言ふを俟たず。故に王子曰く

格物あるのみ

格物は大學の實に手を下す處、首に徹り尾に徹り、始學より聖人に至るまで只此の工夫のみ傳中 七五

分限に隨ふ 論者曰ふ、致良知の下に物を格すは既に其旨を領せり。而かも吾人の良知は蔽病なき能はず、故に先づ知を研き蔽を去りて後格物に着手せず、蔽を認めて子となすの過ちに陥らんと。思ふに世上此種の論者多きに勝へず、而かも斯かる論者は先づ知つて後に行はんとする知先行後の謬に陥れり。知行は合一にして行はずして知を研き蔽を去るべき理なし。且つ吾人の良知現在完全なりと云はざれど亦知る所なしと爲さず。人の學修は梯子を登る如し、一段を登れば一段の見地あり、二段を登れば二段の知見生ず、故に吾人は吾人が分限力量の及ぶ所に隨ふて今日の知る所を實行せんのみ。王子曰く、

學修は梯子を登る如し

今日知る所を擴充到底す

我輩の知を致す、只是れ各分限の及ぶ所に隨ふのみ。今日の良知見在此の如くなれば、今日の知る所に隨ふて擴充到底し、明日の良知又開悟あらば便ち明日の知る所に從ふて擴充到底す、此の如きは方

一四

傳下

に是れ精一の工夫
誠に然らずや、吾人は知を積み迷を去りて然る後行はんと欲せば、人生果して何れの時を以て實行の秋となさんや、終生識知の上に役々たる外なけん。寄語す向學の士、須らく汝が分限及ぶ所に隨ふて今日の知を致せ、さらば汝の知見益開けて終生行ひ盡し得ざるものあらん。

童子格物

大人は分限に隨ふて物を格すも可なり、童子は如何にせんか。曰く童子も亦分限あり。童子の智灑掃應對し得るに至らば導いて灑掃應對せしむ、是れ童子の格物なり。又た童子は能く先生長者を畏るゝことを知る、故に遊戲中と雖先生長者を見れば恭敬作禮す、是れ童子が師長を敬する良知を致すなり。人には皆格物の仕事あるを要す。王子曰く、

我言格物。自童子以至聖人、皆此等工夫。但聖人格物更熟得些子。不消費力。如此格物。

雖實柴人亦是做得。雖公卿大夫以至天子。皆是如此做。

傳下

三尺の童子より白髮の老翁に至るまで、無知の凡夫より大賢至聖に至るまで、乞丐樵夫より王公天子に至るまで、皆分限に隨ふて格物の功を積むべきこと此の如し。

四、靜坐と事上磨鍊

致良知の下、分限に隨ふて格物の功を積むべきは既に前述せり。格物の方法手段としては靜的には靜坐の存養工夫あり、動的には事上磨鍊の家法あり。

孔孟手段
存養體認
の二派

靜坐 論語には孔子が意必固我を絶つを言ひ、易には、邪を閉ぎ誠を存するを言ひ、孟子は心を存し性を養ふを述べ。夫れ意必固我を掃蕩して本心の誠を存するは良知の本體に復るの謂に外ならず。良知の本體に復らんと欲せば意必固我の魔障を掃蕩せざる可らず。今之が手段として靜坐の工夫を用ふるは縱令其法の孔孟に出でざるも猶是れ孔孟の手段なり。然れども儒家の靜坐に對する態度蓋し二流派あり、一は靜坐を以て心性を存養するなり、一は靜坐を以て天理を體認するなり。前者の心性存養は孟子の放心を求むる手段に外ならざるも、後者の天理體認は之を禪的手段と云ふも或は否む能はず。

禪の極意

禪宗の西來するや、坐禪入定を以て唯一の宗義となせり。禪とは靜慮の義なり、定とは寂滅の境なり。兀々打坐、無念無想の三昧地に入りて自己本性を徹見し、即心即佛の大徹悟に達するが其極意なり。唐宋の間禪風儒林に浸潤して、高明超脱の士争うて其下風に趨る、是を以て坐禪入定より延いて儒中に靜坐の工夫を云爲するもの多きを致せり。而かも周濂溪主靜の説大極圖說より、二程を経て朱晦菴に傳はれる靜坐は心性存養派なり、二程の門に楊龜山名時字中立を出し、羅豫章名從彦字仲深李延平名侗字愿中を経て明の陳白沙名獻章字公甫に

傳はれる静坐は天理體認派なり。

さらば王子の静坐に對する態度は何如、曰く王子は固より存養の上に静坐を承認するものなり。其の龍場貶謫を免れて盧陵知縣となるや、心體を廓清するを以て作聖の手段となし、途次諸生と僧寺に静坐して性體を悟らむと期したるが、既に途に上り書を寄せて曰く、

放心を收む

前きに寺中に在て云へる所の静坐の事は、坐禪入定を欲するにあらず。蓋し吾輩平日事物に紛拏せられ己が爲にするを知らされは、此を以て小學の放心を收むる一段の工夫を補はんと欲するのみ全書三二卷一六是れ放心を收むる補助手段として静坐を承認せり。既にして「心體廓清」の工夫に代ふるに「存天理去人欲」の教旨を以てするに至り、一日爲學の工夫を論して曰く、

思慮を息め心意を定し

人に學を爲すを教ふるは一偏を執すべからず。初學の時心猿意馬拴縛し定らず。其思慮する所多く是れ人欲の一邊なり、故に且らく之に静坐して思慮を息むを教ふ。之を久うして其の心意稍定るを俟つ只懸空に静守して槁木死灰の如くは亦用なし、他をして省察克治せしむへし傳上三三是れ思慮を息め心意を定むる手段として静坐を承認せり。既にして體用一源動静無二の思想益圓熟するや、動静を以て功夫を分つの弊を覺りて曰く、

動静一貫

静時も念々人欲を去り天理を存す、動時も念々人欲を去り天理を存す、寧静と不寧静とに管せず。若し寧静を主とせば、漸く静を喜び動を厭ふの弊あるのみならず、中間許多の病痛も只是れ潜伏して終

に絶ち去る能はず、事に遇はゞ舊に依て滋長せん。理に循ふを以て主となさは、何ぞ嘗て寧静ならざらん、寧静を以て主となさは未だ必しも理に循ふこと能はず傳上二九

寧静を主とせば遂に動を厭ふの弊に陥るのみならず、到底魔障を掃ひ得じとは王子の深旨なり。然らば静坐は晩年遂に王子に疎外せられたるか、否然るに非ず。王子五十三歳の時弟子劉君亮山中に在て静坐せんとす、王子之に告げて曰く、

晩年定説

汝若し外物を厭ふの心を以て之を静に求め去らば是反て一箇驕惰の氣を養成し了らん。汝若し外物を厭はずは復た静處に於て涵養するも卻て好し傳下二九

是れ王子晩年の定説なり、蓋し静坐は本性を見んが爲に非ず、天理を體認せんが爲めに非ず、凡情雜慮を掃蕩して心性を涵養せんとなり。換言せば人欲を去て良知の發動を完全ならしめんとなり。無念無想に入るには非ずして、静坐しながらも人欲を去り天理を存する工夫に忙がしきなり、王子が静坐の本旨此に在るを忘る可らず。顧ふに吾人日夜名奔利走、營々擾々として熱鬧場裡に没頭する者、先づ静坐して諸縁を息め心田を清め其處に天理を存養するは進修の肝要手段たらずんばあらず。程伊川が人の静坐するを見る毎に其の善學を嘆じ、朱晦菴が學ぶ者半日静坐し半日讀書せば必進歩の觀るべきものあらんと云へるも是なり。

事上磨練 致良知の功は格物に在り。而かも學ぶ者難きを避けて易きに就き動を厭ふて静を喜び、往々

王子家法

靜坐收斂に腐心す。斯かる人は靜時には精神意思頗る安貼する如きも、一旦事に臨めば從容裁決の手腕を缺くのみならず、周章顛倒して措置を失はざるは稀なり。王子此弊を看破するや久し。是に於て事上磨鍊の家法を掲げて迷へるを覺まし溺れたるを救ひ、主として格物の實功に従事せしむ、其の後學に嘉惠する所蓋し淺少に非ざるなり。

陸澄頂門一鍼

事上とは何ぞや、簿書訟獄も事上なり、聲色貨利も事上なり、富貴貧賤死生艱難も事上なり、之を總括すれば人情事變の四字に歸入す。磨鍊とは何ぞ、刀を鍛ふ如く、玉を磨く如く、人情事變の上に心力を鍛へ思想を鍊るなり。弟子陸澄嘗て病兒危篤の報を得て憂悶に堪へず、王子頂門の一鍼を下して曰く、此時正に功を用ふべし、此時を放過せば閑時の講學も何の用かせん。人は正に此等の時に在つて磨鍊するを要す。父の子を愛するは自ら是れ至情なれども、天理亦自ら中和の處あり、過ぐれば即是れ私

意傳上三六

人情事變は精神鍛鍊の舞臺にして、磨鍊の鞦韆を下すべき田地なり。吾人は此田地に不斷の鞦韆を下し七情を調攝し過不及を懲らし敢て怠ることなきを要す。一屬官あり簿書訟獄の繁を以て學を爲すことを得ざるを啣つ、王子答へて謂ふ、

何ぞ懸空學を講せよと教へんや

我れ何ぞ嘗て汝に簿書訟獄を離れて懸空に學を講せよと教へんや。汝已に官司の事あらば官司の事上より學を爲す、纔に是れ眞の格物なり。一の詞訟を問ふが如き、彼の應對無狀なるに因て怒心を起す可

實學

らず、彼の言語圓轉なるに因て喜心を生す可らず、自己の事務繁冗に因て苟且に之を斷す可らず、此の許多の意思は皆私なり、須らく精細に省察克治し、一毫も人の是非を枉げんことを恐る、便ち是れ格物致知なり。簿書訟獄の間實學に非ざるはなし、事物を離れて學を爲さば卻て是れ著空ならん傳下人間萬事實學に非ざるはなし、磨鍊の地に非ざるはなし、事物を離れて學を爲さんとす、是れ寂空無用の學のみ。王子の一屬官に教ふる所親切と謂ふ可し。

弟子陳九川更に靜坐の收斂と事上の省察と、内外の工夫打して一枚とならざるを苦み其方を問ふ。王子答へて曰く、

須らく事上に在り磨鍊して功夫をなすべし、乃ち益あらん。若し只靜を好まば、事に遇はば便ち亂れん、終に長進なくして靜時の工夫も亦差はん、收斂に似て實は放溺なり傳下蓋し靜坐は可なり、靜坐を好むは不可なり。靜を好めは動を惡む、動を惡めは事に遇ふて迷亂せん、昧者は靜時に於て得々として其見性悟道の入微に誇るも、識者より之を見れば實は放溺の手段のみ、思はざる可けんや。

收斂に似て實は放溺

事上磨鍊は固と靜處の工夫に對して掲げられたるも、其實は動靜を貫き内外を合せたる格物の實手段なるを忘る可らず。故に曰く、

人須らく事上に在て磨すべし、方に立ち得て住らん。方に能く靜にも亦定り動にも亦定らん傳上

靜時戒慎
動時省察

動靜は遇ふ所の時にして、道體に動靜ある可らず、されば磨鍊の家法は靜時には戒慎し、動時には省察し、動と靜と皆工夫の地に非ざるはなし。若し獨り動時の工夫に偏せんか、何ぞ以て家法となすに足らんや。斯くて此に至らば靜坐も亦事上磨鍊中の一方と爲り了らん。嗚呼學ぶ者動靜二境の上に磨鍊の工夫を積み、人情事變の上に格物の實功を致さば、我良知茲に致され、我意茲に誠にせられ、正心修身より治國平天下に至る徳業の基礎茲に立たん。蓋し孟子曰く「必有_{義氣}事焉_章」と、是れ事上磨鍊の由て來る所か。而かも王子に由つて名稱を新にし、旗幟を鮮にし、後學に奮闘的生活の眞意義を會得せしむ、亦偉ならずや。

奮闘生活
の眞意義

第七章 善 惡

斯學の教旨が「立志」に立ち、「心即理」に根柢し、知行合一の上に天理を存し人欲を去り遂に良知の拈提を以て致良知の三字宗を成せること上來畧之を論述せり。斯くて王學の體段は一通り完了せるも、猶幾多緊要なる問題を遺せり、善惡の意義解決は其一なり。

一、善惡の意義

善とは何を意味するか、惡とは何を意味するか、此解決は學問教義の根柢となり、學說の相違を來たす緊要問題なり。されど又た此問題ほど東西古今に涉り紛糾して歸一する所なきはなし。但し我儒教に在りては大體の歸嚮畧ば一致す、今之を大別して快樂說功利說良心說の三となすを得、快樂說に由れば人生の目的は快樂が標準にして、快樂を生ずる行爲は善となり、苦痛を生ずる行爲は惡となる、楊朱の

快樂說

利己説は是なり。功利説は功益福利を標準とし、國家民衆に利益を與ふること多きものは善にして、之に反するものは惡となる、墨翟の兼愛説、及び荀子の「善者正理平治也。惡者偏險悖亂也」性惡篇と云へる

良心說

は是なり。良心説は人々に固有の良心あり、良心に従ふを善とし、良心を欺き私念物欲に盲動するを惡とするなり。儒教の中、時に荀子一流の學者を出だすことあるも、大體に於ては良心説の範圍を出でざること多言を俟たず。孔子が仁を説き道を説くと共に、一面には「人之生也直。罔_レ之生也。幸而免_レ」雍也第六

孔子

子思

孟子

と云ひ、直を以て人生を解決せるは是なり。子思が中庸に「天命之謂_レ性。率_レ性之謂_レ道。」と言ひ起して天の命する理性に率ふを最上善の道となせるも是なり。孟子之を承けて、人性は善なり、人は皆堯舜となり得べしと性善説を標榜し、良心説の旗幟最鮮かとなれり。宋に入り、周、程、張、朱の諸儒固より孟子を祖述せり。蓋し王子と雖亦た固より其統を漏れず、然れども王子には王子の本色あり。曰く、

理に循へば便ち是れ善_{傳上}六一
又曰く、

心主_ニ於身。性具_ニ於心。善原_ニ於性。孟子之言_ニ性善_一是也。善即吾之性中界心外無_レ物。心外無_レ事。心外無_レ理。心外無_レ義。心外無_レ善。吾心之處_ニ事物_一。純_ニ乎理_一。而無_ニ人偽之雜_一。謂_ニ之善_一。全書四卷一六

右に据れば、善とは理に循ふの謂なり、理とは天理なり、吾の性體なり、吾の性體なる天理に純にして何等の雜念なきを善と曰ふ。即ち中庸に性に率ふを道と云へるも同じ。

然らば惡とは何ぞや。善の義已に定まれば之に反するものは惡なり、天理に純ならず人偽の雜りあるものは惡なり、性體のまゝに動かぬものは惡なり。故に曰く、

氣に動けば便ち是れ惡_{傳上}

氣に動けば便ち是れ惡_{傳上}

二、善惡の起所

天理に循ふは善にして、天理は我性體なれば、善の起所は亦之が細論を要せざるも、惡の出所に至つては蓋し商量を要するものあり。孟子曰く「從_ニ其大體_一。心爲_ニ大人_一。從_ニ其小體_一。耳爲_ニ小人_一。耳目之官。不_レ思而蔽_ニ於物_一。物交_レ物則引_レ之而已矣。心之官則思。思則得_レ之。不_レ思則不_レ得也_{傳上}。孟子の意に据れば、人には理非を思辨する大體の心と、盲目的にして小體なる耳目口鼻身の五官とあり。五官は思慮の能を缺くを以て外物に蔽はれ易し、其處に外誘物惑來れば、兩者相引き相抱き、心猿意馬は益狂うて善性も忽ち化して小人となるなり。然るに世上の人心を觀察せんに、善長し難く、惡染み易く、紛々謬戾殆ど孟子の見たる如く簡單ならざるの觀あり。是に於て張程兩家は天地氣質の兩説を立て、善惡を説明せり、朱子も亦之を祖述す。

孟子善惡の起所

々々謬戾殆ど孟子の見たる如く簡單ならざるの觀あり。是に於て張程兩家は天地氣質の兩説を立て、善惡を説明せり、朱子も亦之を祖述す。

天地氣質兩性 天地の性は天地より稟けたる本來の性なれば本然の性とも云ふ、氣質の性は人の五體が

橫渠兩性説

伊川の才説

結ばれたる上にて生ずる形氣の才質なり。始て此説を立てたるは張橫渠とす。曰く、「形而後有_ニ氣質之性_一。善反_レ之則天地之性存焉。故氣質之性。君子有_ニ弗_レ性者_一焉_{張子全書正義}。程伊川曰く、「性出_ニ於天_一。才出_ニ於氣_一。氣清則才清。氣濁則才濁。譬猶_レ木焉。曲直者性也。可_ニ以爲_ニ棟梁_一。可_ニ以爲_ニ榱桷_一者才也。才則有_ニ善與_ニ不善_一。性則無_ニ不善_一」_{二程全書卷二〇}。其の謂はゆる氣に出づるの才は、即ち張子の氣質の性なり。朱子更に之を繼述して曰く「氣質之説。起_ニ于張程_一。極有_レ功_ニ于聖門_一。有_レ補_ニ于後學_一。前_レ此未_ニ曾有_レ人説到_レ此_一」_{性理大全卷三}。又曰く、「有_ニ天地之性_一。有_ニ氣質之性_一。天地之性則太極本然之妙。萬殊之一本也。氣質之性則二氣交運而生。一本而萬殊也」_{同上}。

朱子の繼述

以上三家の説、之を細論すれば多少の出入あるも、要するに形氣の上に氣質の性を認め、惡の根原を此に置けるは同一なり。然らば王子は何如。曰く王子は性は一なりと云ひ、其性が理に循へば善となり氣に動けば惡となる説けるよりして、其處に本然氣質の兩性を立つることを要せざるなり。

氣之動 王子は兩性を認めず、而かも氣の上に惡の出所を認むるは相似たり。其説に曰く、善なく惡なきは理の靜なり。善あり惡あるは氣の動なり_{傳上}

王子兩性を認めず、善惡は氣の動なり

氣に動けば便ち是れ惡なり傳上六一

右に据れば、天理のまゝに循へば其處に善と云ふべきものなく、惡と云ふべきものなし。然るに理に外れて氣に制せらるゝこと、なれば、其行や不條理即ち惡となり、従つて前の理に循ひたる行は善と名けられ、善惡の稱立つ。之を善あり惡あるは氣の動と云ひ、氣に動けば惡と云ふなり。然らば氣は張程諸家の見たる氣質と同じく惡の根原か。曰く否、氣の本來は惡に非ず。王子曰く「理は氣の條理にして、氣は理の運用なり」第九章理氣 合一參照。氣は元來理の運用に名づけられたる名稱なり、惡ある可からず。然れども外誘物感^カ之を拘束して理に循はしめず、此氣獨り盲動するに至ては、此氣惡とならざる能はず。之を客氣と云ふ、惡とは此客氣に動く名なり。而かも王子は更に説を進めて晩年習氣の説を爲せり。

惡は客氣なり

習氣 客氣とは一時客寓の義なり、習氣の名稱が習染を意味するの妥當なるに如かず。王子曰く、

惡念は習氣

惡念は習氣なり、善念は本性なり。本性が習氣の汨^たす所となるものは、志の立たざるに由る中畧志立たば習氣も漸く消へん全書二六 卷二四

習氣は移香の如し

右は王子の習氣説なり。習氣は惡の根原なり、否惡其物なり。故に是に至ては「惡とは氣の動」と云はずして、直に「惡念とは習氣なり」と喝破し、惡の説明に一段の直截と明了とを加へたり。然らば習氣は何づくより來るか。曰く、習氣は他より我氣質の上に染汚せられたる一時假有の現象なり。例へば物に残りたる移香^{うつりか}の如し、其物固有の香に非ずして、他より薰染せられたる香なり。故に志斯に立たば習氣は斯に消盡すること。猶移香の洗滌を経て消散する如けん。消散すれば跡の尋めべきなし、跡の尋めべきなきもの豈我に實體あらんや、然らば此習氣は何れの時を以て我に生ずるや。王子曰く、人心は智識あつてより以來已に習俗の染むる所なる全書年譜五 十六年條此の語に見ば、人生れずんば則ち己む、苟も母胎を出て、呱呱の一聲を揚ぐるや、斯に外氣に觸れ、嗜慾横生して、淺深厚薄の差こそあれ、何等かの習染附着せざる能はず。そが智識の増進性慾の發達と共に、紛紜錯謬して許多の小人を作り出だすなり。

習氣に實體なし

習氣は智識と共に生ず

三、氣 質

惡は外來の習染なり。然らば吾人には何等の受染性なきか、是に於て氣質を論ずる必要あり。性體は萬人同一なれども、氣質の稟受は各人各様にして、而かも皆染汚の感受性を具へ、習染は此處に向つて其威力を逞くす。王子曰く、

氣質の受染性

人の氣質は清あり濁あり、粹あり駁あり、中人以上なるあり、中人以下なるあり。其道に於けるや、生れながらにして知り、安じて行ふものあり。學んで知り、利して行ふものあり。其下なる者は、必ず人一度すれば己は百度し、人百度すれば己は千度すべし傳上 五八

又曰く、

良知は本來自ら明なり、氣質美ならざる者は渣滓多く、障蔽厚くして、開明し易からず。質美なる者は、渣滓原と少くして、障蔽多きことなし傳中 五八

氣質の相異なること此の如し。而して此氣質は喜怒哀樂愛惡欲の七情を具す。氣質先づ習俗の染汚を受ければ、七情の動くや、茲に過ぐるあり及ばざるありて、始て百般の惡を生ず。

さらば氣質は惡か。否、性を離れて氣質なし、氣質には清濁粹駁の相異こそあれ、依然性の運用にして惡と謂ふ可からず。王子曰く、

性は一の

性は一のみ。仁義禮智は性の徳一に性なり、聰明睿智は性の質なり。喜怒哀樂は性の情なり。私欲客氣は性の蔽なり。質に清濁あり、故に情に過不及ありて、蔽に淺深あり傳中 六〇

斯の如く、氣質と云ひ、情と云ふ、性の氣質なり、性の情なり、故に又た惡ある可からず。氣質清き者は聰明となり、氣質濁る者は沈重となり、剛者は怒り、柔者は哀むも、其間豈惡あらんや。但だ習染一たび其處に膠着すれば、惡茲に生ず。故に曰く、

剛惡

人生の初時は善なること皆同じ。但だ剛なる人、善に習はゞ剛善となり、惡に習はんか剛惡となる。

柔惡

柔なる人、善に習はゞ柔善となり、惡に習はんか柔惡となる。乃ち同じき人も日に相遠かる傳下 七四

習の一字
惡の根原

斯の如く、氣質の剛柔は惡と謂ふ可からず、但だ其れが惡に習はゞ始て剛惡となり、柔惡となるのみ。さらば惡の根原は其れ習の一字か、物蔽と云ひ、物欲と云ひ、私欲と云ひ、人欲と云ひ、客氣と云ひ、

氣拘と云ひ、心賊と云ふ、皆習のみ。諸多の惡名は皆習染より生ず、氣質の固有せる所に非ず。

程朱學と
氣質變化

氣質變化 氣質變化の説は横渠及伊川に起り、朱子之を承く。朱子の意に従へば、吾人の氣質清明ならば、其行爲は本然の性其儘を呈露すべしと雖、之に反し氣質昏濁ならば、本然の性爲めに拘蔽せられ、本體のまゝに働かず。されば惡しき氣質は之を變化するが第一義たらざる可らず、是れ程朱學に於て氣質變化説の重要な所以也。されども王子に在つては、氣質には清濁剛柔の差こそあれ惡には非ず、惡と云ふべきものは習染也。故に剛者は剛のまゝに剛善を志し、柔者は柔のまゝに柔善を志し、習染を去るが第一義となる。然れども氣質變化の説なきに非ず。其四十一歳の時、王純甫の別に臨み「某告以

王子の第一義

變ニ化氣質全書四 卷一四とて、平時氣質の上、憤怒し易き者憂懼し易き者が、變故屈辱に遭ふも、能く憤怒せず憂懼せざるを以て氣質變化の義となす。又た五十四歳の時、董羅石の爲に従吾道人記を作つて曰く、

王子の氣質變化

君子の學は以て其氣質を變化するを求むるのみ。氣質の變し難きは、客氣之が患をなして人に屈下する能はざるを以て、遂に自らはとし自ら欺き、非を飾り教を長するに至る全書一 卷一

氣質變化の言、時に王子の筆端に上るもの此の如し。蓋し昏濁駁雜の氣質、之を變化するを要せざるに非ず、而かも客氣を去るは其の尤も要なるものなり。客氣消散すれば天理行はれ、氣質言ふに足らざるものあり。故に前文に續いて氣質客氣の説を結びて曰く、

客氣消て
天理行る

苟も惟だ理に是れ従ふて人に屈下するを難んぜずんば、客氣消へて天理行はれん。天下の大勇に非ざ

れば以て此に與かるに足らず同上
又た其の矯亭の説に曰く、

矯と曰は
す克と曰は

君子の行は理に順ふのみ、矯を事とする所なし。然れども氣質の偏あり、柔に偏する者は之を矯むるに剛を以てす、然れども失はば傲となる。慈に偏する者は之を矯むるに毅を以てす、然れども失はば刻となる。凡そ矯めて節なければ過ぐ、過れば復た偏となる。故に君子の學を論するや、矯むと曰はすして克つと曰ふ。克つは以て其私に克つなり、私に勝たば理復して過不及なけん。矯は猶未だ意必を免れず、意必は亦た私なり。故に己に克たば、矯は必しも言はず、矯むるもの未だ必しも克己の道を盡さず。然れども矯めて其可に當らば亦た克己の道なり。全書七卷

以上の見に徴するに、學は習氣の惡即ち汚染を去つて、天理自然の善即ち運用に復るに在り。其處に到るには、氣質を變化すと云ひ、性偏を矯むと云はんよりは己に克つに在り。己に克つは人欲を去るなり人欲を去るは格物なり、格物は致良知なり、致良知の下天理流行す、是れ王子の本旨なる如し、

四、善 惡 一 物

天理の自然に循へば善なり、習氣に動けば惡なり。善と云ひ惡と云ふ、其間に混す可からざる分界あり。而かも又た王子に善惡一物の説あるを忘る可からず。此説蓋し程明道に本づく。明道曰く、

惡も亦性

善固性也。然惡亦不可不謂之性也二程全書卷一

惡も天理

天下善惡皆天理。謂之惡者。非本惡。但過或不及。便如此同上卷二

善惡は對
立の物に
非ず

夫れ惡も亦た之を性と謂ひ天理と謂ふ所以は何つくにあるか。門下嘗て王子に問ふて曰く「先生嘗て善惡は一物と謂へり。善惡の兩端は氷炭の相反する如し、如何ぞ之を一物と謂ふや」と。王子答へて曰く、至善は心の本体なり、本體上纔に此の過當あらば便ち是れ惡なり。是れ一箇の善あり、卻て又た一箇の惡あり來て相對するに非ず。故に善惡は只一物也傳下一五

善惡は一
物の兩名

問ふ者此答を得て、又た程子の善惡皆性の旨を覺りたりと云へり。蓋し本體の上原と善惡の名なし、善惡は過と不及との上に名づくる一物の兩名に過ぎずして、一つの善あり、又一つの惡ありて常に之と相對するに非ず。心の本体は至善なり。本體の動くや、習氣之を拘蔽して惡となるも、其の惡となりて動くもの、亦豈他物ならんや、依然本性の動なり、天理の動なり。只動く可からざるに動かば之を過と曰ふ、動くべきに動かさば之を不及と曰ふ。譬へば刀劍の如し、用に當れば活人劍となり、用を誤らば殺人劍となる、活も殺も一箇の刀なり。又譬へば雨の如し、節に當れば膏雨となり、度を過ぐれば淫雨となる、膏も淫も同一の雨なり。善惡も亦此の如し、本と二物ありて相對するに非ず。善流れて惡となるも、善の外に惡あるに非ず、善の動き方が惡しきなり。惡化して善となるも、惡の外に善あるに非ず、惡の動き方が改まりたるなり。習氣に動けば惡と云ふも、其實本體が習氣の染汚を受けて其素質を變す

過不及
活も殺も
膏も淫も
一雨

薛侃草花
の間答
軀殼念を
起す

るに非ず。本體は本のまゝなれども。其れが動き過ぎ又は動き足らず、茲に惡の名を生ずるのみ。

草花に善
惡なし

弟子薛侃嘗て花間の草を去り、因て曰ふ「天地間何ぞ善は培し難く、惡は去り難きぞ」と。是れ草に善惡を分ちたるなり。王子曰く「此等は善惡を見るに、皆軀殼より念を起せり。便ち錯り了る」と。軀殼とは自己なり、即今花間の雜草を抜き去りつゝある自己の情識より念を起せるなり。侃未だ會得せず。王子更に曰く「天地の生意は、花と草と一般なり、何ぞ善惡の分あらんや。汝花を觀んと欲せば、花を善となさん、草を用ひんと欲せば、復た草を以て善となさん。此等の善惡は、皆汝が心の好惡に由て生ず」傳上と。然り、自己即今の立場より論せば、相對的にして善花惡草の稱立つも、絶對なる天地の生意より之を見れば、孰れを善とし、孰れを惡とせんや。人心亦同じ、本體は天理のまゝなり、廓然太公なり、

當と過當

元と善惡なし。其處に一分の意思を着け、忿恚好樂する所あらば、是れ過當にして惡の名立つ。惡の名既に立たば、之に對して善の名も立つ。善惡は本性の上の當と過當とに名づくる一物の兩名なり。要するに、善惡一物の義は、絶對の上より看たる觀念にして、相對の上修爲の工夫上に在ては、必ずしも此に論及するを要せず。されども學ぶ者此に見徹せざれば、竟に善惡の真相を誤ることあらん。

第八章 本體即功夫

潜菴の絶
叫

春日潜菴 名仲襄 京師儒 曰く「姚江眞傳更無三秘訣。本體即功夫。功夫即本體。苟善徹于此語。則千古之眞傳在于此矣」潜菴遺稿語錄と、我潜菴をして、王學の眞傳と絶叫せしめたる「本體即功夫」の眞旨果して如何。蓋し王子が致良知の三字を掲げて斯學の端的を表明するや、爾來簡は益簡に、易は益易に、千言萬語此三字に歸入し、百川海に朝宗する概あり。而て一面には體用一源の見地益圓熟精透して「本體即功夫」の立言となり「致良知」の教旨をして益活躍透徹せしむ。本論は實に斯學の底蘊なり。

斯學の底
蘊

體用の釋

體用一源 體とは本體なり、本體とは根本的統體の義なり。用とは作用なり、又た之を功夫と云ひ工夫と云ふ、義を營築の功程夫役に取り、或は思索に或は行爲に、凡そ運思用力に係るものは皆功夫なり、工夫なり。さて體用の關係をして植物に根ありて然る後枝葉あり、生物に四肢ありて然る後動作あるの意に止まらしめば、體は靜にして用は動なり、體は前にして用は後なり、其差別固と明かにして多言を費さざるも、而かも是れ形氣上の體用にして、理致上の體用を律す可からず。形氣は本と差別の稱なり、故に體用前後の目立つべきも、理は一理なり、一理の上何れを體とし何れを用とせんか。

寂然と感
通

澄觀華嚴
經疏

程子易傳
序

易に云ふ「無思也。無爲也。寂然不動。感而遂通天下之故」繫辭下傳と。寂然不動は果して本體か、感通は果して作用か。佛徒に體用一源顯微無間の語あり、唐の沙門澄觀の華嚴經疏に出づ。蓋し彼に在ては體は眞如の理體なり、用は萬法の事相なり、理體の微と、事相の顯と一源にして間なしとの意を表す。程伊川此語を借りて易傳の序に用ひ、易理の至微なるを體とし、卦象の至著なるを用とし、兩者本と一

朱説

源なるを表す。而かも佛徒と云ひ、程子と云ひ、一源の下已に其源を二にするの嫌なきか。朱子亦曰ふ「寂然^一は感の體なり、感通は寂の用なり、人心の妙、其動靜も亦此の如し」と。其の言を味ふに、人心に寂感動靜の體用を立つるを否む能はざるものあり。蓋し寂靜を體とし、感通を用とせば、動靜晝夜死生等の理^二を迎へて説き得べきがきも、其實動靜は遇ふ所の時にして、晝夜死生は環の端なき如し、前後もなければ内外もなし。さらば始めより知行を合一し、理氣を合一し、一良知の上に立てる王子に在つては、必や「本體即功夫」の底蘊に到達せざる能はざるなり。其言に曰く、

渾然一體

良知は前後内外なく、渾然として一體なるものなり。事あると事なきとは、以て動靜を言ふべし、而して良知は事あると事なきに分る、なし。寂然と感通とは、以つて動靜を言ふべし、而て良知は寂然と感通とに分る、ことなし。動靜は遇ふ所の時なり、心の本體は固より動靜に分るなし傳中五〇

鏡喩

夫れ心の本體は良知なり、良知は常に寂然に、常に感通す。寂然たるもの内に非ず、前に非ず、感通するもの外に非ず、後に非ず前後内外を合せ渾然一體なるものなり、何れの部分を本體とし、何れの部分を功夫とせん。猶鏡の如きか、鏡能く明かに能く照らす、明は體にして照は用か、抑々鏡體常に明かに常に照すか。蓋し照外に明なし、明の外に照なし、良知の體用に分つ可らざること亦此の如し。然らば鏡に對する者内に明の本體を養ひ、外に照の工夫を着けんと欲せば鏡體を毀したらん。心體も亦然り、此心を内に靜養するを以て本とし、體を立つとし、事件を外に省察するを以て末とし、功夫を着くとせば、理に

理に二理あり

心に二用あり

二理あり、心に二用あり、我心體を毀したらん。王子か動を厭ひ靜を好む工夫は、收斂に似て實は放溺なりと喝破せるも是なり。又た弟子が心を内とし事を外とし、内外より茲に功夫を着けんとするを戒めて曰く、

功夫を講明せよ

功夫は本體を離れず、本體に原と内外なし、只功夫を着けて内外を分つが爲め其本體を失ひ了る。今より正に功夫を講明せよ、内外を分つ勿れ、乃ち是れ本體功夫なり傳下五

立言宗旨 鄒東廓

本體即工夫の要旨此の如し。吾人學に従事する者は、本體に超人せんとする勿れ、循々として功夫を講明せよ、前後内外等の雜念を挾持すること勿れ。功夫の講明は、やがて本體の講明なり、致良知の功夫は、良知の本體なり、致良知を外にして良知なし、是れを王子立言の宗旨とす。鄒東廓名守益王 子高弟曰く「先師一生精力提出致良知三字。本體工夫。一時俱到(中略)本體而謂之良。則至明至健。無二毫障翳。工夫而謂之致。則復其至明至健。一毫因循不^レ得」東廓文集七 卷答馬生と、是なり。而かも本論は未發已發の問題に觸れて其蘊を發揮せり。

一、未發と已發

未發とは喜怒哀樂等七情の未だ發せざる謂ひなり、已發とは喜怒哀樂等七情の已に發したる謂ひなり其義は之を中庸の卷首に本づく。蓋し卷首の一段は、子思子が宇宙の眞諦を見徹し、性道教一本の至教

千秋不磨
言一大教

を後昆に垂れたる千秋不磨の一大教言なり。其訓に曰く、

天命之謂性。率_レ性之謂道。修_レ道之謂教。道也者不可_レ須臾離_レ也。可_レ離非_レ道也。是故君子戒_レ慎乎其所_レ不_レ睹。恐_レ懼乎其所_レ不_レ聞。莫_レ見_レ乎隱。莫_レ顯_レ乎微。故君子慎_レ其獨_レ也。喜怒哀樂之未_レ發。謂_レ之中。發而中_レ節。謂_レ之和。中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。致_レ中和。天地位焉。萬物育焉。

儒門一大
公案

夫れ天命天理が人に賦しては吾人の本性となる、吾人が此の本性の儘に率へば直に其れが道となる。されば道は須臾も離る可からず、睹聞する所は固より、吾人は睹ざる所を戒慎し、聞かざる所を恐懼せざる可からず。それには人知らずして我獨り知る處を慎むに在り。元來人には喜怒哀樂七情あり、そが未だ發せずして偏倚なき處を未發の中と云ふ、そが發して節度に中る處を已發の和と云ふ。中は天下道理の由て出づる大根本なり。和は天下に達して行はれざるなき達道なり。此の中と和とを致せば、天地も位して其所を得、萬物も生育して其生を遂ぐと、是れ中庸の義なり。之を淡々看過せば、何等至難の問題に接せざる如きも、修道率性の上に實際の工夫を下さんか、未發已發は子思子が投げ與へたる儒門の一大公案なり。

程明道曰く「君子の學、廓然として太公、物來つて順應す_二程_一と。廓然太公は果して未發の中か、物來順應は果して已發の和か。程伊川曰く「中とは寂然不動を言ふ、和とは感じて遂に通するを言ふ」上_全

存養と省
察

靜中の端
倪

と。中と和とは、寂と感との如く爾かく兩分し得べきか。朱子は程伊川に本づきて居敬窮理の目を立て敬畏存養の工夫もて未發の體を養ひ、省察窮理の工夫もて已發の功を遂げんとす、其の工夫果して支離せざるか。陳白沙は靜中の端倪を見るを學的となす、果して靜寂に偏せざるか。然らば王子は如何が見たるぞ。

未發は已
發中に在
り

火と照と
は離し得
ず

中和一也 夫れ王子は已に體用寂感動靜の二にして一なることを論破せり、然らば未發と已發と亦た一ならざる可からず。弟子問ふて曰く「此心の未發の體は、其れ已發の前に在るか、已發の中に在つて之が主となるか、未發已發は前後内外なく渾然一體なるか」と。王子曰く「未發は已發の中に在り、而かも已發の中に別に未發と云ふものあるに非ず。已發は未發の中に在り、而かも未發の中別に已發なるもの存するに非ず_五傳中と。即ち未發は已發の前に在らずして、兩者相抱合せるなり。而かも其抱合は異質に非ずして、同質不可離の關係に立つ。王子巧に之を喩へて曰く「中と和とは是れ離し得ず。面前の火の如し、火の本體は是れ中なり、火の物を照らす處は是れ和なり。火を擧ぐれば其光便ち自ら物を照らす火と照らすとは如何ぞ離し得んや、故に中と和とは一なり_{張本傳}と。蓋し火と照とは之を離して語り得べきも、之を離して考ふるを得ず、何となれば原と一なればなり。中と和と亦此の如し。

未發は發
中の靈體

未發が已發の中に在ること上述の如し、然らば王子が見たる未發の中とは如何。曰く、喜怒哀樂が發せざるに非ず、已に發したる上に就いて、其處に偏倚なき自然の靈體あるを認め、之に名づけたるが未

發の中なり。猶火の照らすに照の名あり。照中に恒定不變の物あり、其れに名づけて火と云ふが如し。されば王子は更に進んで此未發の中を宣告して曰く、

未發即良知

未發之中即良知也。無前後内外。渾然一體者也。傳中 五〇

致良知の學は中庸

夫れ未發と云ひ、中と云ふ、故に動もすれば寂靜の思想を誘ひ、學人の聚訟を致す。今之を宣して良知と曰ふ、是に於て未發の中は活潑々地の良知となり、節に中るの和は致良知の功夫となり、鐵案一下亦た擬議を許さざるものあり。致良知の學は中庸の學とは是が爲なり。

未發と云ひ、已發と云ふ、解する者必ず其處に前後の別を置かんとす。王子より言へば、火あれば照あり、火は前に非ず、照は後に非ざるなり。而かも解する者猶未發の時あるべきを想像し、未發の時已發の時を説がんとす。其誤は、歐陽南野の説之を明にして餘りあり。

未發は時に非ず

夫喜怒哀樂本無未發之時。即思慮不生。安閑恬靜。虛融澹泊。亦有名可名。名之曰樂。故未發非時也。言乎知之體也。喜怒哀樂之發。知之用也。即喜怒哀樂之發。而有未發者在。故曰。喜怒哀樂之未發謂之中。猶聰明者視聽之未發。而非視聽有未發之時。傳習錄中謂未發在已發之中。已發在未發之中。不可下以動靜分者也。故心無時而不知。知無時而不發。發而過焉。不及焉。其獨知必不慊矣。無過不及焉。其獨知必慊矣。此所謂自然之節。自有之中也。不失其自有之中。所謂中也者和也。中節也。所謂致中和一者也。亦不可下以動靜分者也。(中略)以知覺

視聽に未發なし

爲已發。以良知爲未發。以發上用功爲安排。以未發上用功爲涵養。却似微分動靜。幸察之。南野文選三卷答 鼎雙江第三書

心は時として知りて發す

夫れ未發已發に前後なくば、時の思想を伴ひて、未發の時ありと思ふ可からず。未發の中とは、喜怒哀樂が發して過不及なき自然の節ある體に就いて名けたる名なり。猶聰明とは視聽の自然に就きて其體に名くるも、視聽に會て未發の時なきと一般也。鄒東廓又曰く「指其明體之大公而無偏也。命之曰中。指其明體之順應而無所乖也。命之曰和。一物而二稱。(中略)世之以中和一之致者。靜存動省之說誤之也。復高仰之諸友。未發の前に已發の時ありとして之を涵養し、又は之を看得せんとするは、王子の旨に遠きこと甚しきものなり。

中和は一物の二稱

夏匠苦心 中庸已に未發の中と、節に中る和とを立つ、則ち未發已發なしと云ふ可からず。而して之を有り云へば學ぶ者言詮に拘はり、前後を分ち、眞機を死す。左に良匠の苦心を見よ。

後備未發已發を以て分説し了るによつて、吾れ劈頭に未發已發なしと説き、人をして自ら思ふて之を得しむ。若し眞に未發已發なきを見得ば、未發已發ありと説くも原と妨げず、原と未發已發在るあり。傳下 五二

見得ば未發已發あり

有も不可なり無も不可なり

有り云ふ不可なり、無しと云ふ亦不可なり。有か、無か、學ぶ者眞諦に見到らば、有も亦不可なり、無も亦不可なり、言詮に落ちずんば幸なり。

二、戒 慎 恐 懼

朱子戒懼
の見地

中庸に云ふ「戒_二慎乎其所_一不_レ睹。恐_二懼乎其所_一不_レ聞」と。睹ざる所果して如何か戒慎し得ん、聞かざる所果して如何か恐懼し得ん、不睹と不聞と果して如何の地をか指す。朱子曰く「不睹不聞は萬事未だ萌芽せず、自家便ち先つ戒懼す、此れ便ち是れ喜怒哀樂未發の處、常に此心を提起して這の裏に在るを要す」と。或人が恐懼は己に思ふや否やを問へるに答へては「思は是れ思索したる、戒懼恐懼は正に是れ未發に防閑す」と云ひ。或人が是れ持敬なるやと問ふに答へては「亦是」と云へり。中庸輯 疏註 眞西山は便ち言ふ「戒懼恐懼は只是れ事物未だ形はれざるの時、常々に敬を持して心を昏昧ならざらしむるのみ」と。是を以て見るに、朱子は未發を靜時の體となし、戒懼を以て靜時の存養即持敬の工夫となせること明かなり。而かも王子に在つては、未發の中は良知なりと云ひ、未發已發は一物の二稱にして、動靜前後なしと言ふよりせば、其所見亦た朱子と異ならざる能はず。曰く、

不睹不聞
は本體戒
懼は功夫

睹ざる聞かざるは是れ良知の本體なり。戒慎し恐懼するは是れ致良知の工夫なり。傳下 七三
是に由て觀れば、不睹不聞は萬事未萌の地に非ずして、良知の本體なり。戒懼は靜時の持敬に非ずして致良知の工夫なり。然らば良知の本體とは如何。曰く、
睹ざる、聞かざる、思ふことなく、爲すことなきは、稿木死灰の謂に非ず、睹聞思爲皆理に一にして、

不睹不聞
の眞解

戒懼即良
知

未だ曾て睹聞思爲する所あらざるなり。即ち是れ動いて未だ嘗て動かざるなり。傳中 四九
是に由て觀れば、不睹不聞とは、眞に睹ざる聞かざる寂然の地を謂ふに非ずして、目睹耳聞一に理に循ふて作爲執滯なきの地を謂ふなり。従つて戒懼は常に良知をして良知的に流行して息まざらしむる作用に外ならず。是に於て遂に戒懼即ち良知の説を立つ。之を疑ふ者あり、王子曰く、
能く戒懼恐懼するものは是れ良知なり。傳中 五三
されば、戒懼せざるものは良知に非ず、火は必ず炎上し、水は必ず潤下す、良知は必ず戒懼す。説いて此に至らば、縱令前後を立てざるも、不睹不聞を本體とし、戒懼を工夫となすは、既に王子の本旨に非ず。故に曰く、

戒懼は本
體不睹不
聞は功夫

不睹不聞は本體を説き、戒懼恐懼は功夫を説くや否や。先生曰く、此處信得すべし、本體原と是れ睹ざる聞かざる的、亦た原と是れ戒懼恐懼的。戒懼恐懼は、曾て睹ざる聞かざる上に在て些子を加へ得ず。見得て眞なる時は、便ち戒懼恐懼は是れ本體、睹ざる聞かざるは是れ工夫とも亦謂ひ得ん。傳下 三三
本體功夫の合一、是に至り説き得て餘蘊なし。夫れ戒懼は、戒懼すべく些の努力も用意も加ふべきなく不睹不聞の本體自らなる眞機なり。猶目は見、耳は聞くも、見るもの目か、目なるもの見るか、聞くもの耳か、耳なるもの聞くか、彼此分ち得ざるが如けんか。更に喩へば、戒懼は猶人の生意の如きか、生意五體に充溢して人を成す、之れなければ人亡し、戒懼なくば亦良知亡けん。又之を彼の劍に達する者

衲家滿身是戒懼

に喩へんか、彼れ未だ曾て戒懼せず、而して問の乗すべきなし、即ち滿身是れ戒懼に滿つるなり、良知も亦然り、未だ曾て戒懼せず、而して良知の全體是れ戒懼に滿つる如し、他なし戒懼は良知の生命なればなり。嘗に然るのみならず、戒懼は是れ宇宙の眞機なり。曰く、

戒懼は宇宙の眞機

戒懼の念は是れ活潑々地、此れ是れ天機息まざる處、謂はゆる維れ天の命於穆として已まざるものなり。一たび息まば更ち是れ死す、本體の念に非ず、即ち私念なり。傳下

良知の體は戒懼の極致

戒懼は天命の流行なり、天の天たる所以なり。天すら且つ戒懼す、況や人をや。本體即ち功夫にして、戒懼を外にして良知なし。嗚呼良知の眞體は思ふなし爲すなしと云ふ、其の實戒慎恐懼の極致なり。後の良知を言ふ者、猖狂自恣に陥らざれば、虛寂無用に落つ。王門聶雙江名は豹王門高弟歸寂の説の如き、良知を以て未發となし、知覺を以て已發とし、發上に功夫を用ゆるを斥けて安排とし、未發上に涵養の功を用ひんと要し、同門の鄒東廓、歐陽南野等と辨難相下らず、王子の深旨に悖るを知らざる可からず。

雙江と歸寂

未發前氣象 良知自然の感應は即寂即動にして、別に未發前に認むべき氣象なきことは、王龍溪が「良

前に未發なく外に已發なし

知神感神應。即此是寂。若此知之前別有未發。便是守寂沈空。此知之外別有已發。便是緣情逐境。皆落兩邊見解。非中道也。龍溪集卷一六謂へる如し。而かも程子門下の楊龜山より傳はれる學風は、喜怒哀樂未發の體を體認せしむ。羅豫章曰く「未發の時、いかなる氣象たるやを看よ」と。未發の氣象果して如何に見んか。施四明名邦曰く、

心上に一物を多くする勿れ

人只一心。思、正心之不_レ息處。戒懼即思也。総無_レ加_二於心體之本然_一。若_二空寂_一者。是於心上多_二一_レ空寂之念。安排者。是於心上多_二一_レ安排之念。俱失_二心之本然_一。所以未_レ免_二認_レ賊爲_レ子_一。先儒教人。常想_二未發氣象_一。正是此意。陽明集要理學篇三卷

王門の未發氣象

夫れ思は心の本領なり。戒懼は即ち思ふなり。若し戒懼の前更に空寂を求めんとするは、心上に一の贅物を附綴するなり、其結果は沈空枯寂槁木死灰の死境涯を現じ得んのみ。されば王門に於いて若し未發の氣象を想ふと云はば、そは感應の上に自然の神機を認むるに外ならず、靜時にも戒懼し動時にも戒懼する端的を認むるに外ならず、心上に空寂を附綴す可からず。四明が戒懼の地に向ひて未發の氣象を想ふの言を爲せるは、深く王子の正意を得たるものなり。

要するに、戒懼は心體の本然なり。已發の前に未發あるに非ず。體用の言立つて、學ぶ者用上の功夫を迂とし、直に本體の風光を看得せんとし、邪徑に彷徨し、頑空枯寂に淪没せざるは稀なり。本體即功夫にして、工夫即本體なり。致知格物は即ち良知本來の面目なり。姚江の眞傳其れ此に在り、其れ此に在り。

姚江眞傳

第九章 理氣合一

理氣合一は王子の宇宙觀人生觀を組成せる骨髓の觀念なり。又た其學を氣學と稱する所以も、一に此觀念に本づく。

一、理 氣

理とは何ぞ

理とは何ぞ。其字本と玉の筋目を意味す。次に物々皆筋目あるより延いてあらゆる筋目を代表する詞となる、地理と云ひ水理と云ふ如し。更に延いて宇宙萬有生成の筋目を釋ね、其根本原理を推定して之に理の名稱を附するに至る。此に至つては理は哲學上に於ける本體的の詞となれり。

氣とは何ぞ

氣とは何ぞ。其字本と雲氣と云ひ氣息と云ふ如く、氣體を意味す。次にあらゆる氣體より發動する抽象的の力を代表する詞となる、靈氣と云ひ勇氣と云ふ如し。更に延いて宇宙萬有變化の動力を釋ね、其の根本原力を推定して氣の名稱を立つるに至る、此に至ては氣は哲學上に於ける本體的の語となれり。

宇宙の本體

理氣合一とは何如、是れ宇宙本體論と相關す。宇宙の本體は各種の元素若くは五行等より成立すとせば多元論なり。理と氣との二元より成立すとせば理氣二元論なり、次に理と氣とは合一にして離れ得べからず、元來一箇と見ば是れ理氣合一の説なり。而かも合一論にして、理を本として氣を視ること理の作用の如くは即ち理一元論とす。氣を本として理を視ること氣の條理の如くは氣一元論とす。王子は最後の氣一元論の上に立つものなり。

王子の氣一元

二、宋儒の宇宙觀

易の太極

古代に於ける宇宙觀は、大抵多元の形式を取れるが、易傳に至りては明かに一元論に進みたり。易の繫辭傳に云ふ「易有_二太極。是生_二兩儀。陰陽兩儀生_二四象。四象生_二八卦。」と、是れ卦象を説明する語なれども、之を易の宇宙觀と觀て可なり。さらば易は太極一元論なり、但だ太極に解説なきを以て、後學紛々の論を致せるが、漢以來の諸儒は多く氣を以て之を説けり。

周濂溪

漢以後學者の宇宙本體に論及せる者甚少し、周濂溪名敦頤字茂叔二程の師宋に出づるに及び、易に本づいて

太極圖說

始て宇宙生成の順序を説き、推衍して倫常道義に及びし、學界をして旗色一新せしめたり。其の著太極圖說は卷頭に説き起して曰く、

無極而太極。太極動而生_レ陽。動極而靜。靜而生_レ陰。靜極復動。一動一靜。互爲_二其根。分_レ陰分_レ陽。兩儀立焉。陽變陰合而生_二水火木金土。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。

無極の眞意

是を以て觀るに、濂溪は固より太極を宇宙の本體とせる太極一元論者なり。而かも宇宙の本體を「無極而太極」と道破し、易の太極に加ふるに無極の二字を以てせる眞意は如何。果して氣を指すか、抑々理か、諸家異説なきは能はず。陸象山兄弟山兄梭は太極の上に無極の字を加ふるの不當を論じて太極圖說を

疑ひ、朱子と當時辨難して相下らざりき。朱子は無極を無形と釋し、太極を有理と解し、「無極而太極」を無形にして有理の義なりと説明し、理を以て太極を説いたり。而かも本文に陰陽二氣は一太極と云ひ其の太極は本と無極なりと繳結する所に見れば、氣を以て太極と解し、而かも其太極や、方所なく定在なきを示すため、無極の二字を加へたりと見るを妥當とせんか。さらば濂溪はまた氣一元論なり。

濂溪の後、張橫渠あり、太虚を以て宇宙の本體となす、是れ太虚一元論なり。而て太虚即氣と云ひ、易の太極を氣と見たるよりせば、張子も氣を以て太極を解する太極一元論なり。

程子兄弟 程明道は宇宙の本體を易と見、易繫辭傳の「生々之謂易」に本づき「天は只是れ生を以て道となす」二程全書二卷と云ひ「道は則自然に生々して息まず」全上十卷六卷と云ひ、又た「天地の間只感と應とあるのみ、更に甚事かあらん」全上と云ひ、感と應との二作用を以て天地の全體と見、生々を以て天地の徳となせる處

是れ生成變化の二氣を以て天地の本體となす氣一元論と謂ふを得べし。

程伊川に至つては、兄明道と頗る其方途を殊にす。太極を説いては道と曰ひ、理と曰ひ、形而上と曰ひ。易の「一陰一陽之謂道」を解して、陰陽變化する所以の理は道なり、陰陽其れ自身は氣なり、氣は形而下なりと曰ひ、氣を以て太極の發現となせり。是れ明道の氣一元に對し、伊川は理一元に立つものなり。

朱子 朱子は太極伊川を祖述す。曰く「太極只是一箇理字」又曰く「太極者象數未形而其理已具之稱」性理大全二六卷

と、而て萬物四時五行は皆太極中より來るとなせり。是れ太極に本づく理一元論に似るも、更に其の氣を説くを見んか、氣は理の發現と見ずして、理氣併存を認定せり。曰く「天地之間有理有氣。人物之生必稟此理。然後有性。必稟此氣。然後有形」と。又曰く「理與氣決是二物」同上と。又理氣は先後を分つ可らざるに似たりと云へるに答へて「要之先有理」同上とて、理は先にして氣は後なるを承認せり。されば朱子は明かに理氣二元論なり。

三、王子の宇宙觀

王子の宇宙觀は蓋し明道に負ふ所あり。明道は天地の生々化育を仁の上に推拓し來れり。王子は之を良知の上に推拓し出せり。而て王子の見徹せる宇宙の本體は、生々流行して一息の停滯なき氣機なり。曰く、

天地の氣機元と一息の停ることなし傳上六三

天地の間活潑々地此理に非らざるはなし、便ち是れ吾良知の流行息まざるなり傳下七二

天に充ち地に塞りて、中間只この靈明あり。中略便ち是れ一氣流通的傳下五七

王子の宇宙觀や實に斯の如し。故に太極を説くや又た生々の眞機を以てして曰く、

太極生々の理、妙用息むことなし。而て常體易はらず。太極の生々は即ち陰陽の生々なり傳中五一

王子太極
說解釋

本體と氣
機

理氣二物

伊川の理
一元

太極は一
箇の理字

濂溪の氣
一元

張橫渠と
太虚

明道と天
地生々

程子兄弟

程伊川

朱子

王子太極
說解釋

太極の生々は陰陽の生々なり。斯くて王子より見ば、上天下地宇宙に磅礴するものは氣のみ、否宇宙其れ自身が生々流行の眞機に外ならざるなり。然らば王子は理と氣とを何如に見たるか、曰く、

王子理氣の解釋

理なるものは氣の條理なり。氣なる者は理の運用なり、條理なければ則ち運用する能はず、運用なければ則ち亦其謂はゆる條理なるものを見ることなし。傳中四六、全書三卷四三

理氣は一體兩名

右に因れば、理とは一氣が生々流行して自然の條理ある所に名づけたる名なり。氣とは生々流行して息まざる所に名づけたる名なり。兩者何れを本とし何れを末とせん、本もなく末もなく、理と氣と一體の兩名なり。理は氣に現はる、筋目スズメにして、氣は理を現はす働きなり、合一に非ずして何かせん、此の合一したる所即ち王子宇宙觀の立つ所なり。

物あれば則あり

氣一元 理と氣と合一せば、理にも非ず氣にも非ざる一種中間の物をそこに生ずと思ふ可らず。理氣合一とは、氣を離れての理に非ざることを意味す。物あれば則あり、氣あれば理あり、理は物上の法則なり、此物なくして此理いづくに附在せん。宇宙は一氣なり、一氣の活動に兩方面あり、屈と曰ひ伸と曰ふ、前者を陰と云ひ、後者を陽と云ふ、一陰一陽雲行き雨施し、四時交替し百物生成し、一絲紊れず、之を天理と名づけ天則と稱す、易の謂はゆる「一陰一陽之謂道」とは是なり。易は明かに一陰一陽の屈伸變化するを道と云へり。伊川及朱子は陰陽を形而下とし道と曰ふを欲せず、因つて所以の字を添へ一陰一陽の屈伸變化する所以の理が道なり、理ありて陰陽二氣其後に屈伸すと見る、是れ程朱が理一元

一陰一陽之謂道

理は氣の理

若くは理氣二元論たる所以なり。王子に在つては、陰陽屈伸の前先づ理あるに非ずして、陰陽が屈伸して理が其處に現はる、なり。故に理と曰へば既に氣あり、氣と曰へば既に理あり、兩者合一して離る可らず。而かも氣は理の氣に非ずして、理は氣の理なり。是れ王子の理氣合一は即ち一元に立ちて、之を氣學と稱する所以なり。

氣學

高景逸 劉念臺

王子の宇宙本體觀は此の如し。然れども本體を説くは王子の志に非ず、但だ此に本づいて人生觀を得以て率性進徳の人道を説かんと欲するのみ、重きは人生觀に在り。故に平日の訓言多くは一氣の條理なる理の方面に根由し來るを常とす、中年の教旨が一にも天理二にも天理の觀あるは是が爲めなり。而かも其の天理は一氣流行の上に現はる、天理なることを忘る可らず。之を後儒に見んか、高景逸名攀龍明末東林黨首曰く「天地間渾然一氣而已」と。又た劉念臺名宗周明末人曰く、

盈天地間一氣也。氣即理也。又曰理即氣之理。斷然不在氣先。不在氣外。全書十一卷學言中

是れ王子の旨を的確に闡明したるものと謂ふべし。天地は一大元氣なり、理は氣の理なり、氣先に在る可らず、若し氣先に在らば、理一元又は理氣二元論となり、王子の旨に非ざるなり、

四、王子の人生觀

宇宙觀は人生觀を生し、人生觀は宇宙觀に合す、是を以て學に根柢あり、教に權威あり。請ふ王子の

人生觀を考究せん。

性氣合一 理氣合一の宇宙本體觀は當然の順序として茲に性氣合一の人生觀を生ず。朱子に在つては、形而上なる性の理と、形而下なる陰陽の氣と合一すべくもあらず。告子が「生之謂性」孟子告子上は朱子の極力排斥せる所なり。王子に在つては、宇宙の本體は生々化々の氣機なり。宇宙の分派なる五尺の人身も亦た氣機の結晶ならざる可らず。「人心與天地一體」。故上下與天地同流傳下三八とは是なり。故に又た曰く、

氣即性性即氣

天地生々即良知生々

靜坐澄心の本義 努力向上

若し自性を見得て明白なる時は、氣は即ち是れ性、性は即ち是れ氣、原と性と氣との分つへきなし傳中四五王子の自性を認むるや、性即氣の上に於てす。故に人生の窮竟を寂然不動の理體に求めずして、生々化々の氣機に於てす、是れ良知の拈提ある所以なり。其言に曰く「良知即是天植靈根。自生々不_レ息」傳下二四。天地の生々は人に在つては良知の生々なり。故に門人が念慮の屏息し難きを憂ふるや、答へて曰く「念如何可_レ息。只是要_レ正」傳下四。又曰く「實無_レ念時」同上。人心は思念の相續なり、良知は生々と働さづめなり、生々一たび息めは良知毀る、思念一たび息めは人身死す。靜坐と云ひ、澄心と云ふも、間思雜慮を掃去るのみ、活ける吾人に無念無想の時あるべき筈なし。致知格物努力向上し、天地の氣化と一般生々息まざるは、即ち王子の人生觀にして又た良知說なり。

樂是心之本體 人生觀を説く者、厭世と云ひ、樂天と云ひ、吾人棲息の土を、苦界と云ひ、樂土と云ふ

心樂めは三界樂土

常人は樂を棄つ

心の安處是樂 人世歡樂の舞臺

果して然るか。蓋し土に苦と樂となく、觀に厭と樂となし。我心苦めは天地皆厭ふへく、我心樂めは三界皆樂土なり。王子は、人心は本來は樂めるものと斷して曰く「樂は是れ心の本體なり」傳中六二。然らば世人が擾々焉戚々焉常に憂苦多くして歡樂少きは何に由るか。曰く、聖賢に眞樂ありと雖、亦た常人の同しく有する所なり、但だ常人は之を有して自ら知らず、却て許多の憂苦を求めて、自ら迷棄するのみ。憂苦迷棄の中に在りとも、此樂未だ嘗て存せずんばあらず。但だ一念開明し身に反して誠あらば、樂此に在り傳中六二。歡樂の心體は聖愚皆同し、但だ凡夫は自ら憂苦を求めて歡樂の心體を掩ふのみ。さらば父母の喪に遇ひて哀哭する時此樂ありや否やと問へるに答へて「須らく是れ大哭一番して方に樂しかるべし。哭せざれば樂しからず、哭して此心の安き處即ち是れ樂なり」傳下四六と云へるを以て見るべし。人生は是れ歡樂の旅程にして、人世は是れ歡樂の舞臺なるを。

第十章 萬物一體

凡百境界 吾人は差別の上を生ず。國土に限られ、形軀に限られ、凡百の境界は吾人五尺の身を寸々に區劃する。是に於て彼我と云ひ、大小と云ひ、貴賤と云ひ、物と云ひ、人種と云ひ。敵味方と云ひ、區分的稱

呼雜然として起る。然らば宇宙は斯く区分さるべきか、萬物は斯く對立すべきか、此に向つて否と唱ふものは天地萬物一體觀なり。

一、先儒の一體觀

元來儒教は差別の上に立ち名教とさへ云ひて、倫常名分を正して人道を履修するを主とす、故に差別に精しくして一體觀に疎き感なくんはあらず。而かも孔子の仁、中庸の誠は一體觀の上に立てることを推定するに難からず。孟子に至ては明かに言へり「萬物備_二于我_一。反_二于身_一誠。樂莫_レ大_レ焉_レ」孟子 心上と。萬

孟子の一體觀

禮運の一體觀

人は天地之心

物が五尺の我に備はるとは何の義ぞ、萬物と我と元と一體なるを謂ふにあらずや。而かも吾人は物我の小見に捉はれ、此觀念に住する能はず、如何にせば可ならんか、他なし身に誠ならんのみ。中庸に曰く誠ならされは物なしと、誠は心上種々の區劃障壁を撤り去り、萬物をして悉く我心に流入せしむればなり。而かも孟子滿腔の精神は王道に注ぐ、故に一體觀は十分の開展を見るに至らざりき。禮記禮運篇に云ふ「人者天地之心。聖人耐以_二天下_一爲_二一家_一。以_二中國_一爲_二一人_一」と。禮運の作者知る可らざるも、思ふに孔氏の遺書ならんか「人は天地の心」の一語は破天荒の一大宣言なり。天地宇宙は一身なり、人は其間に在て能く思惟す、即一身中の心なり、宇宙と我との關係は心と身との關係なり。此觀念は孟子より一步を進めたるものなり。

宋代に入り性理の工夫彌密となれり。程明道は堂々識仁篇二程全書二卷を作り仁體を識るの要を説いて「仁者は渾然として物と體を同うす」と云ひ「此道は物と對なし」と云ひ、仁を以て天地萬物の絶對精神とせり。故に人にして誠敬を以て仁を吾に存せば、天地の用は我用にして天地萬物は一體となる。故に又た「仁者以_二天地萬物_一爲_二一體_一。莫_レ非_レ己也_上」全と曰へり。是明道の一體觀は即仁の上に一體なる也。次に陸象山曰ふ「宇宙内事乃己分内事。己分内事乃宇宙内事」と。又曰ふ「宇宙便是吾心。吾心即是宇宙」象山文集と是れ禮運より一步を進めて、吾心と宇宙と相即流通して間なき一體觀に入れり。象山の一體觀は心の上に一體なるなり。

象山と心

明道と仁

二、王子の哲學的一體觀

明道象山に至り、萬物一體の觀念頗る明かとなりたるが、王子に至りて益々精と大とを極め、哲學道徳兩方面より究明して儒教教義の萬物一體觀を大成せり。先づ哲學上より説かん。

王子龍場諷中に於いて「聖人の道は我性自ら足れり、先きに理を事物に求めしは誤れり」と徹悟せる處是れ「心即理」の信條となる。心既に理なれば、心外に物ある可らず、因て「心外無_レ物」の立言となる。心外物なければ、物心合一にして萬物は我心上一體となる。王子一體觀の基礎は此に在り。既にして致良知の教義を掲ぐるや、此良知こそ宇宙の唯一大精神大活力にして、森羅萬象は此の良知の生成に外

物心合一

良知は造化の精靈

ならずと確信せり。其言に曰ふ、

良知は是れ造化の精靈なり。この精靈は、天を生し、地を生し、鬼を成し、帝を成すも、皆是れより出づ。眞に是れ物と對なし。傳下 三一

是に因て見れば、良知は宇宙生成の母にして、萬有の根本精神なり。之を哲學より言へば、實在とも根本原理ともなり、佛教より言へば、眞如とも法相ともなり、基督教より言へば唯一神ともなるべし。而かも哲學が純理に陥り、宗教が信仰に歸するに引代へ、斯學が致知格物の人道教となる處に王子の精神を窺はざる可らず。

萬物皆良知あり

さらば絶對なる良知と萬有との關係は何如、そは萬物皆良知ありとの結論を得。其言に曰く、

人心は發竅の精

人の良知は即ち草木瓦石の良知なり、若し草木瓦石に人の良知なくは、以て草木瓦石となす可からず。豈唯草木のみ然りとせんや、天地も人の良知なくは亦た天地となす可らず。蓋し天地萬物は人と原と是れ一體なり、其の發竅の最も精なるは是れ人心一點の靈明とす。風雨露雷日月星辰禽獸草木山川土石は人と原と只一體なり、故に五穀禽獸の類皆以て人を養ふべく、藥石の類皆以て疾を療すべし。只此一氣を同するか爲め故に能く相通するのみ。傳下 三七

是を以て見れば、草木瓦石風雨山川一切有機無機の萬有は皆良知あるなり、否萬有は皆良知の顯現なるなり。されば一良知の顯現開展せる萬有は、理體上一體ならざる可らず、是れ王子が一體觀にして哲學

人は萬物の靈

上汎心論に屬す、萬有皆心ありとは是なり。然らば萬有は一良知の顯現なるに、何を以て種々の差別相を現するか、そは良知に二つなきも、其が顯現する形相に種々の差別あればなり。例せば水を盛られたる一大樽に幾多の竅穴を穿たんか、流出の水體には何等の相異なきも、竅穴の精粗大小に因り水の作用活力に多様の相異を生するが如けん。之れを王子は「天地萬物は人と原と是れ一體なり、其の發竅の最も精なる所は是れ人心一點の靈明」と云へり。されば萬物一體の一面に人は依然として萬物の靈たるを妨げず。一體は差別を孕み、差別は一體に歸す。之を哲學上より來る平等即差別觀と謂はんか。

三、王子の道德的一體觀

天來の福音

上述の一體觀は哲學的見地に立つも、道德的一體觀は、王學の大光彩を放てる所にして、邪惡に満ちたる人の世に天來の福音を傳ふるものなり。

大學問 王子の道德的一體觀は全く大學に本づく。年譜五十三歳の條に云ふ、「門人四方より集まり、環坐して聽く者三百餘人。先生之に臨み、只大學の萬物同體の旨を發し、人々に各々本性を求めて良知を極め以て至善に止るの功夫を致さしむ」とあり。而て其大旨は五十六歳思田征伐に際し、門人錢緒山に授けたる「大學問」に盡く。大意曰ふ「大學は大人の學なり、大人は天地萬物を一體とし、天下を視ること一家の如く中國を視ること一人の如し、大人の能く然るは之に意あるに非ず、其心の仁本是の如

大人は天地萬物を一體とす

くなるなり。孺子の井に入るを見て惻愷の心を起す、是れ其仁孺子と一體なるなり。鳥獸の哀鳴を聞て忍びさる心あり、草木の摧折を見て憫恤の心あり、瓦石の毀壞を見て顧惜の心あり、是皆我仁が鳥獸草木瓦石と一體なるなり、是を明德と云ふ。小人の心と雖亦固と此明德あり、唯小人は欲に動き私に蔽はれ利害相攻め忿怒相激し、其極骨肉相殘ふに至り一體の仁亡ぶ。是故に大人の學を爲す者惟私欲の蔽を去りて自ら其明德を明かにし、天地万物一體の本然即仁に復るのみ。然らば何を以て「在親民」と云ふや。曰く「明_レ明德_レ」は天地万物一體の體を立つるなり「親_レ民_レ」は天地万物一體の用を達するなり。父子君臣夫婦朋友より山川鬼神鳥獸草木に至るまで、實に之を親んで吾一體の仁を達し、然る後吾の明德初て明かにして、眞に天地万物を以て一體となすと云ふへし」と。是れ王子の大學觀にして、即亦た萬物一體觀なり。而かも此觀念は理體上然りと謂はずして、我心の仁明德至善の上自ら然らざるを得ずと謂ふなり。

明德は一體の體
親民は一體の用

王子の大精神

堂々二千言

拔本塞源論 道德的一體觀の體系は大學問之を盡すも、王子の大精神を窺はんには、拔本塞源論を玩味せざる可らず。五十四歳顧東橋の來書に答へ、最後に拔本塞源論天下に明ならずは、天下聖人を學ぶもの日に難くなり、斯人夷狄禽獸に淪まんと慨して、堂々二千餘言の大文字を成せり。先づ曰ふ、聖人之心。以_レ天地萬物_レ爲_レ一體。其視_レ天下之人_レ無_レ外内遠近。凡有_レ血氣。皆其昆弟赤子之親。莫_レ不欲_レ安全而教_レ養_レ之。以_レ遂_レ其萬物一體之念。天下之人心。其始亦非_レ有_レ異_レ於聖人_レ也。特其間_レ於有

德行を本務とす

功利の毒

我之私。隔_レ於物欲之蔽。大者以小。通者以塞。人各有_レ心。至_レ有_レ視_レ其父子兄弟_レ如_レ仇讐_レ者。聖人有_レ憂_レ之。是以推_レ天地萬物一體仁_レ以教_レ天下。使_レ之皆有_レ以克_レ其私_レ去_レ其蔽_レ以復_レ其心體之同然。傳中右は聖人の本心と深憂とを叙べて聖學の大精神を掲げたり、之に次で聖教の大端は堯舜禹授受の精一執中の義と舜の契に命せる五教の目に外ならずとし、更に曰ふ「古の學は德行を以て本務とし、人々才能の異なるに應じて其業に就き、心を同ふし徳を一にして人己物我の隔てなし。後世聖學晦くして邪説起り。富強の説、傾詐の謀、聲利の術、雜然として起り、賢智と稱する人も亦此習染を免れず。是に於て訓誥、記誦、詞章の學術紛々角立して、聖人の學日に遠く日に晦し、其間佛者の説あり群儒の論ありしも、皆人心功利の見を破るに足らず。功利の毒人の心髓に淪浹して、習ひ性となると殆ど千年、相矜るに知を以てし、相軋るに勢を以てし、相争ふに利を以てし、相高ぶるに技能を以てし、相取るに聲譽を以てす。記誦の廣き適以て其教を長し、知識の多き適以て其惡を行ひ、聞見の博き適以て其辨を肆にし辭章の富める適以て其偽を飾り、其志一に私を濟し欲を満たすに非るはなし、是に於て聖人の學を無用とし、良知を未だ足らすとなすも亦怪むに足らず。嗚呼士今の世に生れて學に従事せむとするも、何の處にか聖人の學を求めん、實に悲むべきなり。然れども幸とする所は天理の人心に在る終に泯ばす可らず、而て良知の明かなるは萬古一日なれば、豪傑の士にして吾が拔本塞源論を聞かんか、必や沛然として江河を決するか如く、惘然として悲み戚然として痛み憤然として起つものあらんか」と。是れ拔本塞源

良知の明萬古一日

論の大意なり。秦漢以後有數の大文字大議論とす。他なし王子が萬物一體の深仁覺へず流露して此に至りたればなり。

王子又聶文蔚に答て曰く、

生民の困
苦苦身の
疾痛

夫人者天地之心。天地萬物本吾一體者也。生民之困苦荼毒孰非疾痛之切於吾身者乎。中畧世之君子惟務致其良知。則自能公是非。同好惡。視人猶己。視國猶家。而以天地萬物爲一體。求天下無不治不可得矣。中畧後世良知之學不明。天下之人用其私智以相比軋。是以人各有心。中畧自其一家骨肉之親已不能爾我勝負之意。彼此藩籬之形。而況於天下之大民物之衆。又何能一體而視之。則無恠於紛々藉々而禍亂相尋無窮矣。一。傳中 八三

右は良知を致さんと務めなば、自らは非を公にし好惡を同くして一體觀に入り、天下は求めずして治まるへし。而かも斯學明かならぬため、人各私心を長じ、一家骨肉天下民物悉く爾我勝負の私に埋没され禍亂無窮に相次ぐと慨せり。言々句句涙あるを覺ふ。

致良知の
極致王學
の到彼岸

以上は王子が道德的より來る萬物一體觀とす、哲學的と相俟つて萬物一體の大精神を發揮せり。此を致良知の極致とす、即ち王學の到彼岸なり。

平等差別
の調和

平等即差別 萬物一體は良知の本體にして、萬物一體の仁は良知の作用、吾人は平等の心もて萬物に接せざる可らず。されども人は差別の上に生れ、身あり家あり、國家社會あり、平等と差別といかに調和

せんか。そは門人か大學に厚薄を説けるを問ひたるに、王子答ふらく、

厚薄は自
然の條理

大人は物と體を同じうするも、道理上自ら厚薄あり。譬へば身は一體なれども、手足を把つて頭目の害をふせぐ如し、手足を薄んずるに非ず、道理上此の如くなるへし。禽獸と草木と同様に愛するも、草木を把つて禽獸を養ふも又忍び得。人と禽獸と同様に愛するも、禽獸を料理して親を養ひ祭禮に供し賓客を燕するも又忍び得。至親と路人と同じく愛するも、箪食豆羹を得ば生き、得ずは死する場合、寧ろ至親を救ふて路人を救はざるも我心又忍び得。是道理上まさ此の如くなるべし。大學に謂はゆる厚薄は、是れ良知上自然の條理踰越す可らず。傳下 三八

平等即差
別の眞諦

厚薄は良知上自然の條理とは、何等徹底したる觀念ぞ。仁愛の上萬物平等なるは論なきも厚薄差別は即ち平等其物が固有する自然の條理なり。宗教は平等の上に立つ、其弊や差別に疎し、儒教は差別の上に出發す、其傾や差別に著す。差別なき平等は惡平等なり。平等なき差別は惡差別なり。嗚呼平等即差別の眞諦を掲げて偏執の迷妄を破する者は、王子の一體觀に非ざるか。

五州紛争

殺齋の深慨 王子嘆じて曰ふ「今の世に生れ聖人の道を學ぶ亦難し」と。今や王子逝て四百年、五州紛争、擊擄百端、此間に在て聖人の道を學はんとす、其難きこと王子の時に倍蓰するものあり。吾人益斯學を講明せざる可けんや。查殺齋王龍溪門下名録曰ふ、

上天下地。住古來今。同此一靈竅。即所謂太極也。此竅方其未判之先。混々沌々。中涵動靜之

殺齊の一
體觀

一膜介胡
越

干戈流血
無窮に相
尋く

機。摩盪既久。自此生_レ天生_レ地生_レ萬物_一。中畧 故此靈竅者包_二含天地_一。貫_二徹古今_一。無_レ前無_レ後。無_レ內無_レ外。我與_二天地萬物_一同一竅也。故君子以_二天地萬物_一爲_二一體_一。以_二古今_一爲_二一息_一。非_レ涉_二誇大_一。理本如是也。但爲_レ有生之後。形質既具。情竇復開。種々嗜慾皆從_二形骸_一起_レ念。天地萬物若_二與_レ我_一邈不相涉。甚至_レ有_レ一膜之外便爲_二胡越_一者。俗之汚隆。世之升降。其機決_二於此_一。此學之講明。君子所以不_レ容_レ不_レ汲_レ也。闡道集 四卷

と。此の靈竅の同しき所、即ち萬物一體なる所以なり。而かも形軀生し情竇開くるや、人皆眼前の形軀に局して利害得失の打算に是れ忙しく、覺へず缺々たる小丈夫と化し了つて、一體の仁蕩焉として跡なし。甚しきは一膜の外、君親なく師友なく、胡となり越となり、干戈流血無窮に相尋く、何等の慘事ぞや。殺齊の一論王子の深旨を闡發して、餘慨盡きすと謂ふへし。

第十一章 太 虛

詩經の太
虛說

太虛の説は、宋明諸儒其所見に淺深の差あるも、大抵之に觸れざるはなし。本朝に在つては中江熊澤大墟諸儒に依つて頗る其微旨を闡發せらる。然らば古は其説なきか、否然るに非ず「上天の載_二是_一を覆_二之_一」し臭もなし」とは詩經の太虛説なり、「子四つを絶つ、意なし必なし固なし我なし」とは論語の太虛説なり、

易の太虛
説

り、「神は方なくして易は體なし」とは易繫の太虛説なり。而かも其説の古に疎にして後世に密なるは、思想當然の進歩となす。

一、宋 儒

濂溪の靜
虛

周濂溪は、聖を學ぶの方を以て無欲にありとし「無欲なれば靜には虚しく動には直し」通書第一とて、始めて虚字を提げ來つて靜時の心體を形容せり。程明道に至り、始て「心は本と至虚なり」二程と道破し、

明道の至
虚

吾人心體の本來至虚なるを説けり。而かも其虚や留滯の迹なきを謂ふに外ならず、故に明道の太虚説は有名なる「定性書」となりて表はれたり。其要旨に曰ふ、

定性書

夫天地之常以下其心普_二萬物_一而無_レ心。聖人之常以下其情順_二萬事_一而無_レ情。故君子之學。莫_レ若_二廓然而太公物來而順應_一。中人之情各有_レ所蔽。故不能_レ適_レ道。大率患在_二于自私而用_レ智_一。自私則不能_レ以下_二有爲_一爲_レ應迹_上。用_レ智則不能_レ以下_二明覺_一爲_レ自然_上。二程全書 二程粹言

太虚と自
然

右は大旨言ふ、天地は私心なし、聖人は私情なし、故に君子の學は我心體をして廓然太公ならしめ、事物の來る順應して滯る所なきを要とす。人の患は大抵私心あるを以て應迹の順に出づる能はず、私智を用ふるに因り自然の明覺に出づる能はざるに在りと。是れ以て明道の太虚説を窺ふべし。廓然太公は太虚の謂なり、物來順應は自然の謂なり、偏執なく、留滯なく、順應して事なき處。即天地の常にして聖

人の道なり。而して明道の虚を説くは心體の上を主とせり、之を天地の上に立言したるは張横渠を推さざるを得ず。

太虚は氣の本體

張横渠 太虚の説張横渠に至つて始て其宏大を極む。其説に曰く「虚は天地の祖にして天地は虚中より來る」と。さらば虚とは何ぞや、張子曰く「太虚は形なし、氣の本體なり」と。さらば太虚と萬物との關係は何ぞ、曰く「太虚は氣なき能はず、氣は聚つて萬物とならざる能はず、萬物は散じて太虚とならざる能はず」以上張子全書と、横渠の太虚説は以上の如し。此を以て天地一氣の本體となし、天地も此より生出し萬物も此より化分し、化分せる萬物は又太虚に歸すと説く處、即ち太虚を以て宇宙の根本精神となせるを知るべし。然らば太虚と人道との關係は何如。虚は至善なり、人は虚を享けて性となす、聖人は虚の至りを盡せるものなりとは其人道觀なり。故に曰く「聖人虚之至。故擇善自精」と。又曰く「太虚者自然之道。行レ之要在レ思。故曰思レ誠」以上張子全書と。是に至つて太虚は至善にして、聖學は自然の道に循つて至善の太虚に復るに在ることを知るべし。

太虚は宇宙の根本精神
聖人は虚の至り

朱子

朱子は、學説に於て頗る横渠に取る所あるも、理を宇宙の本體と看做し、居敬窮理を學問の標的とせる理學の見地に在つては、太虚説は其圈中に入り來らず。之に反して王子は氣學の上に立てり、是に於て太虚の説は、良知の眞機と抱擁して其用を神にせり。

二、王 子

王子が良知の二字を拈提して斯學の眞血脈を道破せるは既に之を論せり。而て王子は良知の體は虚にして其虚は天地の太虚より來ると信せり。因つて曰く、

良知と太虚

良知の虚は便ち是れ天地の太虚なり。良知の無は便ち是れ太虚の無形なり。傳下三四

又曰く、

有道の士は、眞に其の良知の昭明靈覺圓融洞徹なる、廓然として太虚と其體を同しうするを見るあり。全書六卷一四

一物の兩名

右に因つて見れば、良知と太虚とは不二不離の關係なるのみならず、其實一物の兩名たるを知る。昭明靈覺より良知と曰ひ、廓然無形より太虚と曰ふ。太虚なるか故に靈あり、靈なるが故に虚なり、兩者先たす後れず本末なく、内外相俟つて始て完全々々其眞を得るなり。

太虚の説は道家及禪宗の虚無寂滅に近似するを以て、學者徃々之を口にするを忌めり。さらば王子は何如に之を見たるが、其言に曰く、

仙家は説いて虚に到る、聖人豈能く虚の上に一毫の實を加へ得んや。佛氏説いて無に到る、聖人豈能く無の上に一毫の有を加へ得んや。但だ仙家の虚を説くは養生の上より來り、佛氏の無を説くは生死

仙佛の虚無は眞虚無に非ず

の苦海を出離する上より來り、卻て本體の上に意思を加ふ、是れ虚無の本色にあらず。聖人は良知の本色に還し、些の意思を着けず 傳下三四

太虚の旨我儒の據場

右に因つて見るに、仙家虚を説く、聖人は一毫を否み得ず、佛氏は無を説く、聖人は隻辭を難じ得ず。されど仙家は生を養ひ壽を長うせんとて虚を説き、靜を説き、佛氏は生死輪廻の苦を脱れんとて無を説き寂を説く、故に其虚も其無も一種の意思纏繞して心體本來の姿に非ず。之に反して聖人は是を是とし非を非とする良知本來の作用其まゝに還して寸分の意思を着けず、微塵の好惡を挾まず、是ぞ眞の虚無眞の寂靜なり。されば王子より言へば、太虚の説は我儒の獨到達する所にして、仙佛の能く窺ふ所に非ざるなり。論して此に至れば敵の壘を抜いて其本營に據るの觀なくんばあらず。

四句教に謂ふ「無善無惡心之體」と、心體は惡を留めざるのみならず、善も亦た留めず。又曰く「知來本無知。覺來本無覺」と、良知は知を留めざるのみならず、覺も亦た留めず。又曰く「この一念は但私念のみならず、好念も着け得ず。眼中に金玉の屑を入る如し、眼亦た開き得ず」傳下七四と、良知は私念を着けざるのみならず、好念も亦た著け得ず。良知の太虚なること果して如何ぞや。

虚に取る靈に取る

王子は太虚に對する信念此の如きに拘らず、其教言太虚に及ふこと少し。是れ何の爲ぞ。他なし虚と靈とは一物の二方面なれども、王子は靈の方面に取るありしなり「天に充ち地に塞かり中間只だこの靈明あり」と云ひ「天理の昭明靈覺は謂はゆる良知なり」と云ひ、良知の表章を靈明の舞臺に於て爲せり、

活學

是れ王學の活學なる所以とす。虚と言へば靜的の意思を伴ひ來る、靈と言へば動的の意思を帯ひ來る。

致良知は積極

太虚と曰へは無物の嫌あり。良知と曰へは言下に格致の工夫を生ず。太虚の上に吾人が小我偏執の疾を去るの手段は固より緊要なるも、良知の上に格致誠正の功を積み、勇往邁進して千死萬難を驅使するの積極的に如かざるなり。吾人は王子の深旨を此處に窺はざる可らず。

太虚の發動

自然 天地と人心との本來虚なるを認めなは、茲に自然てふ觀念を放過す可らず。明道が「物來つて順應す」と云へる順應は自然の謂に外ならず。蓋し自然は太虚の發動なり、其れ唯た太虚なり、故に其發動や自然なり、其れ唯た自然なり、是に於て其體の太虚なるを知る。されば良知は虚なり、故に其發動や亦自然ならざる可らず。良知は自然に孝を知り忠を知り弟を知ると云へるは是なり。而かも私意私念は常に吾人の心體を蔽ふ、是に於て父を見て孝する能はず、君に仕へて忠する能はず、自然の流行或は滯り或は歇む。因て格物の功を用ひて私に克ち理に復らば、心は廓然太公の體に復し、喜怒哀樂順應して自然の眞機に中らざるはなけん。王子が

天則の自然

吾儒の心を養ふや、未だ嘗て事物を離卻せず、只其の天則の自然に順ふ 傳下三五と謂へるは是なり。又曰ふ

七情、自然の流行に順へば、皆是良知の用、但た著する所ある可らず。著するあれば之を欲と云ふ、俱に良知の蔽をなす。

自然は良知の作用

自然は良知の作用にして、不自然は良知の蔽なることを茲に知らるへし。或は自然の上に放縱暴肆の意思を牽合し、太虚の語を嫌ひ、自然の語を忌むものあり、是れ語義を究めざる過なり。著するを欲と云ふ、著せざるは自然なり。偏するを私と云ふ、偏せざるは自然なり、蓋し一氣流行して、執滞なく阻礙なくんば、秩序井然萬變行はれ萬化成り、天則此に運り條理此に出て人道此に立つ。是皆自然の賜なり、誰か自然を放縱暴肆と云ふや。

自然の賜

三、藤樹と中齋

王子以後の諸儒、太虚の上に立論せるもの少からず。我邦に在つては、中江熊澤大鹽諸家各此に領悟する所あり、幾多發明の説を遺せり。蓋し學者著力の處を一にせず、由て入るの門を同ふせざるため、其所論に出入なき能はざるも、善く觀んか、彼此融釋一途に歸せずんばあらざるなり。

藤樹 中江藤樹曰く

太虚寥廓は神化の全體なり。本と名字なし、聖人之を名づけて易と曰ふ藤樹全書 五卷二九

太虚は神化の全體

太虚を宇宙の大精神神化の全體となすこと、横渠に契合す。又曰く、明德は人の本心にして、天の與へし所、而て人の萬物より靈なることを得る所以のものなり。其體は至虚至神にして、天地萬物の理を具す。其用は至靈至妙にして、天下の萬事に應ず、即人性の別名なり。

なり。

右は明德を以て本心人性の別名とし、其體を至虚至神とし、其用を至靈至妙とす、即ち王子良知の旨なり。

中齋 大鹽中齋曰く「太虚もまた理氣のみ」と、即ち理氣合一の上に太虚を認めたるなり。或人中齋に問ふて曰く、子動もすれば心太虚に歸するを以て言をなす、張子の正蒙より來るや否か。中齋答へて曰く「吾が太虚の説は、致良知より來る、正蒙より來らす」と、致良知に本づいて太虚の説を立つる處、中齋眞切の工夫を窺ふべし。故に曰く、

良知は太虚の靈

不_三心歸_二乎太虚_一而謂_二良知_一者。皆情識之知。而非_二眞良知_一也。眞良知者非_レ他。太虚之靈而已矣。非_二知_レ道者_一孰能悟_レ之洗心洞 割記

眞の良知を太虚の靈とす、破的の語と謂ふべし。然らば吾人は何如にして心を太虚に歸せしめんか。中齋曰く、

太虚は慎獨克己より入る

人心の太虚に歸するは、亦た慎獨克己よりして入る。若し慎獨克己より入らずは、即ち禪學の虚妄のみ。謂はゆる毫釐千里なり、故に心學者動もすれば之を誤る。上全

太虚を靜坐澄心に求めずして慎獨克己に求む、是れ太虚説の聖學に契合する所にして、中齋の工夫縝密立言苟もせざる概を窺ふべし。後の學者、中齋騒亂の迹に泥みて、其立説を云爲するは不可なり。

無物の寂

要するに、太虚を説いて無物の寂に陥り、良知を説いて有物の私に滞るものは俱に斯學を語るに足らず、王子の深旨百世に炳焉たるもの固より論するなきも、後世人各心あり、偏陋教惰譏誣排擠惟れ日も足らざる世態に蒞み、太虚の眞體自然の功夫を掲げて世道人心を導く、即亦た良知を提撕する所以に非すんばあらず。王子曰く「聖賢教人。如醫用藥。皆因病立方。若拘執一方。鮮不殺入矣。」傳、徐方に因り病を立つと、深省せざる可らず。

第十二章 四句教

源委條貫の包括

四句教は王子晩年の教言なれば、傳習錄下卷五十七 黃省曾錄と年譜六十とに各一見し、其他王龍溪文集に天泉證道記と題して其顛末を詳叙せるのみにて、其他の教旨の如く反覆縷説するに至らざりしも、斯學の源委條貫を四句に包括して後學に依據すへき標準を示したる點は、信に重要なる教法と謂ふへし。故に龍溪は「陽明夫子の學は良知を以て宗となし、門人と學を論する毎に四句を掲げて教法となす」天泉證道記と云ひ我三輪執齋は「此四言教は陽明王文成公始て門に入る人に授け給ひたる定法にて、人々受用すへき心法の大規矩也。人皆學んで堯舜となるへき大典也。聖人の道を學ばんと思ふ人は、必齋戒沐浴して敬んで是を受け、起居動作無間斷之を服膺すへき所也」四言教講義と云へり。以て四句教の如何に重要なるかを知らへし。

心法大規矩

此教言を年譜には四句宗旨と云ひ、天泉證道記には四句教法と云ひ、執齋は四言教と題せり、後人又た四句訣とも稱せり、今四句教法を省約して四句教と題す。

一、教 旨

四句教は其名の示す如く四句の文字より成り、前二句は各八字、後二句は各七字を含む、其の全文左の如し。

四句全文

無善無惡是心之體 (證道記無二字)
有善有惡是意之動 (全上)
知善知惡是良知
爲善去惡是格物

心體絕對

第一句 此句は先づ吾人の心體を説明して、善もなく惡もなきが心體の本來なりと謂ふ。蓋し天地生々の氣我に凝つて心體となる、生々の氣は靈々昭々善惡の言ふへきなし。従つて人心の本體は虚靈不昧廓然太公にして本と善惡の言ふへきなし、善惡は相對の名にして善と云へは惡あり、惡と云へは善あり。人心の體は絕對なり、本來善惡のあるへきに非ず。是れ即ち第一句の本旨にして、大學の正心の處に當

最上善

る。但し善悪なしとは空寂の義に非ず、強ひて形容せば善の善にして純粹至極の最上善なり。故に王子は數々心の本體を形容して至善と曰へり、又た「不動ニ於氣。即無レ善無レ惡。是謂ニ至善。」と云へるも是なり。執齋歌ふて曰く「行舟の何かさはらむよしもなくあしもなにはの水の心に」と、水體に順逆なし、故に舟行無礙なり。心體に善悪なし、故に鑑空衡平なり、萬法無礙なり。心を正しうせんと欲せば、先づ此心體を體當せざる可らず。

萬法無礙

意は心の發處

第二句 此句は第一句に次いで善惡の出づる起所を説明し、善あり惡あるは意の動くより生ずと謂ふなり。意とは意念なり、王子は之を釋して「心の發する處」と曰へり。それ心體は絕對至善にして善惡の言ふべきなけれども、人身は形氣の結ばるゝと共に意念必ず動く。意念動けば既に相對に落ち、善惡なき能はず。其意念が自然本體のまゝに動けば善なるも、物に觸れ事に感するや、心牽かれ情動き、或は執着し或は激厲して、本體のまゝに動く能はざるが意念の通病なり、是を惡とす。皆意の動く一念の微處に發すと知るべし。此處は大學の誠意に當る。執齋歌ふて曰く「そこなくそよぐ浪速の浦風によしあしの葉やみだれそむらむ」とは是なり。

意念通弊

第三句 此句は善を知り惡を知るものは良知なりと謂ふ。良とは何等のこしらへたる雜り氣もなく、すら〜とすなほなる義なり。吾人は一念の動に因つて、忽地善ともなり瞬間惡ともなり、隱微にして知り難く危険にして放過す可らざるは意念に過くるはなし。而かも幸とすべきは人に聖凡となく良知ある

神化の本體

點とす、此良知は是を知り非を知り善を知り惡を知り、好惡取捨寸毫の障蔽缺陷なき一大神化の本體にして、照魔の鏡破邪の劍、唯其の用ふるまゝなり。吾の方寸如何に惡念に捕はるゝも、良知の主人翁は寸分の明を損せず、機に應し事に觸れて吾人を警醒導化せんと忠實に控へ居れり。亦感謝す可らずや。さらば此主人翁たる良知は何處に存住するか、そは第一句に溯りて無善無惡なる靈體其物なりと知るべし。此處は大學の致知に當る。執齋詠して曰ふ「よしあしの影はまがはし難波江やそこ澄みわたる水の鏡に」と是なり。

不斷の仕事

第四句 此句は善を爲し惡を去るは格物の仕事なりと謂ふ。格は正す也、物は意念の上に動く細大の事皆物なり、切言せば意念其れ自らが物なり。そこで良知なる主人翁が、人心の上意念の發動に就いて、是は本心の自然なる善意念、是は形氣に動く惡意念と容赦なく嚴正に指圖してくれると共に、吾人には不斷の仕事が生ず。其は好色は好み惡臭は惡み、曲れるものは直くし汚れるものは清め、本心の落つくやう良心の満足するやう、執滯を去り邪惡を拂ひ、一念一行悉く本體の儘に流れ出でしむると是なり。即ち大學の格物にして、執齋が詠して「よしをとりあしを刈りなばふしの間に迷ふなにはの夢もさめまし」と云へるは是なり。

新奇の説に非ず

右四句教の本旨を味ふに、王子が晩年殊更に新奇の説をなしたるに非ずして、平生の主張を總括して此に表はしたるものなり。即ち斯學の全體を四句に要約して、一目の下に條貫整然たらしめたるは後學

智仁勇

向上の一路修養の關鍵

が四句教に負ふ所の恩恵なり。吾人は四句の示す所に循ふて其力を用ひんか、賢たり聖たるの逕路は歩に従つて開かるべし。執齋謂ふ、誠意の工夫は仁なり、致知の工夫は智なり、格物の工夫は勇なりと。然り吾人は先づ格物の上に不退轉の勇を振起して良知を致さんことを要す。良知茲に致されて智徳茲に完し、智徳完くして意念の發動茲に誠實に歸し些の矯飾を容れず、徃くとして仁に非ざるはなきに至らん。斯くて萬物體を我と一にし、廓然太公本來自然の心體に復る、此を向上の一路修養の關鍵とす。之を外にしては向上なく修養なし。

二、天泉の證道

錢王二子の性格

四無説

四有説

錢王二子論難 四句教の教旨が十分に發揮せられたるは高弟錢緒山、王龍溪の意見相契はざるに本づく。緒山は沈毅篤學、序に循ふて進修の功を積む底の人、龍溪は明朗高邁頓悟本體に入る底の人、兩人蓋し性の近き所に見るあるか。龍溪謂ふ「四句の教言は陽明夫子究竟の話頭に非ず。若し心體に善なく惡なしと説かは、意も亦た善なく惡なかるべく、知も物も同様なるべし。若し意に善惡ありと説かは畢竟心體にも善惡あるべし」傳下と、之を四無説と云ふ。緒山謂ふ「心體は天命の性なれば原と善なく惡なきも、人には習心ありて意念上現に善惡あり。格致誠正修は正に性體に復るの工夫なり、若し原と善惡なくば、工夫も説くを用ゐず」上と、之を四無説に對して四有説と云ふ。二人の所見斯の如し。緒山は他

天泉橋最後講學の場

利根教法

中根以下教法

一偏を執る勿れ

四句教法病痛なし

を評して師門の教法を壊るとなし、龍溪は他を難して師門の權法に執滯すとなしして相下らす、緒山言ふ吾等二人の所見同しからずは、何を以て人の意見を同うすへき、何ぞ之を先生に正さるべしと。時に王子五十六歳、思田征伐の爲め將に出陣せんとせり。其前夜二人進んで庭下に立つ、時しも夜半客散し王子臥室に入らんとせるが、之を聞いて席を天泉橋上に移さしめ、茲に師弟最後講學の場は開かれたり。

王子兩可説 王子已に兩高弟の所説を聞けり、莞爾口を開いて曰く「二君正に此一問あるを要す。二君の見正に相資けて用を爲すに好し、各一偏を執る可らず。我の人に接する、原と此二種あり。利根の人は本源上より悟入す、人心の體は原と明瑩にして滯る所なし、利根の人は一たび本體を悟れば、本體即工夫にして、人已内外一齊に透り了り悟り了る。證道記解三 其次の人は、習染の心ありて本源原と蔽を受く、故に意念上に於て實地に善を爲し惡を去るの功夫をなさしむ。功夫熟して邪惡去り盡せば、本體自ら明となる。證道記解三 汝中龍溪の字漸修工夫の字の

最後深誠 王子先づ兩説を許可し、二人相資けて用を爲すべきを諭したるが、最後に重きを緒山の四有説に歸して深く兩子を訓誡せり。曰く「利根の人は世に亦た遇ひ難し、四句教法に依り人に隨ふて指點せば自ら病痛なけん。本體工夫一悟して盡く透るは、此れ顔子明道も敢て承當せざる所、豈輕易に人に

徹上徹下
此工夫

四句宗旨
を更ふ可
らず

本體空想
の大病

望む可けんや。二君以後學者と言ふ、務めて我四句の宗旨に依るを要す。此を以て自ら修めは直に聖位に躋らん、此を以て人に接せは更に差失なけん傳下五八
及年譜。龍溪更に問ふて曰く、既に本體に透る後は、此四句に於いて畢竟何如と。王子曰く「此教法は上に徹り下に徹る語にして、初學より聖人に至るも只此の工夫のみ。初學此を用ひば循々入る所あらん。聖人に至ると雖究竟盡るなし、堯舜精一の功夫も亦た只此の如きのみ」年譜と。既にして王子又重ねて二人に囑付して曰く「二君再ひ此四句宗旨を更ふ可らず、此四句は中人上下皆接著されざるはなし。我れ年來教を立つるに幾番を更へたり、今始て此四句を立てたり。人心智識ありてより以來習俗の染む所となる、今良知上に在つて善を爲し惡を去るの功夫を用ひす、懸空に本體を假想せしめは、一切の事爲皆實に着せず、一箇の虚寂を養成するに過ぎざらん。此病痛は小ならず、早く説破せざる可らず」傳下五八
及年譜と。

王子の誠言以上の如し、この夜兩子俱に省悟する所ありしと傳へらる。龍溪は天泉證道記の末に「自」此海内相傳天泉證悟之論。道脉始歸于一二云と謂へり。斯學か王子歿後益發展せしもの、錢王二子の力多きに居るを見れば、天泉の證道の關係する所少からざるを知らん。

三、論 評

王子の錢王二子を訓誡するや、反覆丁寧頗る其蘊を叩くもの上述の如し。而かも初めは汝中の四無説

果して矛
盾か

宇宙間此
理あり

理想と現
實

堯舜と格
物

聖凡接濟

は上根の人に接すべく、徳洪の四有説は中根以下の人に接すべく、兩人相資つて之を用ふべしと説けるに拘らず、最後に二人は以後四句の宗旨を易ふ可らずと付囑して、四無説を抑へ四有説を揚げたるは、前後矛盾の感なきに非ず。思ふに是れ王子の精神を窺ふ可き處か。夫れ四無説は、心體に善惡なくば意知物の三つにも善惡なかるべしと論し、一悟直に無物の本體に超入せんとするなり。蓋し宇宙間此道理あり、故に證道記に王子は此を傳心秘藏と稱し、天機發泄と稱せり。是れ王子が先づ兩人を兩可せし所以ならんか。然れども此は理想なり、現實に非ず。現實の上より言はんか、人は智識ありてより以來既に習染あり、本體に障蔽を受けざるものなく、意念の動くや、或は過き或は及ばざるを致す。是故に人は意念の上に格物の功を用ひ善を爲し惡を去るに非ずんば、到底本體に復るを得べからず。縱令大聖堯舜の如きあるも、堯舜の上に善盡くることなし、精一の講習格物の功夫は大聖と雖之を等閑に附すべきに非ざる也。されは四無説は理想としては認容すべきも、現實としては認容すべからず。四有の説四句の教法は、現實に立ち聖凡を接濟すべく、直に徹上徹下の教法となす。是れ王子が最後に懇々説示して此四句宗旨を更ふべからずと付囑せる所以ならんか。

四句教法の深旨蓋し斯の如し。此意主として傳習錄及び年譜錢徳洪
編著に見ゆ。天泉証道記に至つては言語頗る出入あり、且つ王子の言を叙して兩可の旨に止り、最後の訓誡を闕如するは惜むべし。又鄒東廓に青原贈處の文あり。時に同志大に青原の吉郡に會し、錢王二子皆至る。二子の去るや、東廓贈處の義

を述べて曰く、

鄒東廓と四句教

陽明夫子之平_二兩廣_一也。錢王二子送_二于富陽_一。夫子曰。予別矣。盍_二各言_レ所_レ學。德洪對曰。至善無_レ惡者心。有_レ善有_レ惡者意。知_レ善知_レ惡是良知。爲_レ善去_レ惡是格物。畿對曰。心無_レ善而無_レ惡。意無_レ善而無_レ惡。知無_レ善而無_レ惡。物無_レ善而無_レ惡。王子笑曰。洪甫須_レ識_二汝中本體_一。汝中須_レ識_二洪甫工夫_一。二子打併爲_レ一。不_レ失_二吾傳_一矣。東廓文集四卷

無善無惡と至善無惡

と。東廓は王門に在つて意見醇正を以て稱せらる、而も同志に告ぐるに四句教を以てして敢て擬議する所なきは、亦た此教が王子晩年の教法たりしを認むへし。但だ緒山の第一句を無善無惡と謂はずして至善無惡と云へるは注意すべし。思ふに東廓早く王子の門を辭す、故に傳聞に出入あり然るを致すのみ。而かも此に因つて無善無惡と至善無惡と語を異にするも義を一にするを傍證するに足る。要するに後の四句教を究めんとする者は、傳習錄及年譜に遵據せば差誤なきに近からんか。

諸家疑難

四句教の由來此の如し、然るに後の學者之を疑ふ者亦少からず。周海門名汝登羅近溪門下は萬歷丁丑の進士にして、南都の講會に天泉證道的一篇を拈講したるに、許敬菴名學遠唐一菴門下九諦を作つて之を難せり。海門乃ち又九解を作て一々之を辨じたるが、大旨曰ふ「善すら無くば、更に何づくより惡を容れん。惡既に無くば、善必しも再立せず。頭上には頭を安し難し」明儒學案三十六卷。謂はゆる絶對の地善惡の言ふべきなきなり。而かも顧涇陽名憲成東林唱首馮少墟名從吾許敬菴門下等皆無善無惡の一言を以て王子を排摘せり。大儒劉念臺名宗周又戡山

許の九諦と周の九解

亦曰ふ。

念臺第一

王門倡_二無善無惡之說_一。終於_二至善二字_一有_レ礙。解者曰。無善無惡斯爲_二至善_一。無_三乃多_二此一重之繞_一乎。劉子全書學言

と。乃ち王門諸子が無善無惡を至善と解することの、徒に語義を重繞して辭を費すを非難せるなり。而かも是れ王子の眞解なるを何如せん。王子曰く「無_レ善無_レ惡是謂_二至善_一」傳上六〇と。無善無惡の立言は敢て四句教に始らす、而かして其か、至善と同一義なることも中年より唱道せる所なり。念臺更に進んで説を爲して曰く、

念臺第二

陽明先生偶一言_レ之。而實未_レ嘗筆_二之於書_一爲_レ中教_レ人定本_上。龍溪輒欲_下以_二己說_一籠_中罩_前人_上。遂有_二天泉一段話柄_一。甚矣陽明之不幸也。上全

念臺の武梨洲と學案

と。是に至ては、遂に四句教を以て王子一時の假言となし、天泉證道を以て龍溪の捏造となせるなり。是れ年譜及傳習錄を抹殺して顧みざるものにして、抑亦た斷に武なるものと謂はざる可らず。其門下黃梨洲名宗義劉明儒學案を編し、最も四句教に嫌らす、隨處に之を非議せり、師門先人の見之が主となるに非ざらんか。要するに孔子は民の秉彝を贊し、孟子は性善を標榜し、古今殆ど異辭なし。今善なし惡なしと謂ふ、殆ど學人の忌諱に觸る。而かも理體本と自ら此の如し、先聖後賢固と二見なし、説述の基點を殊にするのみ。告子の性に善惡なきの説に似るを惡むか、告子曰ふ食色は性なりと、是れ即ち情識を

告子と同異

禪と同異 以て性となし、王子の至善の説と大なる懸隔を有せり。或は佛氏の寂滅に似るを忌むか、王子の謂はゆる無善無惡の心體は活潑々地たる良知の主體にして寂滅と同しからざるなり。何ぞ無善無惡の語に忌まらんや。漢土の學者往々拘泥死著して融釋を缺くこと此の如し。請ふ之を緒山の活意見に聽け。

緒山の活意見 人之心體一也。指名曰善可也。曰至善無惡亦可也。曰無善無惡亦可也。曰善。曰至善。人皆信而無疑矣。又爲無善無惡之說者何也。至善之體。惡固非其所可有。善亦不_レ得而有也。至善之體虛靈也。猶目之明耳之聰也。虛靈之體不可_レ先有_二乎善_一。猶_レ明之不可_レ先有_二乎色_一。聰之不_レ可_レ先有_二乎聲_一也。心無_二一善_一。故能盡_二天下萬事之善_一。今之論_二至善_一者。乃索_二之於事々物々之中_一。先求_二其所_レ謂定理者_一。以爲_二應_レ事宰_レ物之則_一。是虛靈之内先有_二乎善_一也。非_二至善_一之謂_レ矣。虛靈之蔽。不_レ但邪思惡念。雖_二至善_一之念。先橫_二於中_一。積而不_レ化。已落_二將迎_レ意必之私_一。而非_二時止時行_一之用_レ矣。故師曰。無_レ善無_レ惡者心之體。是對_二後世格物窮理之學_一。爲_レ先有_二乎善_一者上_レ立_レ言也。因_レ時說_レ法。不_レ得_レ已之辭焉耳。明儒學案緒山論學書

緒山の説を玩味せば無善無惡の本義思ひ半ばに過ぐるものあらん。

四無説の簡易脱略

餘弊 四句教法に就いて餘弊を求めは、敬菴念臺諸子の排摘せし點にあらずして、龍溪の四無説に在り。上根の人は世に遇ひ難きに拘らず、四無説は簡易脱畧頗る快心の立言たり。人心は簡易を悦び修鍊を憚る。是に於いて四無の理想に酔ひ四有の現實を忘れんか、意念上の工夫を輕視し、格物克己の實功

一種無用人物

禪と近似

龍溪と師訓

他を擠して石を投す

を懈り、愚者は放縱狂肆となり、智者は虛影の上に本體を臆度して自ら喜び、一種無用の人物を作り出たすに至らん、是れ最も恐るべし。明末王學の餘弊此に陥るものなきに非ず。其人の罪と雖、亦た四無説の影響にあらずと言ふ可らず。且禪宗は坐禪見性を主とし、善を思はず惡を思はず、身心脱落一超して如來地に直入するを窮竟義とす。是れ頓悟的法門にして、四無説と非常なる近似を有せり。王學の餘弊禪と混同するは此が爲めなり。王子原と此に憂ふや切なり、故に天泉問答に於て最後の警策を下せり。龍溪と雖固より師訓に背くものに非ず、其の吳悟齋に答ふる書に曰ふ「至善無惡者心之體也。有善有惡者意之動也。知_レ善知_レ惡者良知也。爲_レ善去_レ惡者格物也」龍溪語錄抄五卷と、是れ緒山の四有説に歸入せり。謂はゆる道脈一に歸するもの茲に見るべきか。黄梨洲は更に此をすら疑へり、謂はゆる他を擠して更に石を投するものに似すや。要するに吾人は王子か立教幾番の後最後の見地を洗發したる四句教を遵奉すると共に、錢王二子に對する王子の最後の深誠を體して猛省を懈るなくんは可なり。

第十三章 誠意

最後の一關

斯學の教義は致良知の一語之を蓋ひ、功夫の體段は四句の教法之を盡し、綱張り目舉り洞然として條通せざるなきも、吾人は最後に誠意の一章を設け大學に於ける實落下手の一關を窺はん。

一、用功第一義

大學に曰ふ「古之欲明_レ明德於天下_一者。先治_二其國。欲_レ治_二其國_一者。先齊_二其家。欲_レ齊_二其家_一者。先修_二其身。欲_レ修_二其身_一者。先正_二其心。欲_レ正_二其心_一者。先誠_二其意。欲_レ誠_二其意_一者。先致_二其知。致_レ知在_レ格_レ物」と、以上數へ來れば條目八あり、吾人は先づ何れの處に向ふて手を下さるか。

八條目

大學の要は誠意のみ古本大

又曰く、

誠意の説の如きは是れ聖門人を教へ功を用ひしむる第一義なり。傳中

意とは何
そ
誠にする
とは何そ

是れ大學用功の第一義は誠意の上にあるを知る。然らば意とは何ぞ、曰く「虚靈明覺の良知感するに應じて動くもの之を意と謂ふ」傳中又曰く「凡そ物に應し念を起す處之を意と謂ふ」全書四と。然らば誠にするとは何ぞ、曰く欺かざるなり。一念の發するや、善なれば之を好むと好色を好む如く、惡なれば之を惡むこと惡臭を惡む如くして敢て掩飾放過せざるの謂なり。然らば何を以て大學用功の第一義は誠意に在りと謂ふや。曰く、謂はゆる八條目の中に於て平天下、治國、齊家、修身の正心に歸入するは言ふを俟たず。而かも心の本体は至善にして正しからざるはなし、唯だ意念に動けば始て善あり不善あり、故

意念上
下手

に意念の上に不善を去り善を爲すの外手を下すべき所なし。是れ大學用功の第一義は誠意に在る所以なり。更に之を王子の語に見よ、

意誠にし
て本體正
工夫著落

至善は心の本體なり、心の本體何そ不善あらん。如今心を正さんことを要せば、本體上何の所にか工夫を用ひ得ん、必ず心の發動の處に就いて纔に力を著くべし。心の發動には不善なきこと能はず、故に此所に就いて力を著くるは便ち是れ意を誠にするに在り。若し一念善を好む上に發せば、便ち實々落々善を好み去り、一念惡を惡む上に發せば、便ち實々落々惡を惡み去る。意の發する所既に誠ならざることなくんば、其本體如何ぞ正しからざることあらんや。心を正しくせんと欲せば意を誠にするに在り。工夫は誠意に到つて始めて著落の處あり。傳下

顧東橋問
答

第二義 誠意は用功の第一義なり、而かも學者往々之を第二義となす、是れ王子深慨の存する所なり。王子五十四歳越に在るや、顧東橋問ふて曰く「近時學者外を務め内を遺し、博くして要寡し、故に先生特に誠意の一義を唱へて膏盲に鍼砭す、誠に大惠なり」と。王子答へて曰く、

誠意の説の如きは、自ら是れ聖門人に教へ功を用ひしむる第一義なり。但だ近世學者乃ち第二義の看を作す、故に稍爲めに緊張を提綴し出し來れるのみ、鄙人が能く新に倡ふる所に非ず。傳中

大學の本
旨

右に因つて見るに、誠意が用功第一義たるは大學の本旨にして、王子が新に唱へ出せるには非ず。されば古本大學を見よ、治國平天下より格物に至りて八條目の觀あるも、傳文に移りて條目を説くや、致知